平成 26 年度

愛知県埋蔵文化財センター

年報

2015

公益財団法人 愛知県教育・スポーツ振興財団

愛知県埋蔵文化財センター

目　　次

Ⅰ.平成26年度事業概要 …… 1
調査の理由と工程 …… 2
平成26年度　調査遺跡位置図 …… 3

Ⅱ.遺跡調査の概要 …… 5
美浜町　権六遺跡 …… 6
蒲郡市　勧学院跡（範囲確認調査）…… 8
安城市　下懸遺跡 …… 9
寄島遺跡…… 11
姫下遺跡…… 13
豊田市　栗狭間遺跡…… 15
蔵平遺跡 …… 18
東小笹遺跡 …… 21
設楽町　万瀬遺跡 …… 22
西地・東地遺跡 …… 26
大名倉遺跡始め5遺跡（範囲確認調査） …… 30

Ⅲ.刊行報告書抄録 …… 33
第189集　石座神社遺跡 …… 34
第190集　車塚遺跡 …… 36
第191集　吉竹遺跡 …… 38
第192集　欠下城跡…… 40
第193集　中山砦跡…… 42
第194集　加原遺跡…… 44
第195集　石岸遺跡…… 46
第196集　モリ下遺跡…… 48
第197集　薬師ヶ根遺跡 …… 50
第198集　下新田遺跡…… 52
第200集　八畝畑遺跡…… 54
第201集　大平本城…… 56

Ⅳ.埋蔵文化財展・埋蔵文化財講演会の記録 …… 58
平成26年度 埋蔵文化財展等の活動について …… 59
第３回 考古学セミナー「あいちの考古学2014」の記録 …… 62

Ⅴ.埋蔵文化財センターの活動 …… 63
資料の貸出・提供 …… 64
ホームページほか …… 65
現地説明会・地元説明会・遺跡報告会・ …… 67
報告書作成および発掘調査現場における遺構・遺物の指導 …… 67
その他普及事業 …… 67
平成26年度愛知県埋蔵文化財センター組織一覧 …… 68

Ⅵ.水入遺跡　発掘調査報告書 …… 69

Ⅰ. 平成 26 年度事業概要

調査の理由と工程

1．発掘調査

事業主体		事業名	遺跡名	調査面積（㎡）	調査期間	調査担当
国土交通省 中部地方整備局	設楽ダム 工事事務所	設楽ダム	大名倉遺跡始め 5遺跡（範囲確認）	150	平成26年6月 ～平成26年7月	鈴木正
			万瀬遺跡	2,050	平成26年6月 ～平成26年10月	鈴木正
			西地・東地遺跡	4,220	平成26年6月 ～平成27年2月	川添
	名四国道 事務所	一般国道23号 名豊バイパス	勘学院跡 （範囲確認）	100	平成26年2月	鈴木
		一般国道153号 豊田北バイパス	東小笹遺跡 （範囲確認）	100	平成26年5月 ～平成26年10月	早野
			東小笹遺跡	2,000	平成26年5月 ～平成26年10月	早野
中日本高速道路 株式会社	名古屋支社	伊勢湾岸道 豊田東IC	水入遺跡	200	平成26年5月 ～平成26年月	町田
県企業庁 研究施設 用地開発課	豊田 工事事務所	豊田・岡崎地区 研究開発施設 用地造成事業	蔵平遺跡	2,400	平成26年5月 ～平成26年9月	武部 ・町田
			栗狭間遺跡	10,500	平成25年5月 ～平成25年11月	武部・町田 ・鈴木恵
県建設部 道路建設課	知多 建設事務所	野間河和線	権六遺跡	2,400	平成26年月 ～平成27年3月	藤山
県建設部 河川課	知立 建設事務所	中小河川改良事業 （鹿乗川）	寄島遺跡	2,740	平成26年6月 ～平成26年12月	酒井
			下懸遺跡	210	平成26年5月 ～平成26年6月	酒井
			姫下遺跡	1,200	平成26年12月 ～平成27年3月	酒井

計　27,820 ㎡

2．整理・報告書編集

	事業主体		事業名	遺跡名	調査面積（㎡）	調査年度
整理	県建設部	道路建設課 東三河建設事務所	道路改良工事（主） 東三河環状線	東下地遺跡	10,904	H.23～24
		河川課 知立建設事務所	中小河川改良工事 （鹿乗川）	寄島遺跡	10,710	H.19・ 23～26
整理・ 報告書作成	中日本 高速道路 株式会社	豊川工事事務所	第二東海自動車道 横浜名古屋線	モリ下遺跡	6,600	H.20～21
	県建設部	道路建設課 西三河建設事務所	道路改良工事（主） 岡崎足助線	車塚遺跡	9,530	H.20～23
		道路建設課	道路改良工事一般県道 春木沓掛線	薬師ヶ根遺跡	1,400	H.18～19
		道路建設課 西三河建設事務所	道路改良工事（交付金） （主）岡崎碧南線	八畝畑遺跡	3,500	H.25
		砂防課豊田 加茂建設事務所	急傾斜地崩壊対策事業	大平本城	310	H.23
		都市整備課 知多建設事務所	街路改良工事3・3・2 名古屋半田線	八巻古窯群	770	H.20～22
		下水道課 一宮建設事務所	五条川右岸流域 下水道事業	伝法寺野田遺跡	3,800	H.18・22

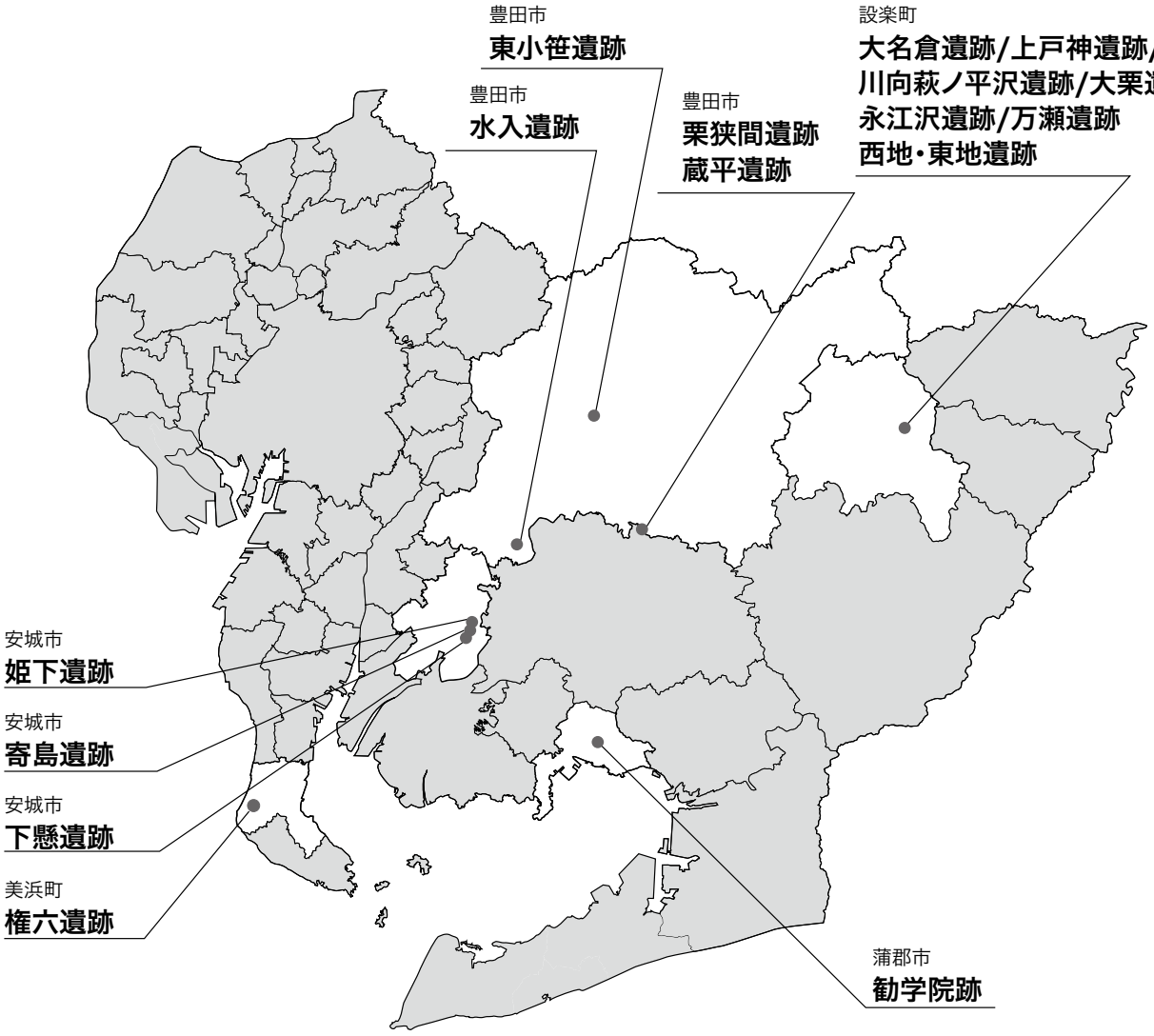
3．平成26年度刊行物

・埋蔵文化財報告書（計12冊）

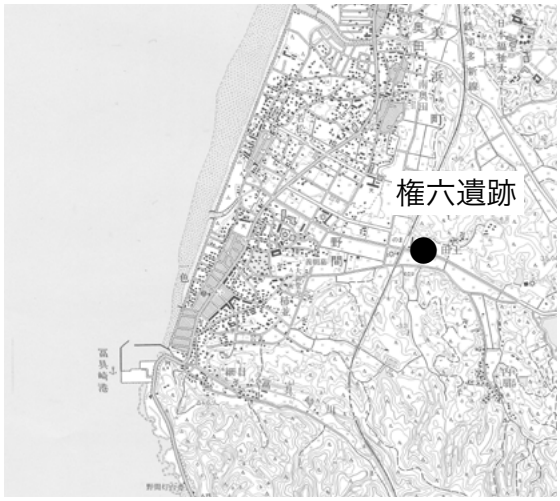
第189集　石座神社遺跡
第190集　車塚遺跡
第191集　吉竹遺跡
第192集　欠下城跡
第193集　中山砦跡
第194集　加原遺跡
第195集　石岸遺跡
第196集　モリ下遺跡
第197集　薬師ヶ根遺跡
第198集　下新田遺跡
第200集　八畝畑遺跡
第201集　大平本城

・平成26年度　愛知県埋蔵文化財センター年報
・研究紀要　第16号

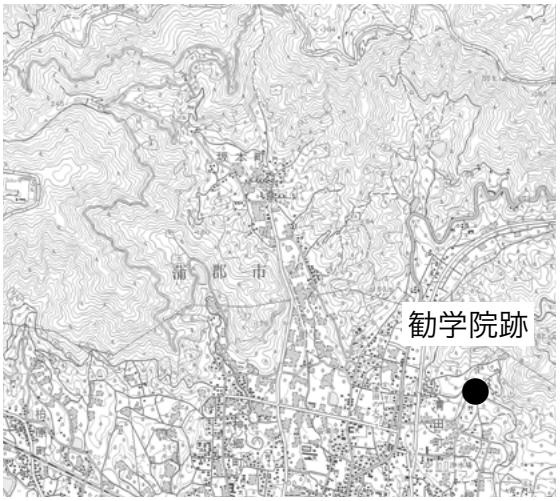
平成２６年度　調査遺跡位置図



※ 地形図は 50%縮小されています。



国土地理院 1/2.5 万地形図「野間」



国土地理院 1/2.5 万地形図「幸田」



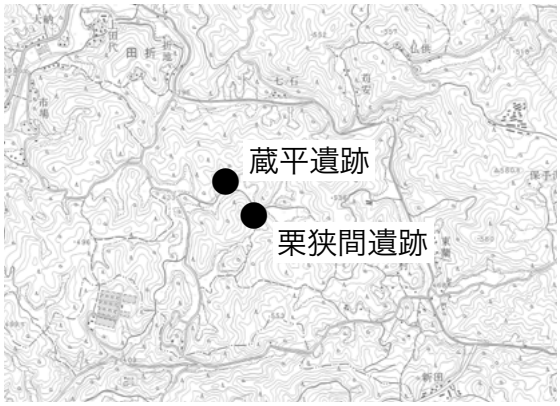
国土地理院 1/2.5 万地形図「豊田南部」



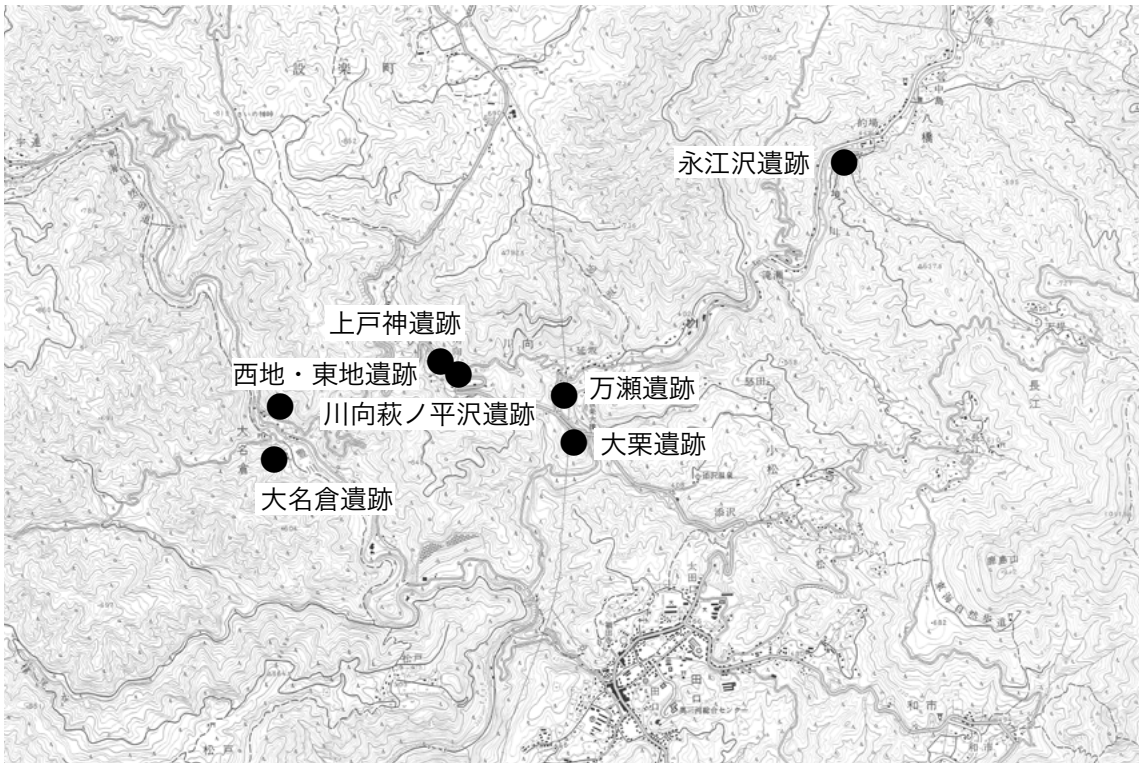
国土地理院 1/2.5 万地形図「豊田北部」



国土地理院 1/2.5 万地形図「西尾」



国土地理院 1/2.5 万地形図「東大沼」



国土地理院 1/2.5 万地形図「田口」

※ 地形図は 50%縮小されています。

II. 遺跡調査の概要

権六（ごんろく）遺跡

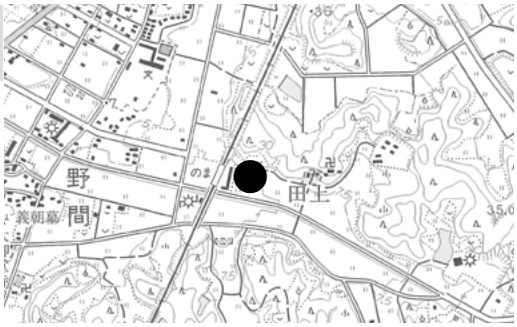
所　在　地　知多郡美浜町大字野間字権六地内
（北緯34度46分25秒 東経136度51分44秒）

調 査 理 由　県道野間河和線

調 査 期 間　平成26年10月～平成27年3月

調 査 面 積　2,400㎡

担　当　者　蔭山誠一



調査地点（1/2.5万「野間」）

調査の経過　発掘調査は、県道野間河和線の建設工事に伴う事前調査として、愛知県土木部道路建設課知多建設事務所より愛知県教育委員会を通じた委託事業として行った。

立地と環境　本遺跡は美浜町の南西側に位置する遺跡で、名鉄野間駅の東北東約100mにある。遺跡の立地は、知多半島の伊勢湾側にある丘陵の南側裾部に立地する。遺構検出面の標高は4.5mから7.0m前後で、調査区内の東西に2ヶ所の谷地形がみられる。調査区の中央付近の丘陵上には、美浜町の町指定史跡である千人塚がある。

調査の概要　調査区は名鉄野間駅のある西側から東側へ14A区～14D区の4調査区を設定し、西から東に順次調査を実施した。基本層位は地表より深さ0.5m～1.0mに表土（腐植土）層とその下にある近年の整地・盛土層が、その下にて近世後半以後の主に水田などに伴う造成とその整地・盛土層が0.2m～1.0m程あり、その下に中世以後の遺構や遺物包含層が基盤層の上に堆積していた。遺構の検出は、近世後半以後の整地・盛土層上面とその下面にて行った。

ま　と　め　その結果、中世の掘立柱建物1棟、竪穴建物1棟、柱穴列4列以上、溝10条、土坑・柱穴多数、江戸時代後期以後の井戸2基、溝2条、土坑多数と古墳時代前期後半から江戸時代にかけての出土遺物が確認できた。

今回の発掘調査によりみつかった遺構と出土遺物は、平安時代末～鎌倉時代前半に中心があり、調査地点の北にある史跡千人塚の伝承の時代と対応している。今後、この地域の歴史を考える上で、貴重な成果になるものと思われる。

（蔭山誠一）

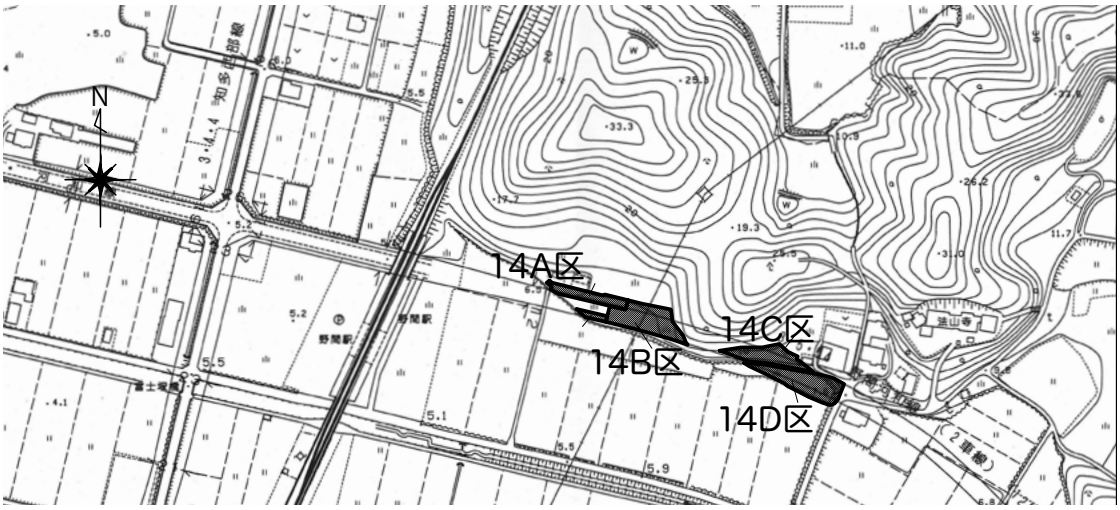


図1 調査区位置図（1:5,000）



14A区全景（西より）



14B区全景（西北西より）

勧学院跡（範囲確認調査）

所　在　地　蒲郡市清田町木森・西観嶽地内
（北緯34度50分39秒 東経137度14分30秒）

調 査 理 由　一般国道 23 号名豊バイパス

調 査 期 間　平成 26 年 5 月

調 査 面 積　100㎡

担　当　者　永井宏幸



調査地点（1/2.5万「幸田」）

調査の経過　調査は国土交通省による一般国道23号名豊バイパス建設に伴う事前調査として、愛知県教育委員会の委託を受けて平成26年５月に実施した。調査対象地は丘陵端部にあり、現況は旧果樹園などで、周辺には蜜柑の果樹園がひろがる。県教育委員会の有無確認調査の結果を受け、2×3m、1×2mの試掘坑を中心に総数26カ所設定した。

立地と環境　勧学院跡は三河国司であった大江定基（寂照）の子孫定厳が建立したと伝承のある平安時代の寺跡である。遺跡に南接する石山神社周辺の造成により、山茶碗や土師器が出土している。また、東方に隣接して６世紀代の円墳である権現山古墳が所在する。調査対象地付近の標高は55～73mである。

調査の概要　寺院跡の包蔵地として知られていた遺跡であったが、発掘調査による成果はなかった。寺院跡が存在するとすれば、丘陵端および山腹にあたる地区に寺域が点在する可能性もあり、現況で平坦面の確認できる箇所を中心に試掘坑を設定した。調査の結果、全26カ所の試掘坑において遺構は確認できなかった。石山神社に近い試掘坑（T.T.01）から弥生～古墳時代の土器片が１点出土した。これ以外に遺物の出土はなかった。

ま　と　め　調査対象地のほとんどが、近代以降に谷底を埋め造成された水田やその後果樹園の造成により地形を改変していることが調査によりわかった。今回の確認調査では寺院跡に関わる遺構と遺物は確認できなかったが、石山神社に隣接する付近から山茶碗などがまとまって出土していること、五輪塔、宝篋印塔など墓地に関わる石造物が付近に点在していることを付記しておく。

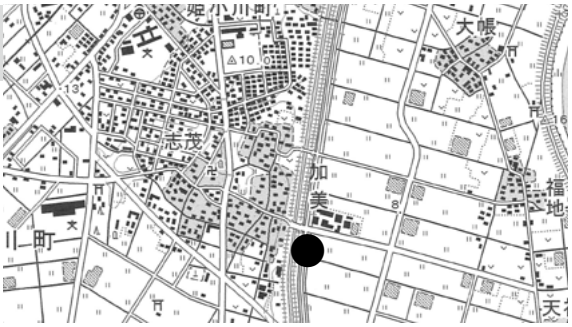
（永井宏幸）


調査風景


T.T.01 完掘状況

下懸（しもかけ）遺跡

所　在　地　安城市小川町
(北緯34度54分20秒 東経137度05分43秒)
調 査 理 由　床上浸水対策特別緊急事業（鹿乗川）
調 査 期 間　平成26年5月～平成26年6月
調 査 面 積　210 ㎡
担　当　者　酒井俊彦



調査地点（1/2.5万「西尾」）

調査の経過　調査は一般河川鹿乗川改修工事に伴い、愛知県建設部から愛知県教育委員会を通じて当センターが委託を受けて実施したものである。本遺跡は平成 12、21 年度と昨年度に鹿乗川導水路の東側と導水路と鹿乗川間の調査を行っている。今回を含めた総調査総面積は 7900 ㎡である。今年度は、導水路東側の調査を行った。

立地と環境　本遺跡は矢作川下流域、鹿乗川左岸の沖積地に立地する。右岸の碧海台地上には姫小川古墳などの古墳群が展開し、平成 12 年度より本センターが調査を行っている鹿乗川左岸には、北から南にかけて姫下、寄島、下懸、五反田、惣作の 5 遺跡が連続して所在する。鹿乗川は碧海台地東辺を南流し、川の西側の遺跡周辺は平坦な沖積地である。中世以前の鹿乗川は矢作川沖積地を蛇行して走り、本遺跡及び姫下、惣作、寄島で東西方向の旧河道が確認されている。遺跡はこの旧鹿乗川の自然堤防上に展開し、標高は 5 ～ 6m である。これまでの調査では弥生時代、古墳時代前期、古代および中世の遺構、遺物が検出されている。また、北西から南東方向に流下する古墳時代以前の旧河道が確認され、古墳時代前半の土器と木製品が出土している。

調査の概要　今年度の調査区は平成 21 年度および昨年度の調査範囲の未調査部分と昨年度の調査区の北に隣接した部分である。調査は前者に A・B、後者に C・D の 4 調査区を設定し、上下 2 面の調査を行った。上面は中世～近世の耕作土層下の古墳時代包含層である黒褐色土層面と部分的に基盤である灰色シルト面で遺構検出を行った。上面では遺構は検出されなかった。下面は基盤の灰色シルト層面で遺構を検出した。主な遺構として、古墳時代の溝群及び小土坑が検出された。溝群は幅 40cm、深さ 20cm 程度の溝が数条が平行して走り、当遺跡と北の寄島遺跡で認められる特徴的なものである。また、B 区で幅 3m で深さ 20cm ほどの東西方向の溝 1 条を確認した。平行して走る溝群の溝の遺物は極少量である。後者の溝はいままでの調査では見られない特徴のもので、古墳時代前半の土師器壷、甕、高杯が出土した。また、B 区で同時期の竪穴建物らしい落ち込みが検出されたが、撹乱によって大部分消失しているため確認できなかった。

ま　と　め　今年度の調査区 14C・14D は遺跡の北端である。調査の結果、少数の土坑のみが検出され、竪穴建物や掘立柱建物などの遺構は検出されず、集落域外であることが確認された。今後はこれまでの調査成果を踏まえ、北に隣接する寄島遺跡の関連性を検討することが課題である。

（酒井俊彦）



D 区遺構完掘状況（北より）



C 区遺構完掘状況（南より）



A・B 区遺構完掘状況（北より）



調査区全景（南より）

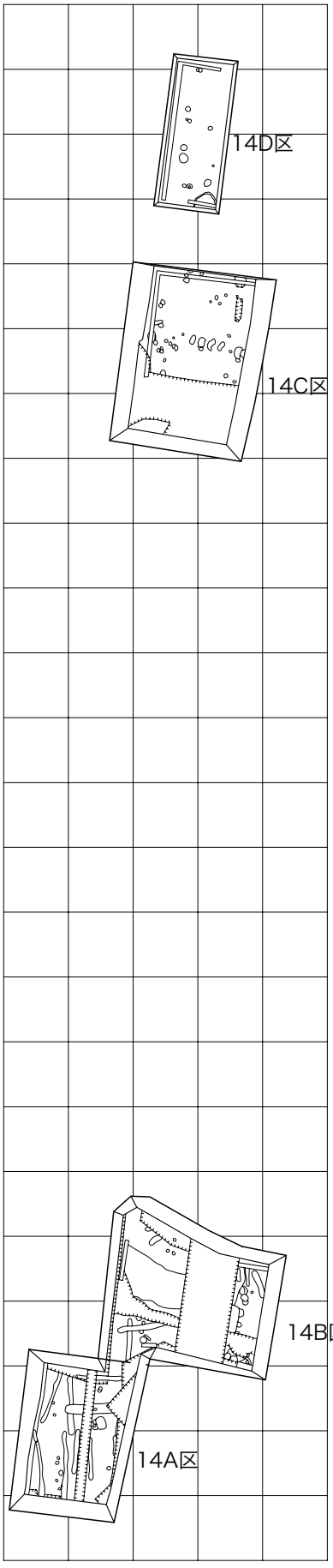


図 1　遺構全体図（1:500）

寄島（よせじま）遺跡

所　在　地　安城市小川町
（北緯34度54分34秒 東経137度05分45秒）
調 査 理 由　中小河川改良事業（鹿乗川）
調 査 期 間　平成26年6月～平成26年12月
調 査 面 積　2,740 ㎡
担　当　者　酒井俊彦



調査地点（1/2.5万「西尾」）

調査の経過　調査は中小河川改良事業（鹿乗川）に伴い、愛知県建設部から愛知県教育委員会を通じて当センターが委託を受けて実施したものである。本遺跡は平成19年度から調査を開始し、今年度で5回目、総調査総面積は13,450㎡である。今年度は、遺跡南部である平成19年度と23年度の調査区に隣接する道路部分と昨年度13B区の北側の調査を行った。前者にA～Dの4調査区を設定し、後者にE区を設定した。E区は遺跡北端にあたる。

立地と環境　本遺跡は矢作川下流域、鹿乗川左岸の沖積地に立地する。右岸の碧海台地上には姫小川古墳などの古墳群が展開し、平成12年度より本センターが調査を行っている鹿乗川左岸には、北から南にかけて姫下、寄島、下懸、五反田、惣作の5遺跡が連続して所在する。現在の鹿乗川は碧海台地東辺を直線的に南流し、川の西側の遺跡周辺は平坦な沖積地である。中世以前の鹿乗川は矢作川沖積地を蛇行して走り、下懸遺跡、惣作遺跡、姫下遺跡で東西方向の旧河道が確認されている。遺跡はこの旧河川の自然堤防上に展開する。標高は約7mである。これまで遺跡の南から調査を行った結果、古墳時代の集落、墓域が検出されている。

調査の概要　今年度A～D区では、これまでの調査で検出された古墳時代集落と墓域の展開の状況を確認することが主目的であった。遺跡の南端に相当するA区では遺跡の南を画する東西方向の古墳時代以前の時期の旧河道を確認し、南側の自然堤防上で下懸遺跡につながる竪穴建物2棟を検出した。自然河道の北側は墓域であり、平成19･23年度の調査で検出された、古墳の周溝と推定された方形に巡る溝の延長部分および方形周溝墓をA･B･D区で確認した。B区の北半とC区は集落域であり、竪穴建物群とこれに先行する時期の当遺跡に特徴的な平行して走る溝群が検出された。古墳時代以外の時期では、B区で中世の大形土坑が1基検出された。E区では、上面の遺構として中世の溝群、下面の遺構として古墳時代前半の竪穴建物群、溝群、土坑が検出された。中世の溝は南北方向の旧河道の堆積層の上層で河道と同方向に走るものと、自然堤防上で東西方向の幅広の浅いものが確認された。

ま　と　め　今年度E区では北に位置する姫下遺跡との境界部での遺構展開が問題となった。昨年度13B区では竪穴建物は検出されなかったが、E区では検出されたことにより集落が途切れながらさらに北に広がることが確認された。また、平行して走る溝群が検出されたことにより、当遺跡の特徴的な遺構のあり方も確認された。今後は姫下遺跡の遺構群との関係が検討課題となる。

（酒井俊彦）



A～D区全景（北より）



E区全景（南より）

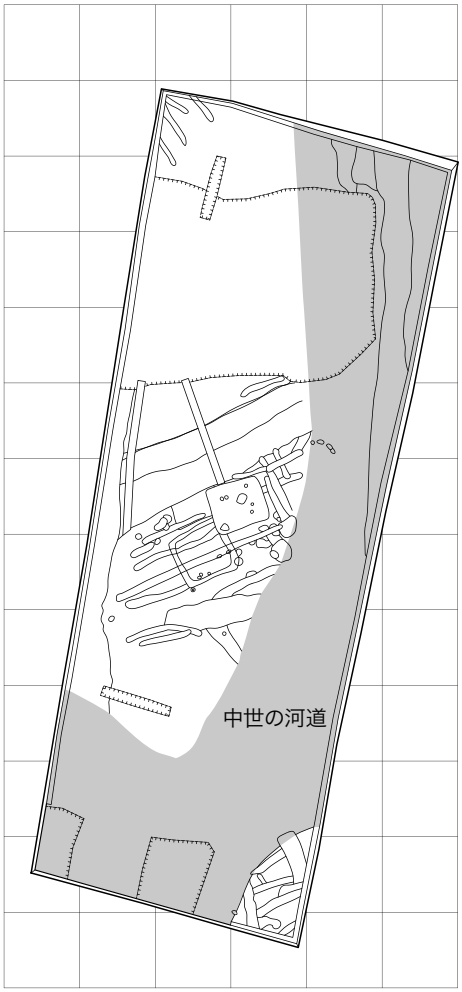


図2　E区遺構全体図（1:500）

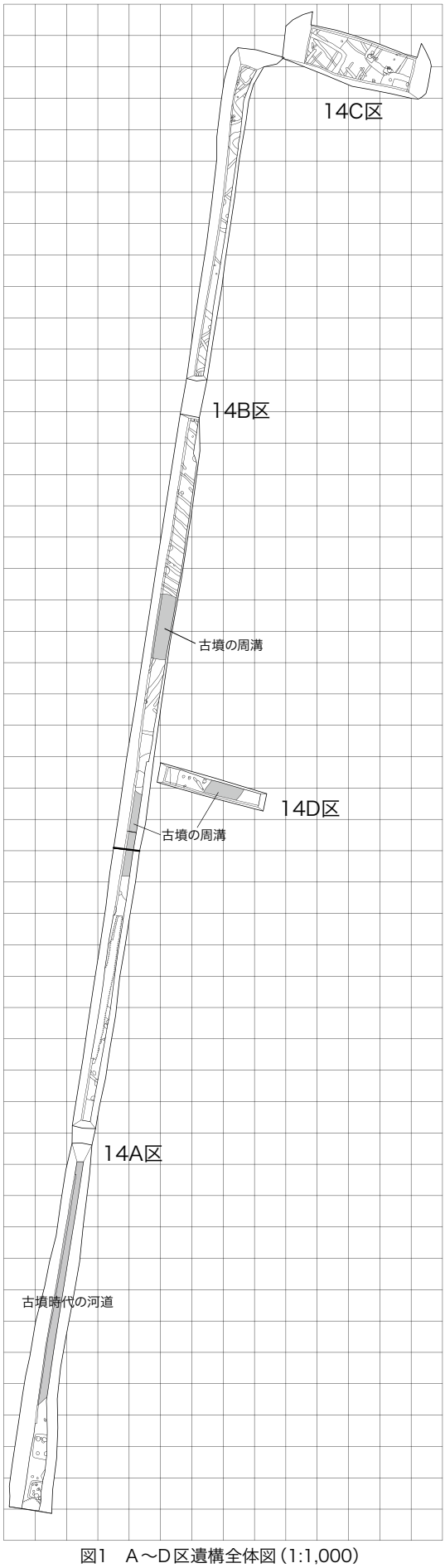
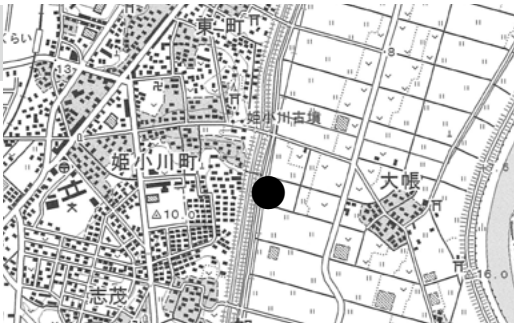


図1　A～D区遺構全体図（1:1,000）

姫下（ひめした）遺跡

所　在　地　安城市小川町
(北緯34度54分52秒 東経137度05分49秒)
調 査 理 由　中小河川改良事業（鹿乗川）
調 査 期 間　平成26年12月～平成27年３月
調 査 面 積　1,200㎡
担　当　者　酒井俊彦



調査地点（1/2.5万「西尾」）

調査の経過　調査は中小河川改良事業（鹿乗川）に伴い、愛知県建設部から愛知県教育委員会を通じて当センターが委託を受けて実施したものである。本遺跡は平成 17・18 年度に調査を行い、今年度で３回目、総調査総面積は 8620 ㎡である。今年度は、平成 18 年度の 06C 区の南側の調査を行った。

立地と環境　本遺跡は矢作川下流域、鹿乗川左岸の沖積地に立地する。平成 12 年度より本センターが調査を行っている鹿乗川左岸には、北から南にかけて姫下、寄島、下懸、五反田、惣作の５遺跡が連続して所在する。遺跡の西方の鹿乗川右岸の碧海台地上には前方後円墳である姫小川古墳があり、この時期の古墳群が展開する。現在の鹿乗川は碧海台地東辺を南流し、川の西側の遺跡周辺は平坦な沖積地である。中世以前の鹿乗川は矢作川沖積地を蛇行して走り、下懸遺跡、惣作遺跡、姫下遺跡で東西方向の旧河道が確認されている。遺跡はこの旧河川の自然堤防上に展開する。標高は約 7m である。これまでの調査で弥生時代中期、古墳時代前～中期、平安時代の集落が確認されている。今年度の調査区の北に隣接する 06C 区では北東から南西に走る古墳時代前期以前の旧河道が検出されている。この北側に平安時代の竪穴建物からなる集落が展開する。今年度の調査区に連続する旧河道の南側では古墳時代前期の遺構群が確認された。

調査の概要　調査は上下二面で行った。現代の耕作土直下の古墳時代から古代の包含層である黒褐色土層面で上面遺構を検出し、この下層の基盤面で下面の遺構を検出した。上面では主な遺構として、江戸時代後半の東西および南北方向に直線的にはしる溝３条と大形土坑１基が検出された。遺構からは瀬戸窯産施釉陶器、土師器鍋、常滑窯産甕が出土した。下面では古墳時代後半～奈良時代および古墳時代前半の遺構が確認された。前者の遺構では北西から南東に走る溝が検出された。古墳時代前半の遺構として、竪穴建物、掘立柱建物、土坑、溝が検出された。遺存状況は悪く、竪穴建物 11 棟、掘立柱建物３棟が確認された。溝は幅 30cm 程度で数条平行して走るものである。古墳時代後半から奈良時代の遺構からは、須恵器、土師器が少量出土した。

ま　と　め　本遺跡の南を画すると推定される旧河道が 06C 区にあり、この南側において遺跡の広がりを確認することが今年度の課題であった。調査の結果、古墳時代集落が展開し、少数の古代の遺構も検出された。また、古墳時代の平行して走る溝群は、南に隣接する寄島遺跡の遺構と類似するものである。自然地形の関連を考慮して、古墳時代から古代にかけての遺跡の展開を検討する必要がある。

（酒井俊彦）



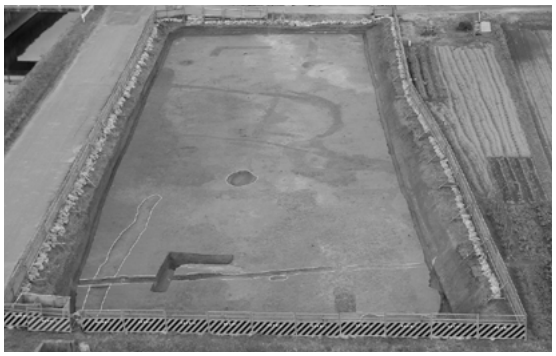
上面遺構検出状況



近世土坑検出状況



上面遺構完掘状況



上面遺構完掘状況（南より）



下面竪穴建物群検出状況



下面遺構検出状況（南より）



下面遺構検出状況（西より）



遺跡全景（南より）

栗狭間（くりはざま）遺跡

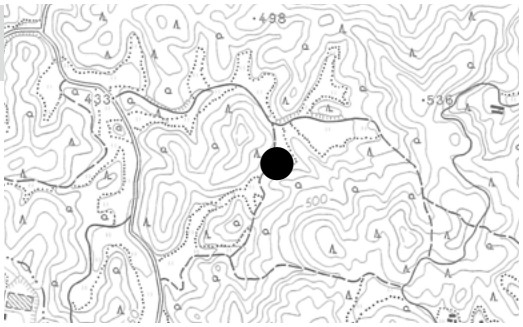
所　在　地　豊田市下山田代町栗狭間地内
（北緯35度02分28秒　東経137度32分52秒）

調 査 理 由　豊田・岡崎地区研究開発施設用地造成事業

調 査 期 間　平成26年5月～平成27年2月

調 査 面 積　10,050㎡

担　当　者　武部真木・町田義哉・鈴木恵介



調査地点（1/2.5万「東大沼」）

調査の経過　調査は愛知県企業庁による豊田・岡崎地区研究開発施設用地造成事業に伴う事前調査として、愛知県教育委員会の委託を受けて平成26年5月から平成27年2月にかけて実施した。調査対象地の現況は旧耕作地と植林された山林であり、地形に応じて14Ａ区・14B区・14Ｃ区に分けて調査を行った。今年度の調査面積は合計で10,050㎡である。

立地と環境　栗狭間遺跡は郡界川の支流の一つである沖川の東岸丘陵部に位置する。遺跡は、周囲を緩斜面に囲まれた盆地状の地形であり北側に谷が開口している。谷を挟んで東に鶴ヶ池遺跡、北側の尾根上から谷にかけてに丸山遺跡と孫田遺跡が存在しており、縄文時代の遺物散布地と平安時代の遺跡群が展開している。

調査の概要　遺跡は、北向きの緩斜面（14Ａ区）と東向きに開口する東西方向の谷と周囲の緩斜面（14Ｂ区）、南側には東西方向の小谷に隔てられた尾根先端の西向き緩斜面（14C区）に分かれる。14A・B区間の盆地状の平坦地は南北方向に伸び、広いところで幅70m、狭隘部で幅20m程である。調査地点の標高は460～471mを測る。

調査の結果、縄文時代と平安時代の遺構や遺物が確認されており、特に平安時代について良好な資料が得られた。平安時代の遺構は地表面直下の黄褐色土層上面にて検出され、同時に黄褐色土層は縄文時代晩期の包含層でもあった。

縄 文 時 代　14A区では上述の黄褐色土層から縄文時代晩期の条痕文土器が多く出土したが、縄文時代を通じて、陥穴以外に明確な遺構は確認し得ていない。14B・C区においては、同様の黄褐色土層から条痕文土器・石器の出土はあるものの、14A区に比較すれば出土量は少ない。現在埋没している小規模な谷地形には黒色土が堆積し、14A区では層中からわずか1点ながら押型文土器の破片が確認されている。黒色土除去後の地山面では陥穴を計11基確認した。なお14B区斜面部の地山面には凝集した広域火山灰を数点確認しているが、黒色土中には確認できていない。黒色土は火山灰の堆積後に新たに堆積した可能性を考えたい。

平 安 時 代　14A・B区では、平安時代後期（K-90～O-53号窯式期）の灰釉陶器椀、土師質甕を伴う竪穴状遺構が計8棟確認された。多くが板状の花崗岩を側壁として利用するカマドを傾斜の上位側に配置していることから方位は一定ではない。竪穴状遺構の残存状態は、斜面上位に位置するカマド側が残り、傾斜の下位に位置する反対側が欠損することが多い。竪穴内のカマド右側の竪穴側壁に接する位置に土坑が掘削される場合が多く、遺物の多くはこの土坑か、カマド周辺に散乱している状況での検出である。竪穴状遺構(060SI)では土師質甕がカマド右側に正位に据えられた状態で検出されている。210SIは一部を欠損するものの床面の残存状況は良く、北辺と東辺それぞれにカマドが配置されている点で特徴的である。このうち東辺のカマド240SLは南側の側壁をなす花崗岩が抜きとられているため、同時に

機能していたとは考えられない。床面は貼床が施されるものの、上記2基のカマド跡との対応状況は明確ではなく、床面を再構築した手がかりは見られない。

他には、竪穴状遺構に近接、あるいは竪穴状遺構内に構築される炉跡がある。前者の例では090SIと111SL、235SIと077・083SL,後者は140SIと190SLである。いずれも炉跡周辺で鍛冶滓が出土するため、炉は鍛冶を目的として構築され、竪穴状遺構はこれに関連する可能性がある。特に235SIは、近隣の炉077SL・083SLとの距離が約6mと離れているにも関わらず、竪穴状遺構の上層から下層にいたるまで鍛冶滓が含まれることから、併存していたと考えたい。後述する200SB内にも169SLが属するが前後関係は不明確である。

中　　世　中世では、掘立柱建物跡200SBがある。14B区の谷部上位斜面を切り出す形で平坦面が造成され、確認できるのは3間×2間の1棟だが、周辺にはさらに多数の柱坑があることから立て替えや柵の設置が行われた可能性がある。造成された平坦面の埋土からは尾張・瀬戸編年7～8形式の陶器（山茶碗）が出土し、200SBの柱坑からは灰釉陶器破片が確認された。

ま と め　今回の調査では、平安時代後半・鎌倉時代末の2時期の遺構・遺物が確認され、縄文時代の遺物が出土した。特に平安時代後半の遺構面と縄文時代晩期（馬見塚式期）の遺物包含層を明確に確認できた。また竪穴状遺構には鍛冶炉や鍛冶滓との関連をうかがわせるものがあり、竪穴状遺構の用途を考慮するための重要な資料となり得る。

竪穴状遺構群とは時期・立地を異にする掘立柱建物は、古代と中世では山間地の利用方法が異なる、あるいは環境が変化していることを示唆しているものと考えられる。

（鈴木恵介）



栗狭間遺跡 調査区遠景　（南から）



14B区210SI（南から）



14B区215SL（南から）



14B区出土墨書灰釉陶器「本」

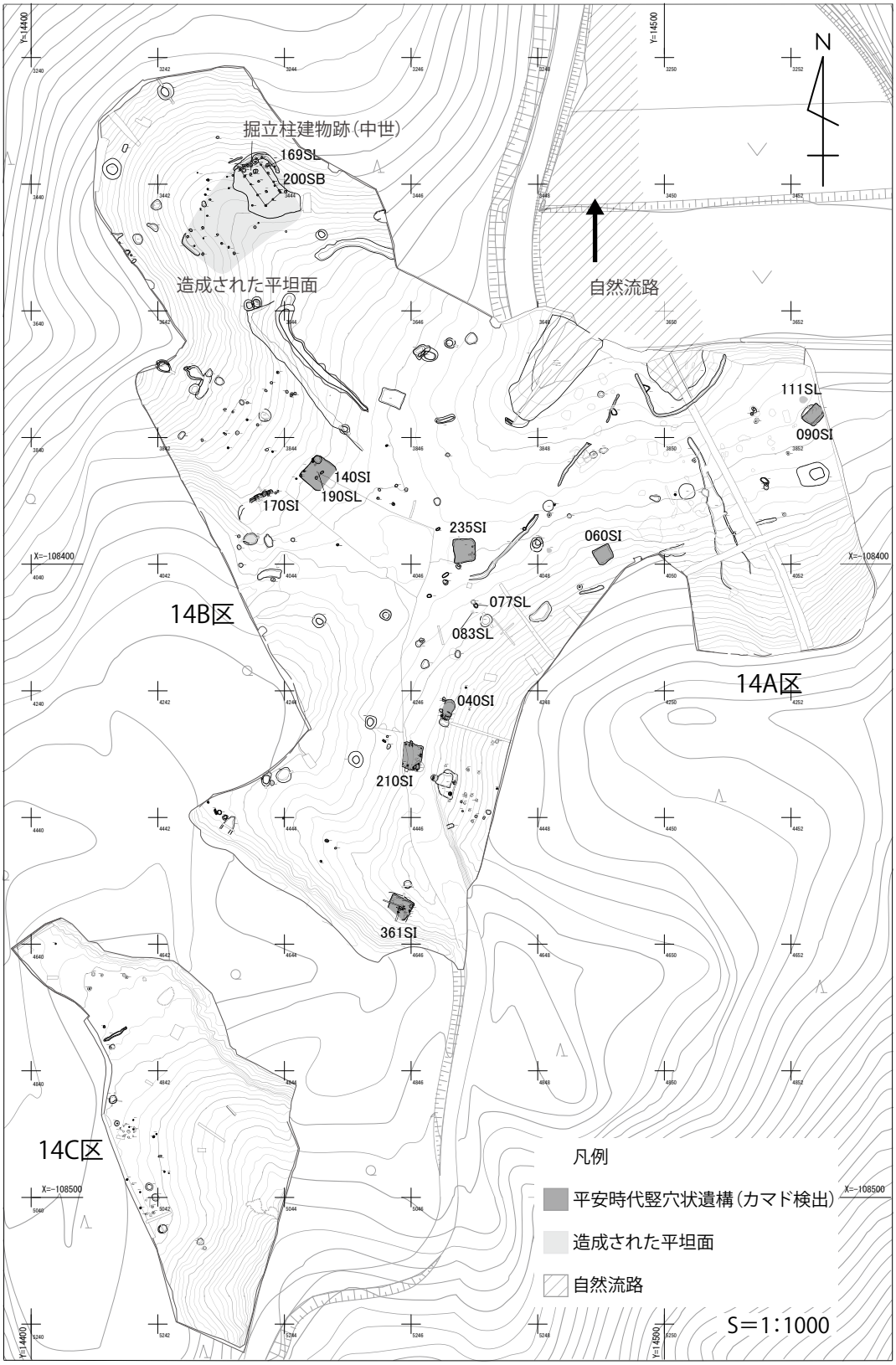


図１　第１面遺構全体図（1:1,000）

蔵平（ぞうひら）遺跡

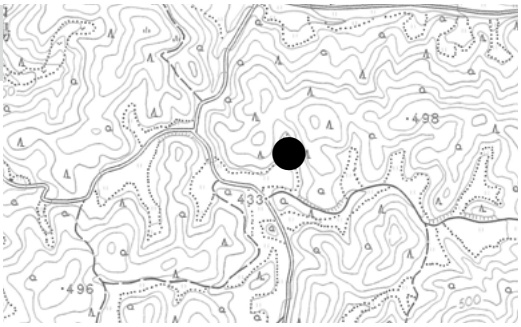
所　在　地　豊田市下山田代町蔵平地内
（北緯35度01分34秒　東経137度19分15秒）

調 査 理 由　豊田・岡崎地区研究開発施設用地造成事業

調 査 期 間　平成26年5月～平成26年9月

調 査 面 積　2,400㎡

担　当　者　武部真木・町田義哉



調査地点（1/2.5万「東大沼」）

調査の経過　調査は愛知県企業庁による豊田・岡崎地区研究開発施設用地造成事業に伴う事前調査として、愛知県教育委員会の委託を受けて平成26年5月から9月にかけて実施した。調査対象地の現況は旧水田耕作地と植林された山林であり、谷を挟んで14Ａ区と14Ｂ区とに分けて調査を行った。両区を合わせた調査面積は2,400㎡である。

立地と環境　蔵平遺跡は郡界川の支流の一つである沖川の東岸丘陵部に所在し、南北に伸びる谷地形の東・西斜面に位置する。北側上流の谷斜面に和倉遺跡、尾根を挟んで東に孫石遺跡、更に谷を挟んで丸山Ａ遺跡が存在しており、周辺には平安時代を中心とした遺跡群が展開している。

調査の概要　遺跡が所在する斜面は谷を挟んで西向き斜面（14Ａ区）と東向き斜面（14Ｂ区）に分かれる。調査地点の標高はおよそ442～455m、斜面の平均斜度はそれぞれ14A区は約17°、14B区は約22°を測る。

調査の結果、主に14A区から縄文時代の遺物、平安時代の遺構や遺物、近代の炭焼窯が確認されている。

堆積層は斜面のため、一概には同一とは言えないかもしれないが、表土（腐葉土混）下の黄灰色土と少量の炭化物が混じり、しまりを欠く黄褐色土を平安時代の遺物包含層として捉え、その下のしまりのある黄褐色土層（地山）上面を検出面として、14A・B区共に1面調査を行なった。また、一部の竪穴状遺構上には黒褐色土が堆積しており、周辺の遺跡では下層で確認されている黒褐色土の再堆積である可能性がある。

以下、時期ごとに遺構・遺物の概要を報告する。

縄 文 時 代　縄文時代の遺物としては、スクレイパー1点が西向き斜面のA区包含層から、出土しているに過ぎない。遺構としては捉えられるものは確認されなかった。

平 安 時 代　14A区からは、竪穴状遺構10基、カマド・炉跡15基の他に、それらに伴う柱穴や土坑、溝などの遺構が多数確認された。

竪穴状遺構は斜面を切り出して平坦面が造られており、一辺が２～３ｍと小規模なものが多いが、標高454m付近に位置する最大規模の009SXは3基の炉跡、6基の柱穴、２基の土坑を伴い、長辺は約7.5mを測る。また山側の壁面に沿って小柱穴3基を伴う、長さ約3mの溝を確認した。標高452mに位置する石組みカマドを伴う小規模な024SXは、ほとんどの竪穴状遺構が現況において斜面の山側にしか掘り方がないのに対して、谷側にも掘り方が確認された。標高446～448m付近に造り出された平坦面には、竪穴状遺構が弧状に連なって南北に展開しており、そこだけで８基の炉跡が確認されている。最下段、標高442m付近に位置する122SKは他の竪穴状遺構とは違い炉跡や溝を伴わないが炭化材が検出さ

れ、焼失竪穴建物の可能性がある。

明確なカマドは石組みのものが１基確認されたのみだが、009SXの山側東壁に近接する034SLは壁際に煙道のような被熱部分があり、カマドであった可能性も考えられる。また、弧状平坦面の一角、166SX内の石組みがわずかに残る045SLは壁から離れた位置にあり、石組みの炉であった可能性もある。

竪穴状遺構の大半は規模が小さく、カマド・炉の配置からも長期居住には適さないかもしれない。季節限定の作業場として機能していた可能性も検討しなければならないだろう。

遺物に関しては、竪穴状遺構や包含層から多数の灰釉陶器が出土している。そのうち、墨書を有する碗、皿合わせて12点以上、ほかに緑釉陶器碗1点も出土している。また、それ以外に18点に及ぶ土錘が出土している。大半が谷に近い標高の低い位置からではなく、斜面の比較的高い所から出土しているのが興味深い。本遺跡においては炉跡周辺を含めて、鍛冶滓などの鍛冶関連遺物の出土は極めて少なかったが、急斜面であることを合わせて考えると一概に関連遺構はなかったとは言い切れないかもしれない。

近　　代　近代では炭焼窯が確認されている。本遺跡では炭焼窯は壁面に被熱を受けて赤変した部分が残るが円形土坑のタイプと平面形が涙滴形を呈する焚口と煙道を持つタイプが確認された。007SYは石材を組んで造られた焚口をと煙道を持ち、窯体内には天井壁が崩落し、焚口前方は約3m×約5mの平坦な作業スペースに整地され、灰原が広がっていた。

ま と め　今回の調査では、平安時代の竪穴状遺構が数多く確認されたが、その規模、配置、立地条件などから、定住していたとは考えにくい。墨書の灰釉陶器の出土量の多さから、どのような勢力が介在していたのかを検討する必要があるだろう。また、これまで余り着目されていなかった山間部の急斜面に数多くの遺構が確認されたことの意義も大きい。今後は近在する遺跡群と比較して、この地域全体の様相を把握し、蔵平遺跡の担う役割を考えていかねばならないだろう。　（町田義哉）



蔵平遺跡 調査区遠景　（南から、手前：蔵平遺跡、奥：和倉遺跡）

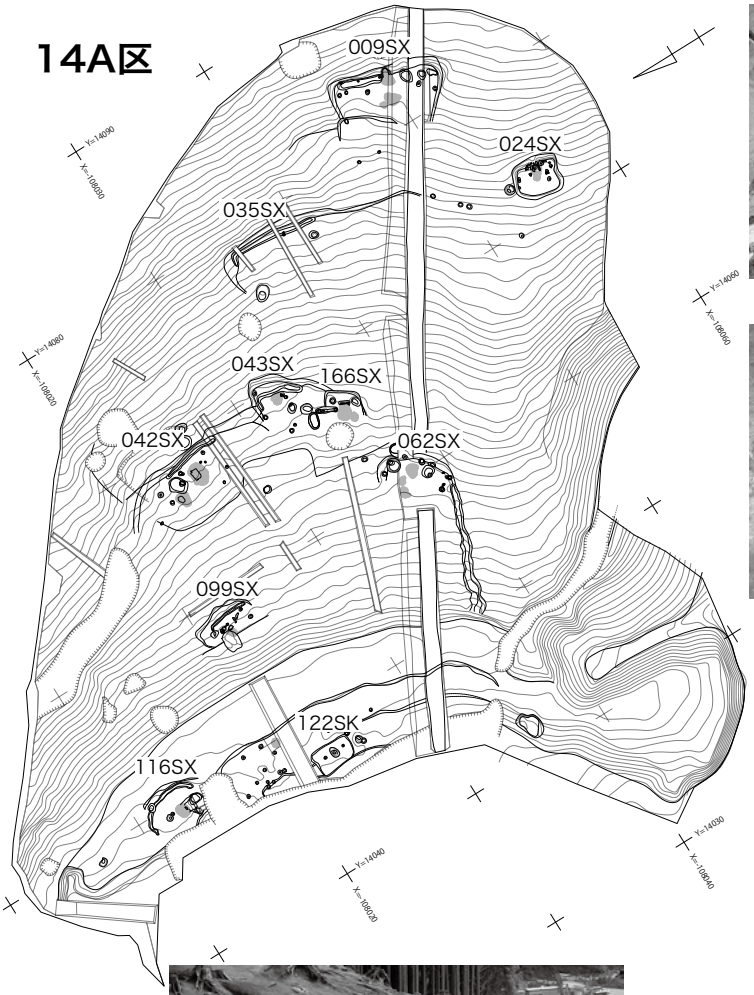


図１　調査区全体図（1：500）



14A区009SX完掘状況（南西から）



14A区024SX・041SL(西から)



蔵平遺跡出土墨書入灰釉陶器碗『井井』



14A区弧状平坦面遺構群（北から）



14A区竪穴状遺構全景（北西から）



蔵平遺跡出土土錘

東小笹（ひがしこざさ）遺跡

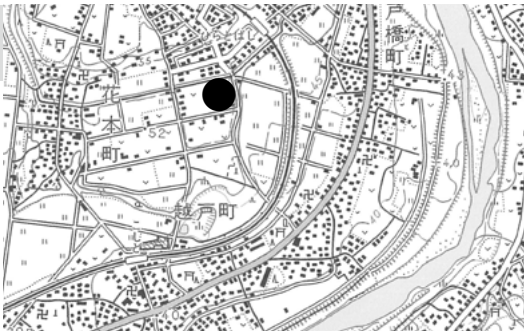
所　在　地　豊田市越戸町東小笹・西小笹
（北緯35度06分46秒　東経137度11分00秒）

調 査 理 由　国道153号線豊田北バイパス建設

調 査 期 間　平成26年５月～平成26年10月

調 査 面 積　2,000㎡・範囲確認調査100㎡

担　当　者　早野浩二



調査地点（1/2.5万「豊田北部」）

調査の経過　発掘調査は国道153号線豊田北バイパス建設に伴う事前調査として、国土交通省中部地方整備局名四国道事務所から愛知県教育委員会を通じた委託を受けて実施した。

立地と環境　東小笹遺跡は矢作川右岸の低位段丘（越戸面）東端に立地する。遺跡は愛知県教育委員会による試掘調査の結果、新規に登録された。遺跡南端は東小笹塚状遺構として登録され、遺跡には真言宗宝隆院境内が含まれていた可能性も想定されている。段丘南端には小笹古墳、上位の段丘（碧海面）には宇津木Ａ遺跡、宇津木Ｂ遺跡、宇津木古墳が立地する。

範囲確認調査　範囲確認調査は遺跡範囲西側の調査対象地に計32地点の試掘坑を設定した。調査の結果、溝や土坑等の遺構が確認されたが、多くは旧水田に関係する遺構である。縄文時代の打製石斧、古代、中世、近世以降の土器・陶磁器もわずかに出土したが、いずれも耕作土に伴う小片で、遺跡の存在を積極的に示すものではなかった。

発掘調査　発掘調査は段丘東端に調査区を設定した。調査の結果、時期や性格が明確な遺構は検出されず、調査区南東から南西の一部に低位面（籠川面）方向に傾斜する段丘斜面を確認した。調査区の大部分は基盤層が露呈し、遺跡は相当に削剥されていることが推察される。段丘斜面の堆積層は古墳時代以降の土師器、須恵器、灰釉陶器、中世陶器を少量包含するが、近世以降の陶器、瓦も混在する。古墳時代後期の鉄鏃も出土した。なお、宝隆院に関連する遺構・遺物は検出されなかった。

まとめ　今回の範囲確認調査、発掘調査の結果、遺跡の存在を積極的に示す遺構・遺物は検出されなかった。改めて範囲確認調査を実施し、遺跡の範囲をより正確に把握する必要がある。

（早野浩二）



図１　東小笹遺跡 調査区配置図（1:2,500）

万瀬（まんぜ）遺跡

所　在　地　北設楽郡設楽町川向字マンゼ
（北緯35度09分44秒 東経137度33分54秒）
調 査 理 由　設楽ダム
調 査 期 間　平成26年6月～10月
調 査 面 積　2,050㎡
担　当　者　鈴木正貴・川添和暁



調査地点（1/2.5万「田口」）

調査の経過　調査は、国土交通省中部地方整備局設楽ダム工事事務所による設楽ダム工事関連事業として、国土交通省から愛知県教育委員会の委託を受けて平成26年6月から10月にかけて実施した。調査対象地の現況は旧耕作地などの山麓斜面であり、調査面積は2050㎡である。

立地と環境　万瀬遺跡は豊川支流の一つである境川右岸に所在し、山麓の東向き緩斜面に立地する。国道257号線設楽大橋の北西に位置する。これまでに愛知県教育委員会による詳細遺跡分布調査と愛知県埋蔵文化財センターによる範囲確認調査により、縄文時代から戦国時代までの遺物が採取されている。今年度の調査区は県道432号小松田口線よりも東側の区域に設定した。

調査の概要　調査区西部を中心に近現代の盛土や石垣があり、これを除去するとやや急な斜面に黒褐色土が堆積していることが判明した。調査はこの黒褐色土の堆積を中心に行い、縄文時代の土器と石器、鎌倉時代の竪穴状遺構や鍛冶炉、江戸時代の柱穴や土坑などが発見された。

縄 文 時 代　北西部の斜面上位では傾斜がやや緩くなっており、この部分を中心に縄文時代の土器や石器がまとまって出土した。縄文土器には縄文時代後期中葉から縄文時代晩期の注口土器や深鉢などがあり、石器には磨石や敲石などが存在する。石器の中では、特に打製石斧が比較的多く認められる特徴がある。遺構については、当初は該期の遺物を多数含む集石遺構６基が縄文時代のものとみられたが、最終的に中世以降の所産であることが確定し、今回の調査では明確に縄文時代の遺構と認定できるものは存在しない。遺物の分布状況からみて、調査区北側の緩斜面付近に縄文時代の遺構が展開するものと思われる。

鎌 倉 時 代　調査区北西端で緩斜面から平坦面を切り開いた竪穴状遺構043ＳＩが１基検出された。2.2m以上×約3.0mの規模を持つ平坦面の南東部では炉跡013ＳＬが存在し、その周辺で椀型鍛冶鉄滓や炭化物が出土しており、鍛冶炉跡と推定される。043ＳＩ床面直上で山茶碗片が出土していることから、鎌倉時代後半の竪穴状遺構と考えられる。

江 戸 時 代　江戸時代から近代にかけての遺構は、調査区全域に分布するが、特に西半部の造成面で多く検出された。遺構には井戸、炉跡、柱穴、土坑等がある。井戸は、調査区の北西端から南東端に向けて傾斜する谷地形の凹部が埋積された部分に６基（058ＳＥ・059ＳＥ・060ＳＥ・051ＳＥ・327ＳＥ・328ＳＥ）設置されており、全て円筒形に掘削された素掘り井戸であった。地形的に湧水しやすい場所に井戸が構築されたことがわかる。出土遺物はなく時期は不明である。柱穴は西部で多く検出されるが、掘立柱建物が数棟建つものと推定される。東部にも柱穴は散見されるが、掘立柱建物跡と復元できるものはなく、立地からみて杭列等が展開したものと考えられる。土坑にはいくつか方形プランとなるものが存在

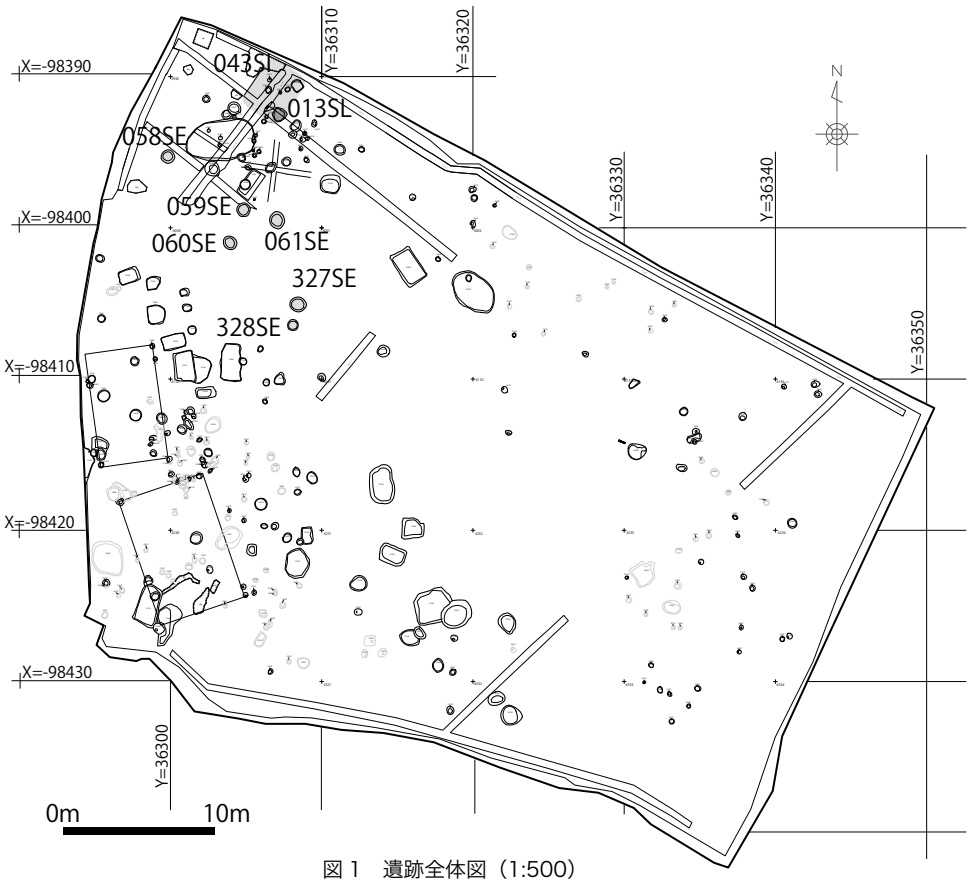


図１　遺跡全体図（1:500）

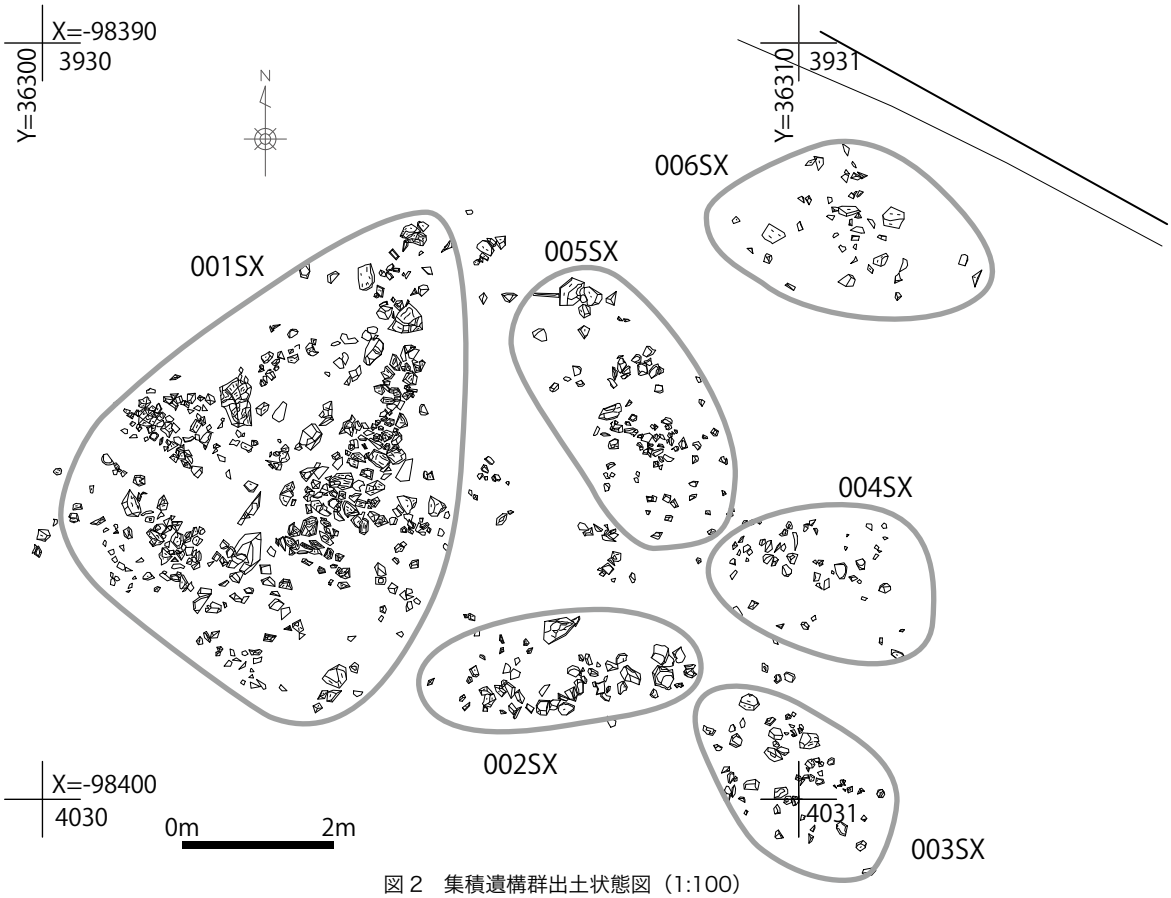


図２　集積遺構群出土状態図（1:100）

するが、性格を特定するには至っていない。調査区北西部の集石遺構は、最下部から被熱痕と敲打痕が残存する台石が出土した。この台石は鍛冶作業などに伴う可能性が高く、集石は中世以降（おそらく江戸時代）に不要な石材を片付けたものではないだろうか。出土遺物には陶磁器・土器類があり、多くは江戸時代後期に属するが、一部に江戸時代初期まで遡るものも存在する。

ま と め　鎌倉時代の鍛冶作業場や江戸時代の屋敷跡などの遺構が確認され、近現代の万瀬集落の淵源がかなり遡ることが判明した。また、遺構は確認されなかったが、多くの縄文時代の遺物が出土しており、極めて近い場所に縄文時代の良好な遺構が残存している可能性が考えられる。今後の調査に期待したい。

（鈴木正貴）



遺跡遠景（北東から）



遺跡全体（東から）



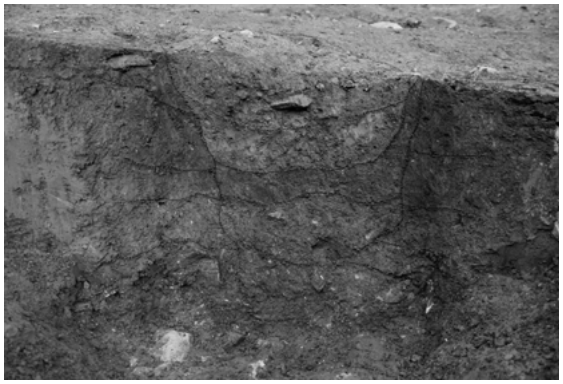
造成土と黒褐色土の堆積（西から）



柱穴・土坑群（北西から）



060SE 土層断面（東から）



328SE 土層断面（南から）



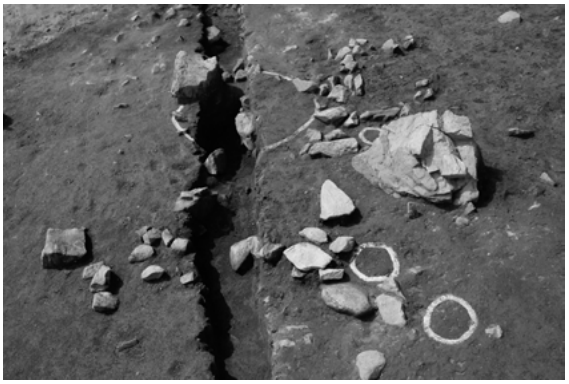
051SK 土層断面（北東から）



043SI（左下に炉跡：南東から）



集積遺構群上面（南西から）



集積遺構群最下面（東から）



打製石斧出土状況（南東から）



注口土器出土状況（北から）



土器出土状況（西から）



打製石斧出土状況（北から）

西地（にしち）・東地（ひがしち）遺跡

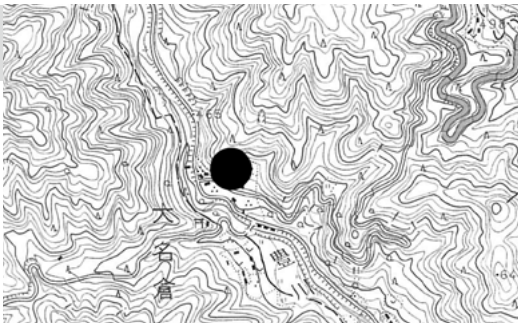
所　在　地　北設楽郡設楽町大名倉字西地、東地
（北緯35度6分41秒 東経137度32分37秒）

調 査 理 由　設楽ダム

調 査 期 間　平成26年５月～平成27年1月

調 査 面 積　4,220㎡

担　当　者　鈴木正貴・川添和暁



調査地点（1/2.5万「田口」）

調査の経過　調査は、国土交通省中部地方整備局による設楽ダム工事関連事業に伴う事前調査として、愛知県教育委員会より委託を受けて、平成26年5月から平成27年1月にかけて実施した。調査面積は4,220㎡で、14A区・14B区・14C区の三調査区に分けて調査を行った。

立地と環境　遺跡は標高約450m、寒狭川左岸の山麓緩傾斜地および河岸段丘面上に立地する。当地は大名倉地区の北西端にあたり、寒狭川で開析された谷地形が開け始める地点に位置する。寒狭川の対岸側には、昭和43（1968）年、早稲田大学の調査により縄文時代後期の遺物が多く出土した、大名倉遺跡が位置する。

調査の概要

１４Ａ区　調査区東側にあたる14A区は、調査区外の北側から広がる谷地形中に位置する。表土下には、谷地形を埋める土石流堆積物が4m以上と厚く堆積しており、その上面で近世の埋葬遺構を2基検出した。谷地形脇の山側傾斜地には、近世以降のピット列が確認された。

14B区東側　調査区西側にあたる14B区は、北側から山側斜面が張り出す地点を境に、東側と西側とで様相が異なった。14A区で確認された谷地形は14B区東側まで続いており、山側傾斜地にはピット列を確認した。また、谷地形の落ち際には、近世の埋葬遺構が３基見つかっており、キセル・火打石・寛永通宝とともに埋葬人骨が残存していた。

14B区西側　14B区西側では、縄文時代と近世前半以前の遺構・遺物が良好な状態で確認された。基本層序は、Ⅰ層：近現代の盛土（最大厚1m程度）、Ⅱ層：黒褐色粘土質シルト（近世前半以前：最大厚40cm程度）、Ⅲ層：褐灰色粘土質シルトおよび粘性の強い黒色粘土質シルト（縄文：最大厚40cm程度）、Ⅳ層：花こう岩礫の多い黒褐色あるいは黒色粘土質シルト（地山か）、Ⅴ層：黄褐色粘土質シルトおよび砂層（地山）である。

近世前半以前の遺構には、炉跡５基、竪穴状遺構2基以上、掘立柱建物などに関連するピット跡多数がある。炉跡および竪穴状遺構内および周辺では、鉄滓が出土するほか、被熱により著しく赤色化した台石（金床石か）や磨面の著しく発達した磨石（砥石？）も出土した。当地で野鍛冶などが行われた可能性も考えられる。その他、石積みの一部も確認した。

縄文時代の遺構は、Ⅱ層直下およびⅢ層中、あるいはⅣ層・Ⅴ層の直上で確認できた。検出された遺構には竪穴建物跡5棟、袋状土坑5基以上、単独の土器埋設遺構2基、その他土坑・ピット多数がある。これらの時期は縄文時代中期後半から後期初頭に属する。

調査区北西端の緩斜面に堆積する黒色粘土層中からは、縄文時代中期後半の竪穴建物跡が３棟確認された（1304SI・1305SI・1306SI）。いずれも石組内側で一辺約40cm四方の石囲炉跡が見つかっており、1304SIおよび1305SIの炉跡内には大型土器片が敷かれていた。主柱穴および堀方も、一部ではあるが辛うじて検出できており、このことからいずれも一辺5m程度の隅丸方形状のプランであったと推定される。

調査区南端で見つかった竪穴建物跡1263SIは、径4m程度の円形あるいは隅丸方形状を呈する。柱穴跡は壁柱を中心に見つかっており、中央には土器敷炉跡がある。竪穴建物跡の堀方南西端には、土器埋設遺構（埋甕）が１基確認された。この埋甕は後期初頭の深鉢が正位に埋設されたもので、口縁部上に蓋石が置かれ、底部には小穿孔が施されていた。

竪穴建物跡1201SIは、径５m程度の円形または隅丸方形状を呈する。この建物跡中央から北西寄りには、0.5×1mの範囲で長方形の石組があり、中央に土器敷炉跡があるとともに、南東脇には入子状で立位に設けられた深鉢が、北西端には大きな台石が据えられていた。台石と入子状の深鉢を含め、石組全体で一炉跡の機能を有していたと考えられる。

袋状土坑は、14B区西側中央付近に集中して認められた。これらは植物質食料の貯蔵穴であったことが考えられ、1208SKでは、埋土中に堅果類種実由来の炭化物粒がわずかに残存していた。036SKでは、土坑内に多量の後期初頭土器片および磨製石斧を包含しており、貯蔵穴としての利用後に廃棄あるいは埋納行為が行われたようである。

その他、単独の土器埋設遺構を2基検出した（1078SK・1286SK）。いずれも立位埋設で、底部は未穿孔で残存していた。1078SKは胴部下半のみが辛うじて残存している状態で時期は不詳である。一方、口縁部まで残存している1286SKは後期後葉に属する。

出土遺物　14B区の出土遺物には、縄文土器・石器、弥生時代の条痕文土器、灰釉陶器、中世および近世陶器（山茶碗・古瀬戸・天目茶碗・内耳鍋）や砥石が出土した。縄文土器は、中期後葉から後期前葉までが主体ではあるが、早期押形文（高山寺式）が最も古く、早期後半・前期後半・中期中葉（北屋敷式）なども若干出土した。石器では、石鏃・石匙・スクレイパー・打製石斧・磨製石斧・打欠石錘・切目石錘・有溝石錘・磨石敵石類・石皿台石類の出土をみた。剥片石器では黒曜石の使用が目立ち、剥片や法量の大きな石核の出土もあった。

１４Ｃ区　14C区は調査区南西端にあたる。調査区東半分に幅広の谷状地形が伸びており、その埋土中に縄文時代および近世の遺物が包含されていた。縄文土器や石鏃・剥片などの石器のほか、大型石棒や滑車形耳飾片が出土した。

ま と め　今回の調査により、縄文時代中期後半から後期初頭頃の集落景観を描ける調査結果が得られた意義は非常に高い。設楽町域では、これまで縄文時代の遺物は多量に採集されてきたものの、当時の活動痕跡（場）を広く確認することができていなかった。単に調査事例の多い西三河地域との比較材料になるのみならず、今後行われる設楽ダム工事関連事業の調査事例とも併せて、豊川最上流域の様相を解明する基礎資料として、広く活用されるものになるであろう。

（川添和暁）

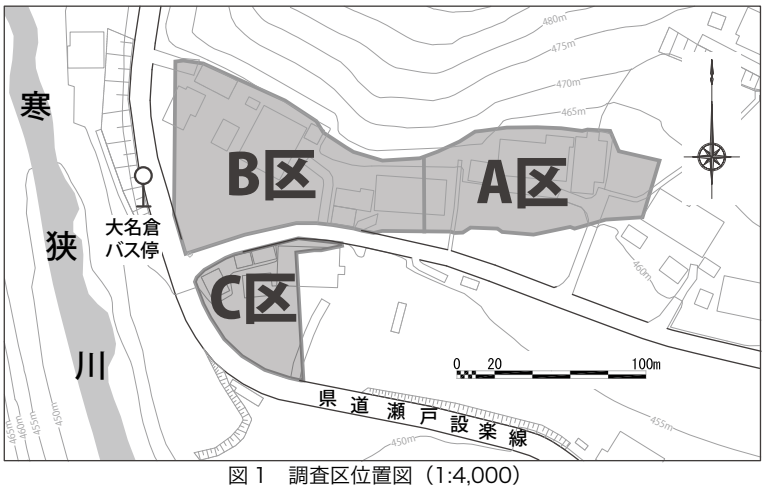


図１　調査区位置図（1:4,000）

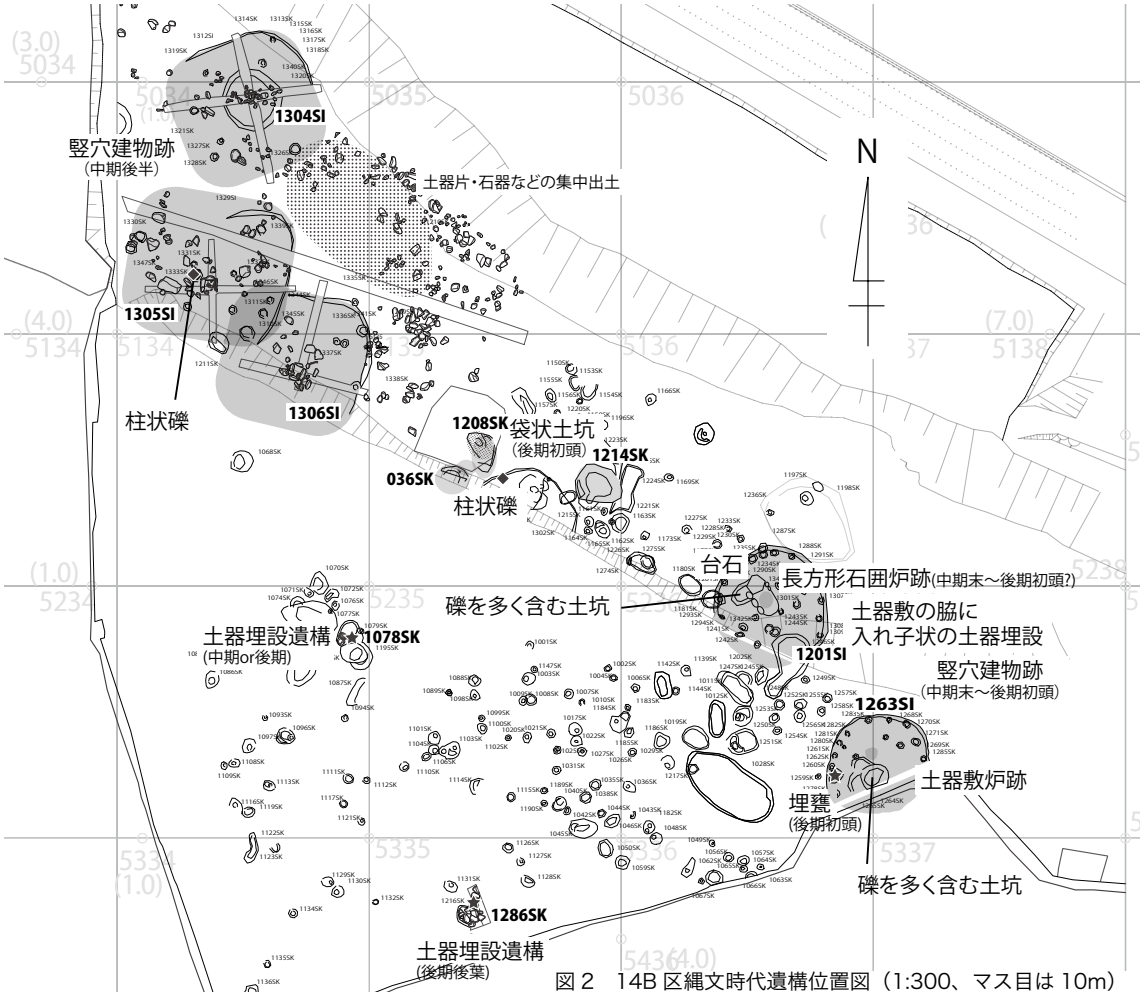
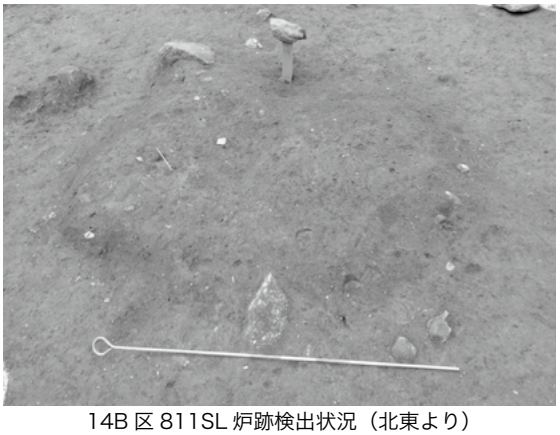


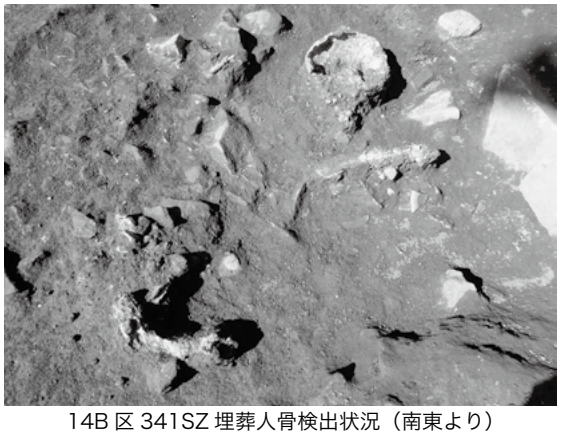
図２　14B 区縄文時代遺構位置図（1:300、マス目は 10m）



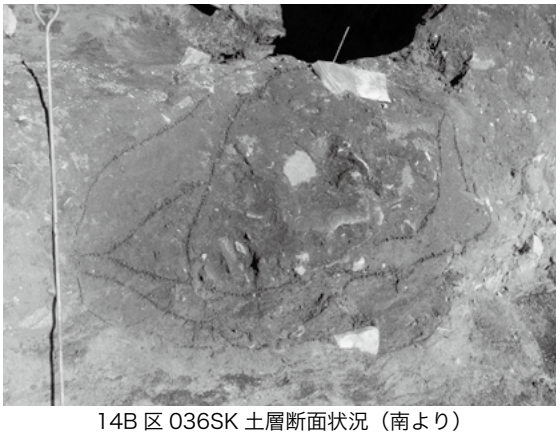
14B 区１面目と 14C 区黒色土検出状況（南より）



14B 区 811SL 炉跡検出状況（北東より）



14B 区 341SZ 埋葬人骨検出状況（南東より）



14B 区 036SK 土層断面状況（南より）



14B 区 1304SI（南西より）



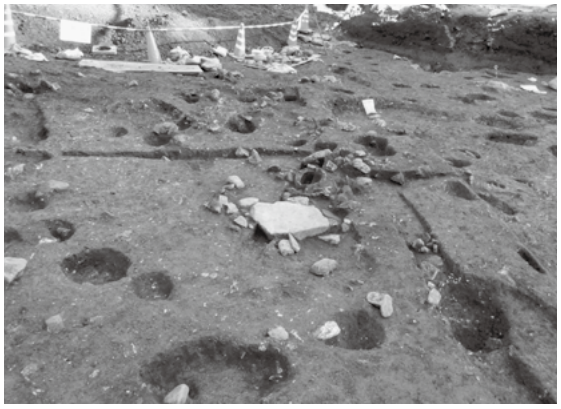
14B 区 1304SI 石囲炉跡（北より）



14B 区 1305SI（南東より）



14B 区 1305SI 石囲炉跡（南より）



14B 区 1201SI（北西より）



14B 区 1201SI 長方形石組炉跡（南より）



14B 区 1263SI（南西より）



14B 区 1263SI 内埋甕（南より）

設楽ダム工事関連遺跡範囲確認調査　大名倉遺跡　上戸神遺跡　川向萩ノ平沢遺跡　大栗遺跡　永江沢遺跡

所　在　地　北設楽郡設楽町大名倉字滝ノ下、同町川向字上戸神、同字萩ノ平沢、同字大栗、同町八橋字的場（北緯35度06分32秒 東経137度32分41秒、北緯35度06分49秒 東経137度33分25秒、北緯35度06分48秒 東経137度33分28秒、北緯35度06分40秒 東経137度33分51秒、北緯35度07分36秒 東経137度35分09秒）

調 査 理 由　設楽ダム

調 査 期 間　平成26年6月～26年7月

調 査 面 積　150㎡

担　当　者　鈴木正貴

調査の経過　調査は、国土交通省中部地方整備局設楽ダム工事事務所による設楽ダム工事関連の範囲確認調査として、国土交通省から愛知県教育委員会を通じて委託を受けて行われた。今年度は５遺跡が調査対象となり平成26年6月から実施された。調査方法は各遺跡で事業用地内にかかる部分について1m×2mのテストトレンチ（T.T）を設定し、遺構や遺物の有無を確認し堆積状況などを観察した。テストトレンチの内訳は大名倉遺跡14か所（28㎡）、上戸神遺跡15か所（30㎡）、川向萩ノ平沢遺跡3か所（6㎡）、大栗遺跡41か所（82㎡）、永江沢遺跡2か所（4㎡）である。

立地と環境　大名倉遺跡は豊川（寒狭川）上流右岸の河岸段丘から山麓にかけて所在し、今回は山麓斜面（標高452m～462m）を中心に調査した。上戸神遺跡、川向萩ノ平沢遺跡および大栗遺跡は豊川支流の戸神川左岸に点在する遺跡群で河岸段丘から山麓にかけて所在する。上戸神遺跡は南東方向に細く伸びる尾根上緩斜面（標高465m～480m）、川向萩ノ平沢遺跡は南向き緩斜面（標高477m～489m）、大栗遺跡は河岸段丘を中心に一部が山麓斜面（標高395m～415m）にかかる立地となっている。永江沢遺跡は豊川支流の境川左岸に所在し、今回は境川に面する河岸段丘（標高約440m）で調査した。

調査の概要　これまで平成19・20・25年度に範囲確認調査が行われており、今回は高位の山麓斜面部で住宅地跡地や休耕田および植林帯で実施した。

大名倉遺跡　遺構は、北部に設定したＴ.Ｔ02で土坑１基が検出されたのみで、堆積状況などからみて近代以降の遺構と推定される。遺物は、北中部の休耕田地区で江戸時代後期から近代の陶磁器類が多数出土しており、中央部休耕田地区のＴ.Ｔ05で戦国時代に属する土器と陶器片、Ｔ.Ｔ07では室町時代の古瀬戸陶器片、Ｔ.Ｔ09では縄文時代の石器が出土した。これらの地点は、地山の状態などからみて地山をかなり削り込んで平坦面が形成されたものと推定される。縄文時代から戦国時代の遺物は別所から移動されてきたものと推定される。

上戸神遺跡　東堂神社の正面にある平坦面を中心に展開する縄文時代・平安～戦国時代の遺物散布地として周知される遺跡である。今回の調査対象範囲は東堂神社の東方にあたる。北部住宅地地区では近代以降に大規模に造成されており、遺跡は良好に残存していないと思われる。西部から南部にかけては、Ｔ.Ｔ09で方形土坑１基が確認され、鉄製品２点が出土した。またＴ.Ｔ13では黒褐色土から縄文土器が出土したが、これは上位から流入されたものと考えられた。今回の調査範囲では、Ｔ.Ｔ09で遺構と遺物が確認された他は、中世後期以前の遺跡が展開するとは考えにくい。

川向萩ノ平沢遺跡　県教委の詳細分布調査の結果、縄文時代と平安時代の遺物散布地として発見された遺跡で、調査対象範囲はその南端部に相当する。全ての試掘坑で黒褐色土が確認されており、

Ｔ．Ｔ03で縄文時代の石器が1点出土した。これ以外に遺構と遺物は発見されなかったことから、調査地点よりも上位で縄文時代の遺跡が展開しているものと推定される。

大栗遺跡　縄文時代・平安時代・室町～戦国時代の遺物散布地として周知される遺跡である。西部地区では土石流によるものと推察される角礫を多く含む厚い堆積が確認され、遺跡の有無は確認できなかった。Ｔ．Ｔ10で弥生時代から古墳時代の土器が1点出土した。中央部地区では、特に南半部緩斜面で黒色土が安定して堆積していることが判明し、Ｔ．Ｔ17とＴ．Ｔ22とＴ．Ｔ36で土坑などの遺構が確認され、Ｔ．Ｔ21とＴ．Ｔ36では縄文時代の石器が出土した。特に、Ｔ．Ｔ36では土坑から剥片石器などが出土しており、縄文時代の遺跡が良好に残存していることが確認された。一方、南部地区では、東部緩斜面部で遺物包含層となる可能性がある黒色土が確認され、江戸時代の遺物が出土している。遺構は確認されていないが、付近で調査中に縄文土器が表採されたことから、東部緩斜面部で遺跡が存在した可能性が考えられる。しかし、西部平坦面部では黒色土の堆積、戦国時代以前の遺構と遺物は確認されなかった。

永江沢遺跡　縄文時代・鎌倉～室町時代の遺物散布地として周知される遺跡である。調査の結果、Ｔ．Ｔ1とＴ．Ｔ2ともに厚い河川性堆積物がみられ、遺構と遺物が全く確認されなかった。上位の堆積は耕地整理の際に盛り土の可能性が考えられる。

（鈴木正貴）

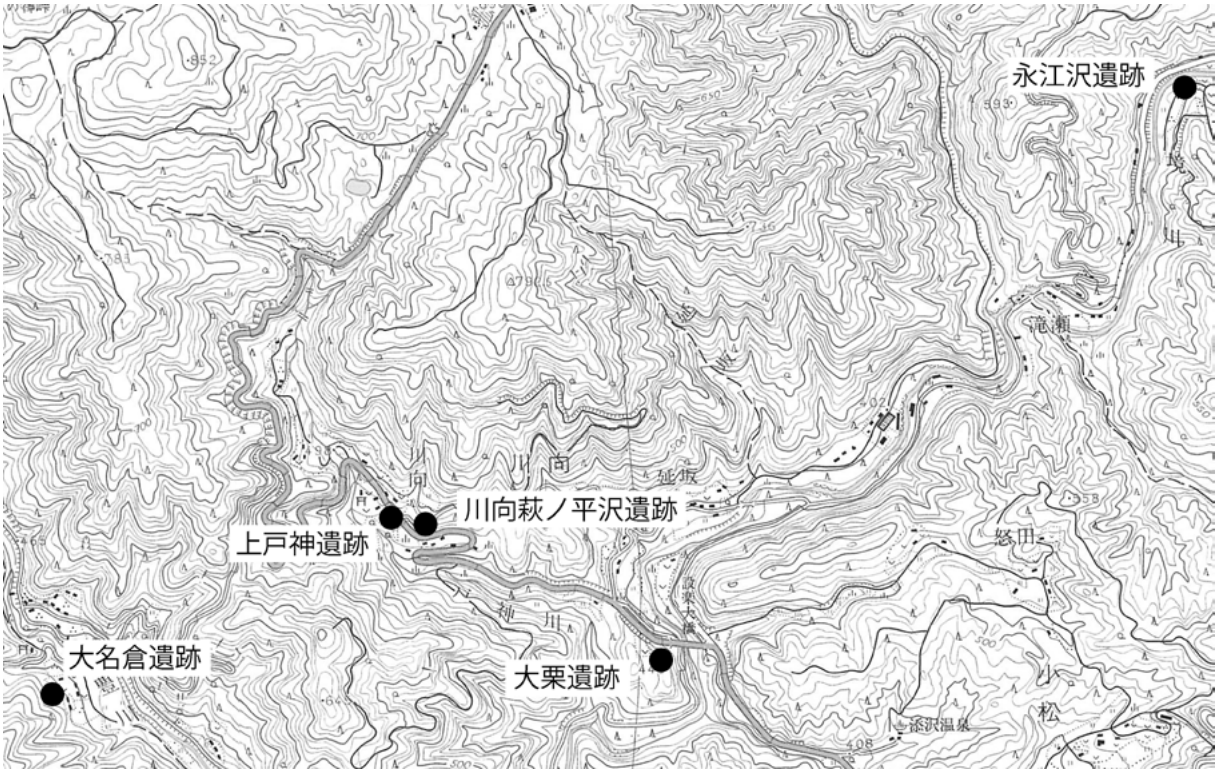


図１　範囲確認調査の遺跡位置図（1:25,000「田口」）

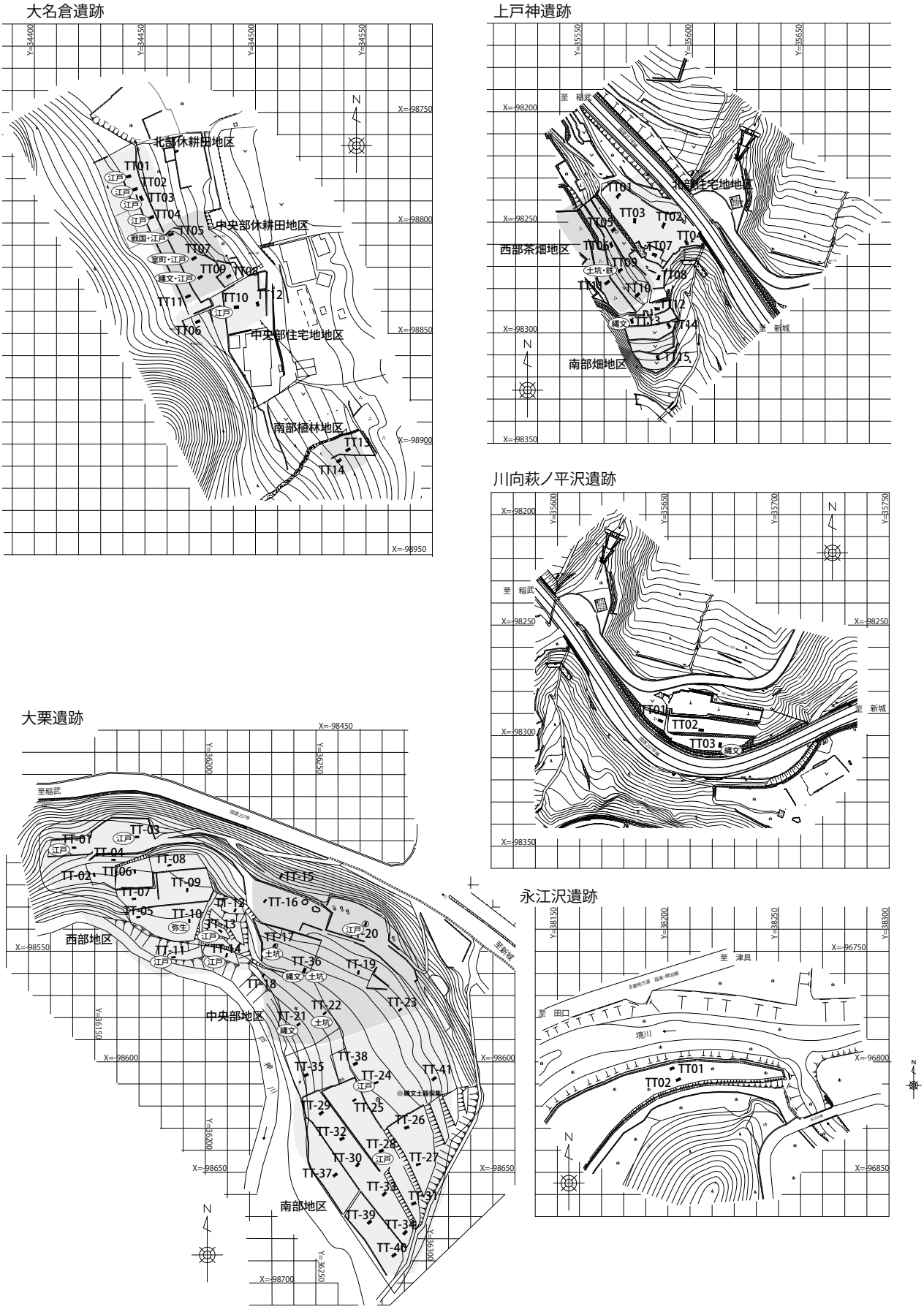


図２　範囲確認調査のトレンチ位置図（1:2,500）

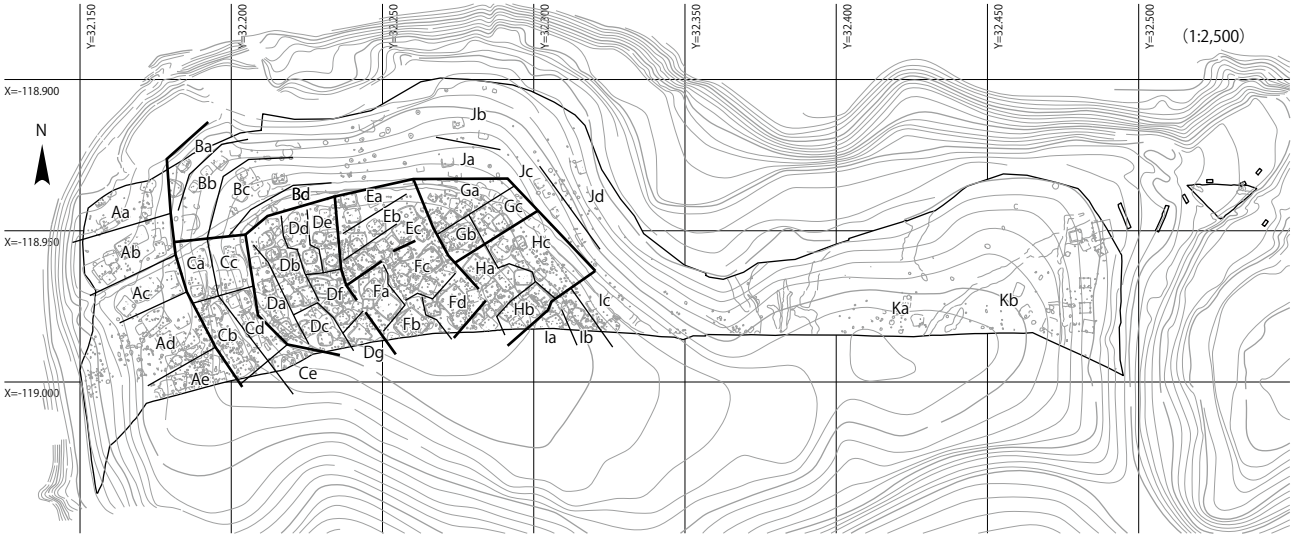
III. 刊行報告書抄録

第189集　石座神社遺跡

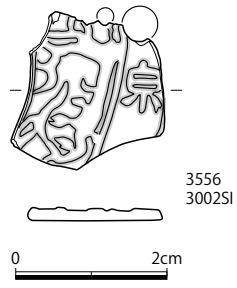
遺跡は断上山丘陵上、東西約300m、南北約100mの範囲に展開する弥生時代後期から古墳時代前期の集落を主体とする。集落は竪穴建物334棟、掘立柱建物８棟から構成され、建物群には大型竪穴建物、布掘り柱掘方をもつ大型掘立柱建物も含まれる。検出された建物群は集落研究の基礎資料、良好に出土した土器群は土器編年の基準資料としての価値が高い。破鏡と鉄剣、鉄斧、ヤリガンナ等の豊富な鉄製品、水銀朱付着土器５点の出土も注目される。集落の展開は同一丘陵上の前方後方墳の断上山10号墳が築造に帰結する。

その他、縄文時代の玦状耳飾り２点、設楽原の戦いに関連した可能性がある鉛製鉄砲玉５点が出土した。

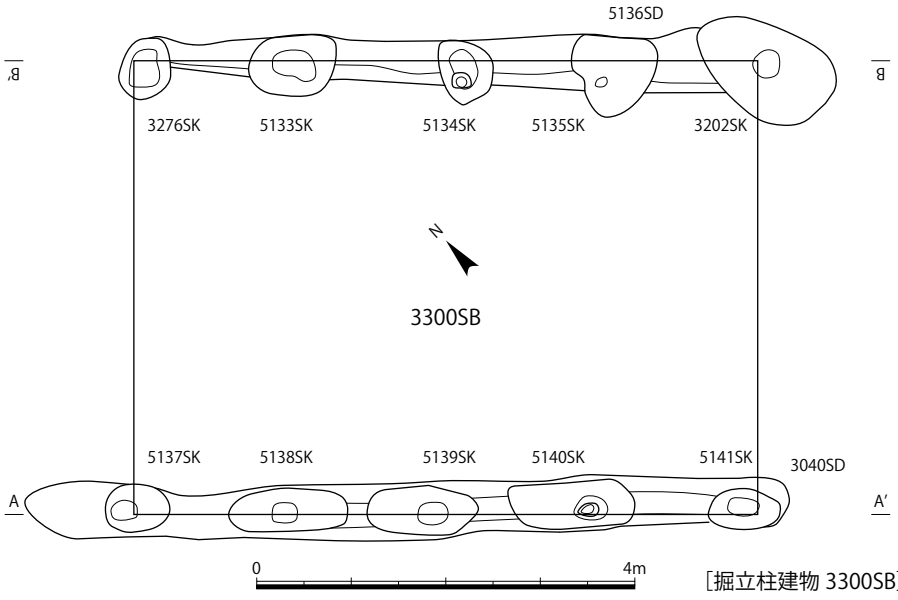
（早野浩二）



［弥生時代後期から古墳時代前期の竪穴建物群の配置］



［3002SI 出土破鏡］



［掘立柱建物 3300SB］

報告書抄録

ふりがな	いわくらじんじゃいせき
書名	石座神社遺跡
副書名	
巻次	
シリーズ名	愛知県埋蔵文化財センター調査報告書
シリーズ番号	第189集
編著者名	早野浩二 川添和暁 中村賢太郎 山形秀樹 小林克也 西田京平 平尾良光 堀木真美子他
編集機関	公益財団法人　愛知県教育・スポーツ振興財団　愛知県埋蔵文化財センター
所在地	〒498-0017　愛知県弥富市前ケ須町野方802-24　TEL 0567(67)4161
発行年月日	西暦2015年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 m^2	調査原因
いわくらじんじゃいせき 石座神社遺跡	あいちけんしんしろし 愛知県新城市 おおみやあざきつねづか 大宮字狐塚	23221	76045	34度 55分 38秒	137度 31分 10秒	2007.05.14 ～2007.06.13 2008.09.09 ～2009.03.24 2009.08.06 ～2010.03.31 2010.05.21 ～2011.03.14	400 5,200 4,720 10,330	第二東海 自動車道 横浜 名古屋線

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
石座神社 遺跡	集落	旧石器時代	小支谷	石器	ナイフ形石器を含む 旧石器の出土
		縄文時代	炉穴・竪穴建物・土坑	縄文土器・石器・石製品	有溝砥石、玦状耳飾り ２点、石刀の出土
		弥生時代	竪穴建物	弥生土器	弥生時代後期から古墳 時代前期の大規模集落
		古墳時代	竪穴建物・掘立柱建物	土師器・石製品・金属製品	大型竪穴・掘立柱建物 破鏡・鉄製品の出土
		古代	竪穴建物・掘立柱建物	土師器・須恵器	斜面に立地する集落
		中世・戦国	大溝・土坑墓	土師器・山茶碗・金属製品	馬埋葬土坑 鉄砲玉５点の出土
		近世・近代	炭焼窯	陶器	

文書番号	発掘届出(19埋セ第2号・2007.4.6/20埋セ第32号・2008.6.24/21埋セ第10号・2009.4.1/21埋セ第136号・2010.3.10) 通知(19教生第154号・2007.4.25/20教生第952号・2008.7.10/21教生第142号・2009.4.15/21教生第2581号・2010.3.23) 終了届・保管証・発見届(19埋セ第36号・2007.6.18/20埋セ第125号・2009.4.2/21埋セ第151号・2010.4.2/22埋セ267号・2011.3.25) 鑑査結果通知(21教生第317号・2009.5.14/22教生第547号・2010.6.11/23教生第45号・2011.4.7)

要約	断上山丘陵上、東西約300m、南北約100mの範囲に弥生時代後期から古墳時代前期の集落が展開する。集落は竪穴建物334棟、掘立柱建物８棟から構成され、建物群には大型竪穴建物、布掘り柱掘方をもつ大型掘立柱建物も含まれる。検出された建物群は集落研究の基礎資料、良好に出土した土器群は土器編年の基準資料としての価値が高い。破鏡と鉄剣、鉄斧、ヤリガンナ等の豊富な鉄製品、水銀朱付着土器５点の出土も注目される。集落の展開は同一丘陵上の前方後方墳の断上山10号墳の築造に帰結する。その他、縄文時代の玦状耳飾り２点、設楽原の戦いに関連した可能性がある鉛製鉄砲玉５点が出土した。

第190集　車塚遺跡

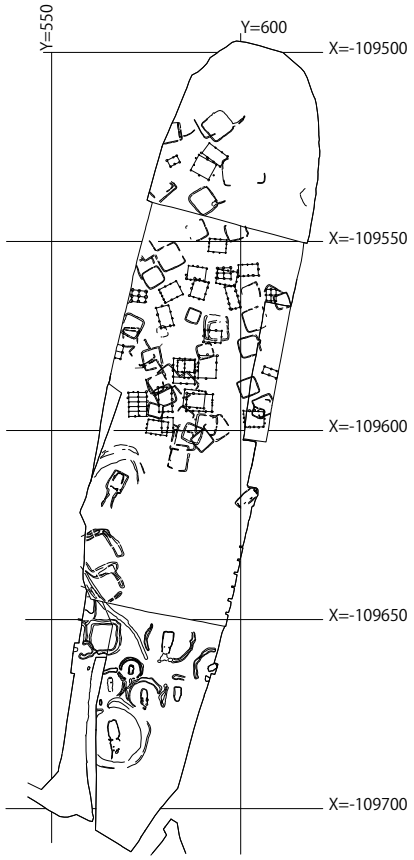
車塚遺跡は岡崎市岩津町に所在する。地形的には矢作川の上位段丘で、北側が急峻な斜面、西と南側が緩斜面となり、これらに囲まれた中央が平坦面となっている。今回の調査区はこのうち中央の平坦面と南側の緩斜面に該当する。

調査の結果、縄文時代・弥生時代・古墳時代後期～奈良時代・中世以降の4時期の遺構が確認された。遺構の多くは中央の平坦面に集中しており、この部分が奈良時代以前の居住域と考えられる。

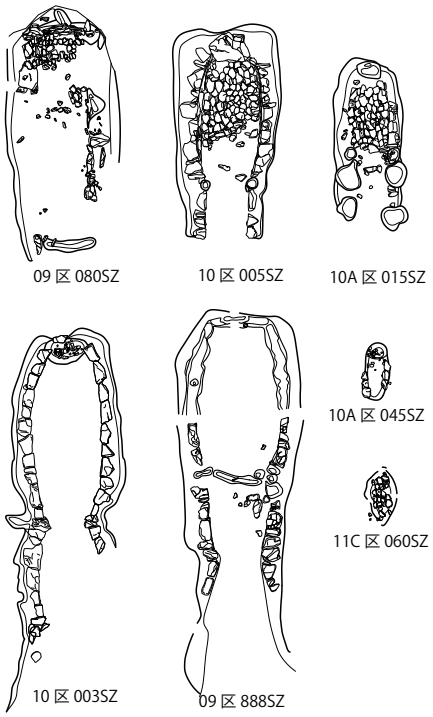
一方、南側の緩斜面は墓域となり、弥生時代の方形周溝墓と、古墳時代後期以降の横穴式石室を持つ古墳6基と小石室3基が密集して確認されている。小石室の帰属時期が不明瞭だが、古墳・小石室は6世紀後半～8世紀かけてほぼ継続するものと考えられる。なお、平坦面の居住域との関係も興味深いが、同時期の遺構は調査区内では検出されていない。しかし、遺物は散見でき、調査区外に展開している可能性を残す。　（池本正明）



10A 区全景



遺構図　1:2,000



石室図　1:200

報告書抄録

ふりがな	くるまづかいせき
書　　名	車塚遺跡
副 書 名	
シリーズ名	愛知県埋蔵文化財センター調査報告書
シリーズ番号	第190集
編著者名	池本正明　堀木真美子　川添和暁　鈴木恵介
編集機関	公益財団法人　愛知県教育・スポーツ振興財団　愛知県埋蔵文化財センター
所在地	〒498-0017　愛知県弥富市前ケ須町野方802-24　TEL0567（67）4161
発行年月日	西暦2015年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
くるまづかいせき 車塚遺跡	おかざきしいわづちょう 岡崎市岩津町 あざくるまづか 字車塚	232025	510024	34度 0分 46秒	137度 10分 23秒	2009.7.7 ～ 2009.9.5 2009.9.25 ～ 2010.3.19 2010.10.6 ～ 2011.2.24 2011.6.1 ～ 2011.8.29	2000 4430 2300 800	道路改良工事 岡崎足助線

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
車塚遺跡	集落・墳墓	縄文時代 弥生時代末～古墳時代初頭 古墳時代後期～終末期 古代	炉跡 竪穴建物・方形周溝墓 古墳 掘立柱建物・溝・土坑	縄文土器・石器 弥生土器 須恵器・金環・鉄製品 古代～中世陶器	

文書番号	発掘届出（20埋セ3号 2008.4.8）・（21埋セ54号 2009.8.21）・（22埋セ131号 2010.8.9）・（23埋セ4号 2011.4.4 ） 通知（20教生241号 2008.4.20）・（21教生1171号 2009.4.20）・（22教生2547号 2011.2.24）・（23教生100号 2011.4.8 ） 終了届・保管証・発見届（20埋セ70号 2008.9.22）・（21埋セ122号 2010.3.5）・（22埋セ248号 2011.2.10）・（23埋セ69号 2011.8.22） 監査結果通知（22教生726-1号 2010.12.24）・（23教生378号 2011.9.2）

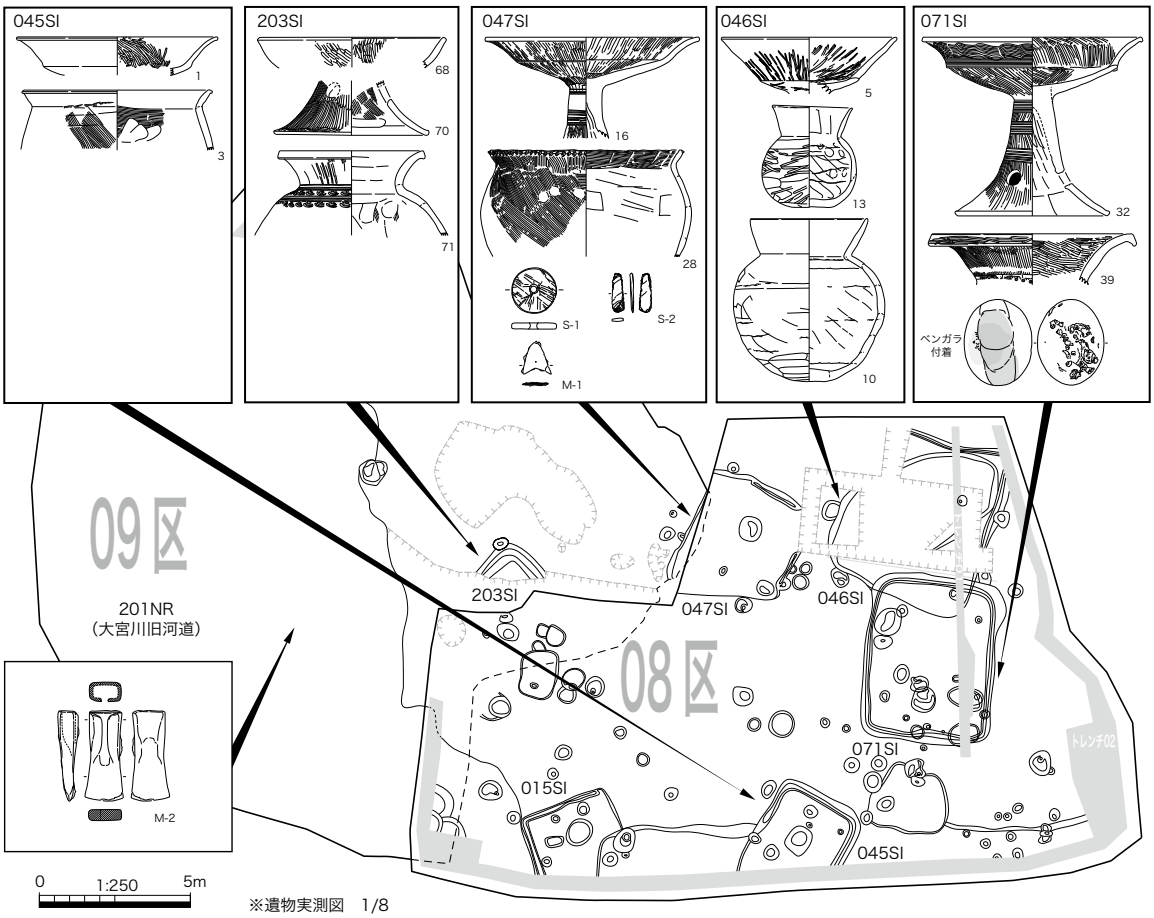
要　　約	縄文時代の遺構は断片的である。弥生時代末～古墳時代初頭では台地の北側縁辺部に竪穴建物、南側に方形周溝墓が展開する。古墳時代では南側斜面を中心に後期～終末期古墳が分布する。前段階の方形周溝墓群と分布域を異にしており注目できる。古代では調査区の中央部を中心に分布する竪穴建物と掘建柱建物で構成される居住域を確認している。

第191集　吉竹遺跡

吉竹遺跡は、新城市牛倉地区に所在する弥生時代後期から古墳時代前期の集落遺跡である。豊川支流の大宮川がつくる谷地形の入り口の台地上に立地する。集落は当該期の竪穴建物6棟が検出されたが、地形などから類推してその範囲は約800㎡に収まり、同時期に1～2棟程度の小規模なものと推測される。しかしながら竪穴建物跡からは、当該期の土器とともに石製紡錘車・無茎の三角形鉄鏃が出土している。また、集落の西から南側では大宮川の旧河道が確認され、ここからは袋状鉄斧が出土している。鉄斧の所属については確定的ではないものの、小さな集落であるにもかかわらず鉄製品を所持している点が注目されよう。

また集落中最大規模の竪穴建物071SIからは、屋根葺材もしくは壁材に使用された可能性が考えられる炭化したイネ科の草本類とシオジ節の木材が出土している。これらは樹種同定とともに炭素年代測定も実施し、2世紀前半～3世紀前半という暦年較正年代を提示し、出土した弥生時代後期の土器群との対比が可能になった。

新城市域では、吉竹遺跡と同時期に展開する集落が多数知られているが、今後はそれらの比較検討が課題になってくると思われる。　（永井邦仁）



吉竹遺跡の弥生後期～古墳前期集落と主要出土遺物

報告書抄録

ふりがな	よしたけいせき
書　　名	吉竹遺跡
副 書 名	
巻　　次	
シリーズ名	愛知県埋蔵文化財センター調査報告書
シリーズ番号	第191集
編著者名	永井邦仁 鬼頭剛 堀木真美子 早野浩二 (株)パレオ・ラボ年代測定分析チーム 小林克也
編集機関	公益財団法人　愛知県教育・スポーツ振興財団　愛知県埋蔵文化財センター
所在地	〒498-0017 愛知県弥富市前ヶ須町野方802-24　TEL0567(67)4161
発行年月日	西暦 2015年 3月 31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
よしたけいせき 吉竹遺跡	あいちけん しんしろし 愛知県新城市 うしくらあざよしたけ 牛倉字吉竹	23207	760284	34度 55分 37秒	137度 30分 54秒	2008.5.7～ 2008.6.18、 2009.6.18～ 2009.7.22	600	第二東海 自動車道 横浜名古 屋線建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
吉竹遺跡	集落	弥生時代 後期 ～ 古墳時代 前期	掘立柱建物跡、 竪穴建物、 土坑、 旧河道	土師器(高杯・甕・壺)、 石製紡錘車、 鉄斧、鉄鏃、 打製石斧、磨製石斧、 縄文土器	弥生時代後期から 古墳時代前期の 集落遺跡

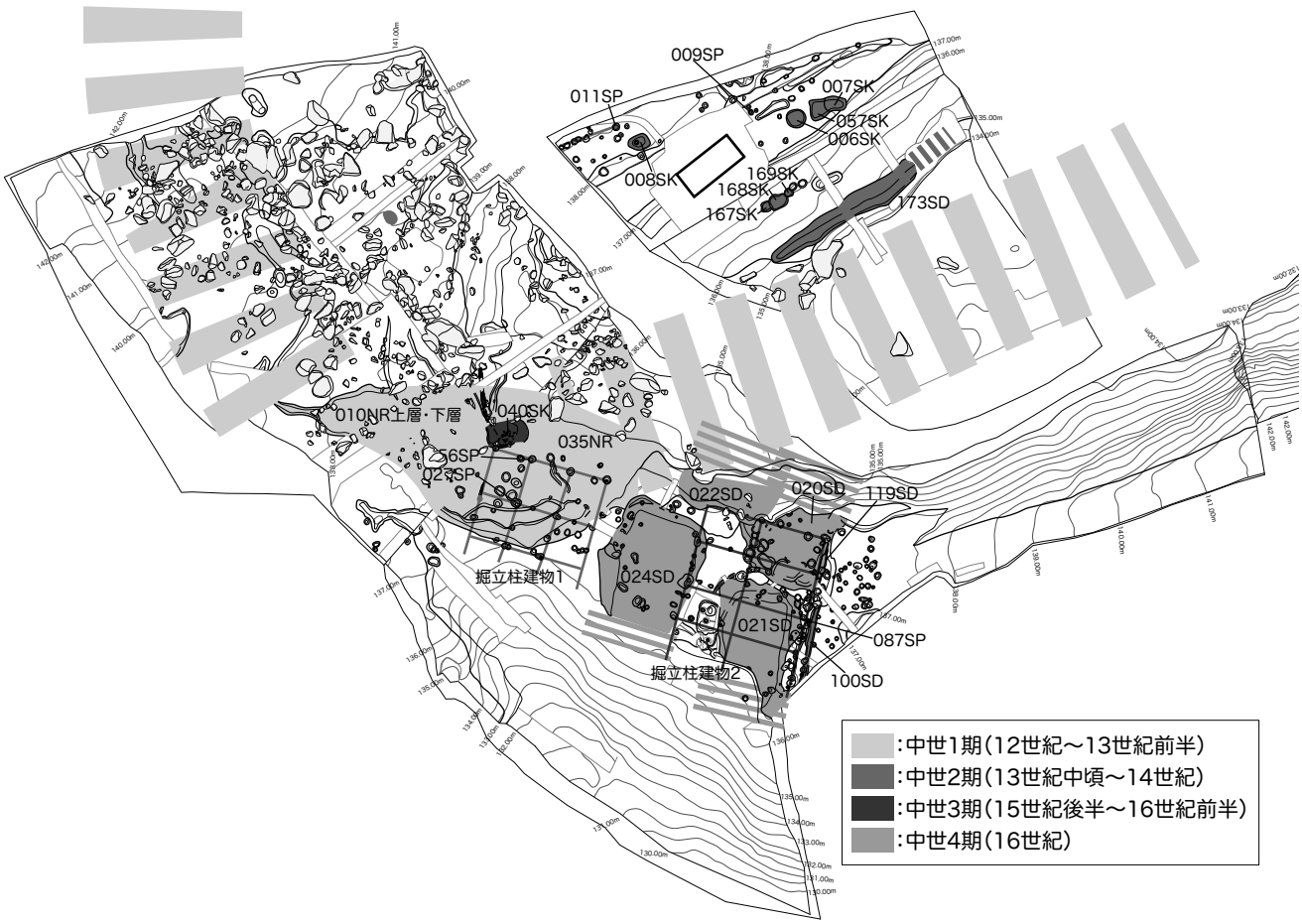
文書番号	発掘届出(19埋セ第122号 2008.3.26)　通知(20教生第205号 2008.4.23) 終了届・保管証・発見届(20埋セ第31号 2008.6.24) 鑑定結果通知(20教生第947号 2008.7.14) 発掘届出(21埋セ第9号 2009.4.1)　通知(21教生第141号 2009.4.15) 終了届・保管証・発見届(21埋セ第42号 2009.7.24) 鑑定結果通知(21教生第1097号 2009.8.19)
要約	当該遺跡は、豊川支流の大宮川が雁峰山地から流出する谷地形の入口に立地している。発掘調査では、竪穴建物5棟、掘立柱建物4棟が検出された。竪穴建物跡からは弥生土器・土師器が出土した他、弥生時代後期の竪穴建物跡からは石製紡錘車と鉄鏃が出土した。集落の一部は後世の洪水によって滅失しており、その旧河道下層からは同時代と推測される袋状鉄斧が出土している。 集落規模は丘陵・台地の端部を占める約800㎡に収まる小さなもので、かつ、その存続時期は弥生時代末期～古墳時代初頭の空白期を挟む、断続的なものである。

第192集　欠下城跡

欠下城跡は愛知県新城市中央部にある遺跡で、新城市による市指定史跡である。今回の発掘調査では、この史跡指定部分に隣接する地点を調査し、主に平安時代末から戦国時代の遺構と出土遺物が確認できた。

本報告書では、遺構の層序的検討と出土遺物の分析から、遺跡が平安時代後期から始まり、12世紀～13世紀前半に推定される土石流の後に、掘立柱建物・溝・土坑からなる居住域が鎌倉時代から室町時代まで続き、その後史跡欠下城跡のある丘陵との境界となる区画溝が形成されたとする遺構変遷を確認できた。鎌倉時代には調査区の一部で墓域も形成され、発掘調査地点の西に隣接した勅養寺観音堂との関連性も指摘した。新城地域の寺院跡と城館跡との関係を解明する上で、貴重な資料になるものと思われる。

（蔭山誠一）



欠下城跡の中世における遺構変遷（1:500）

報告書抄録

ふりがな	かけしたじょうあと
書　　名	欠下城跡
副 書 名	
巻　　次	
シリーズ名	愛知県埋蔵文化財センター調査報告書
シリーズ番号	第192集
編著者名	蔭山誠一 鬼頭 剛 中村賢太郎 小林克也 伊藤 茂 佐藤正教 廣田正史 山形秀樹 小林鉉一
編集機関	公益財団法人　愛知県教育・スポーツ振興財団　愛知県埋蔵文化財センター
所 在 地	〒498-0017 愛知県弥富市前ヶ須町野方802-24　　TEL 0567(67)4161
発行年月日	西暦 2015年 3月 31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
かけ したじょうあと 欠 下 城 跡	あいちけん しんしろし 愛知県新城市 や べ あざかけした 矢部字欠下	23221	76175	34度 55分 27秒	137度 30分 17秒	2010.10.25～ 2011.2.25 2011.6.3～ 2011.8.10	4,060	第二東海 自動車道 横浜名古 屋線建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
欠下城跡	城館	鎌倉時代、 室町時代、 戦国時代	掘立柱建物2棟、 溝10条、土坑多数、 自然流路5条	灰釉陶器、南部系陶器、 古瀬戸陶器、大窯陶器、 中世土師器、常滑産甕	調査区に隣接する市 指定史跡欠下城跡 と勅養寺旧観音堂と の関連遺跡

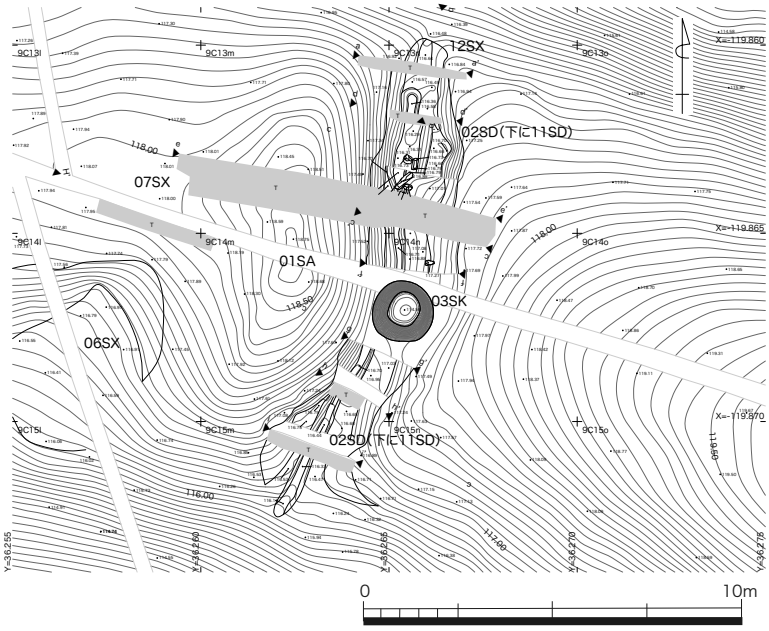
文書番号	発掘届出(22埋セ第137号・2010.8.19) 通知(22教生第1217号・2010.9.7) 終了届・保管証・発見届(22埋セ第266号・2011.3.25) 鑑定結果通知(23教生第98号・2011.4.8)

要約	本遺跡は、平安時代後期から始まり、12世紀～13世紀前半に推定される土石流の後に、掘立柱建物・溝・土坑からなる居住域が鎌倉時代から室町時代まで続き、その後史跡欠下城跡のある丘陵との境界となる区画溝が確認できた。鎌倉時代には調査区の一部で墓域も形成された。新城地域の寺院跡と城館跡との関係を解明する上で、貴重な資料になるものと思われる。

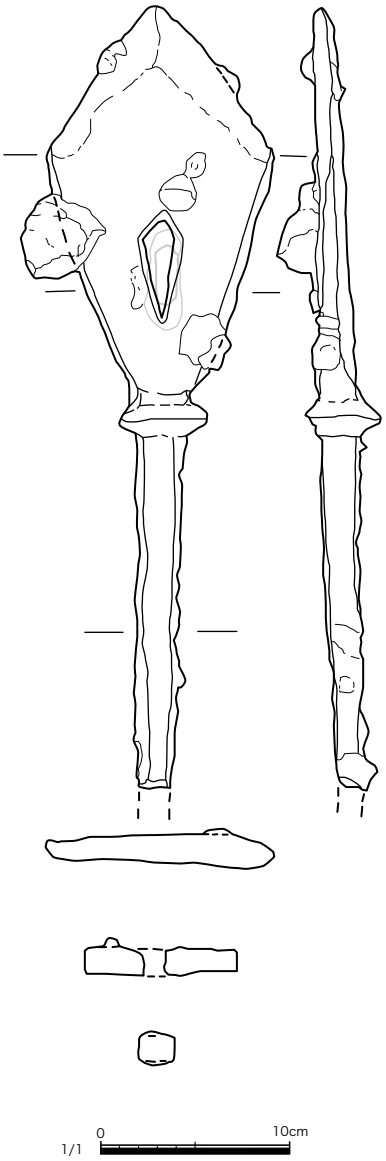
第193集　中山砦跡

中山砦跡は愛知県新城市東部にある遺跡で、天正3年（1575）にあった長篠・設楽ヶ原の戦いで、武田方の乗本五砦の一つとして文献資料の記録に残る砦跡である。今回の発掘調査により、戦国時代の遺構として、丘陵上に砦側を区切る土塁と堀切が確認され、また出土遺物では、当時の戦いに使用されたと考えられる鉄鏃1点を報告した。

今回の調査成果により、長篠・設楽ヶ原の戦いにおける中山砦跡について、具体的な姿を少し明らかにできた。　（蔭山誠一）



中山砦跡 10A 区の土塁 01SA と堀切り 02SD・11SD（1:200）



中山砦跡出土鉄鏃（1:1）

報告書抄録

ふりがな	なかやまとりであと
書　　名	中山砦跡
副 書 名	
巻　　次	
シリーズ名	愛知県埋蔵文化財センター調査報告書
シリーズ番号	第193集
編著者名	蔭山誠一
編集機関	公益財団法人　愛知県教育・スポーツ振興財団　愛知県埋蔵文化財センター
所 在 地	〒498-0017 愛知県弥富市前ヶ須町野方802-24　　TEL 0567(67)4161
発行年月日	西暦 2015年 3月 31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
なかやまとりであと 中 山 砦 跡	あいちけん しんしろし 愛知県新城市 のりもと 乗本	23221	773019	34度 55分 07秒	137度 33分 44秒	2010.6.7～ 2010.9.17	2,830	第二東海自動車道横浜名古屋線建設

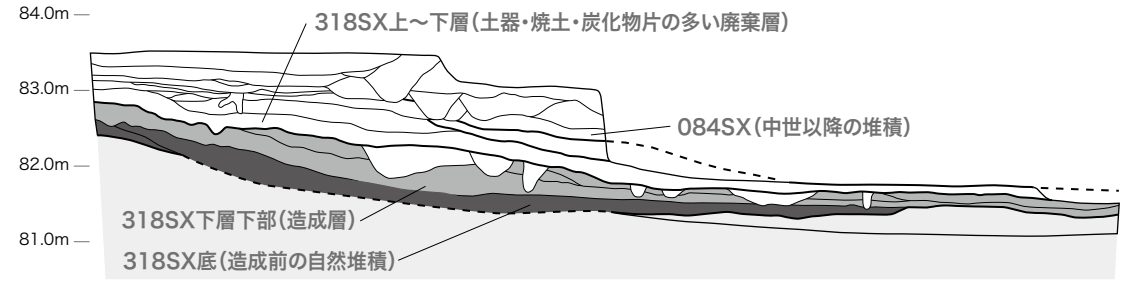
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
中山砦跡	城館	戦国時代	土塁・溝	鉄鏃	天正三年(1575)五月の長篠城・設楽ヶ原合戦に伴う乗本五砦の一つ

文書番号	発掘届出(21埋セ第137号　2010.3.10) 通知(21教生第2580号　2010.3.23) 終了届・保管証・発見届(22埋セ第157号　2010.9.17) 鑑定結果通知(22教生第1538号　2010.10.12)
要約	本遺跡は天正三年(1575)五月にあった長篠城・設楽ヶ原合戦に伴う乗本五砦の一つとして、文献資料において記録されている遺跡で、今回の発掘調査による成果により、戦国時代の可能性が高い遺構と遺物を確認できた。当時の状況を解明する上で、貴重な資料になるものと思われる。

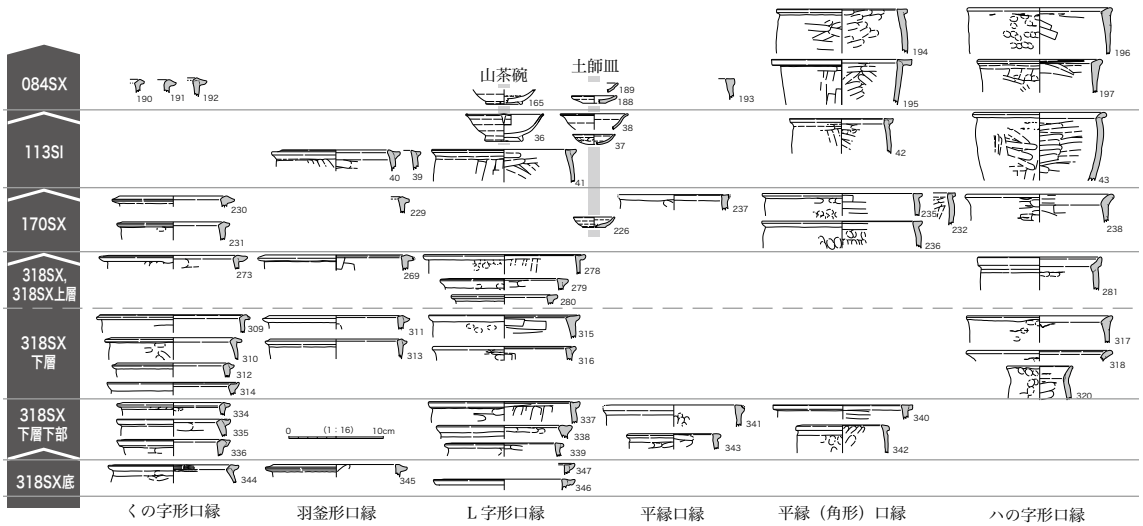
第194集　加原遺跡

加原遺跡は、新城市大宮地区に所在する。西の丘陵上に石座神社遺跡、東に豊川支流の連吾川を臨む、天正3年（1575）長篠・設楽原合戦の主戦場となった地域の一角でもある。しかしながら検出された遺構は古墳時代初頭の竪穴建物、平安時代中期～鎌倉時代の竪穴建物（竪穴状遺構を含む）と掘立柱建物、小谷地形の埋め立て造成層である。集落の中心となるのは平安時代中期～鎌倉時代であり、谷地形からは灰釉陶器・山茶碗と土師器甕が多数出土している。また、漆の付着した山茶碗や鉄滓・銅製品も出土していることから、当該期の小鍛冶を含む作業場であった可能性が考えられる。

遺物で最も注目されるのは、平安時代中～後期の厚手で短胴な清郷型土師器鍋である。加原遺跡では、12世紀代を中心とする羽釜形以外にも口縁部のくびれがほとんどないものや、平縁形のものがみられた。清郷型については、県内、静岡県、三重県、岐阜県などの伊勢湾岸地域での分布が知られ、今回、これらの出土資料から試料を得て胎土分析を実施した。そのうち断層破砕帯の粘土と海成粘土が混合したものについては、三河湾沿岸・幡豆地域がその材料粘土採取地の可能性が高いと考えられた。　（永井邦仁）



谷地形の土層断面



加原遺跡における谷地形の土層断面と層位別清郷型鍋の分布状況

報告書抄録

ふりがな	かはらいせき
書　　名	加原遺跡
副 書 名	
巻　　次	
シリーズ名	愛知県埋蔵文化財センター調査報告書
シリーズ番号	第194集
編著者名	永井邦仁 鬼頭剛 堀木真美子 藤根久 米田恭子 (株)パレオ・ラボ年代測定分析チーム
編集機関	公益財団法人　愛知県教育・スポーツ振興財団　愛知県埋蔵文化財センター
所在地	〒498-0017 愛知県弥富市前ヶ須町野方802-24　TEL0567(67)4161
発行年月日	西暦 2015年 3月 31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
かはらいせき 加原遺跡	あいちけん しんしろし 愛知県新城市 おおみやあざかはら 大宮字加原	23207	760282	34度 55分 37秒	137度 31分 24秒	2008.6.20～ 2008.11.30	2,000	第二東海 自動車道 横浜名古 屋線建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
加原遺跡	集落	縄文時代 ～ 鎌倉時代	掘立柱建物跡、 竪穴建物、 土坑等、 谷地形	縄文土器、石器、 土師器(高杯・甕・壺)、 須恵器(蓋・杯・甕)、 灰釉陶器(椀・皿)、 緑釉陶器、白磁、山茶碗、 土師器(椀・皿・甕)、 鉄滓、銅滓、	平安時代から 鎌倉時代を中心 とする集落遺跡

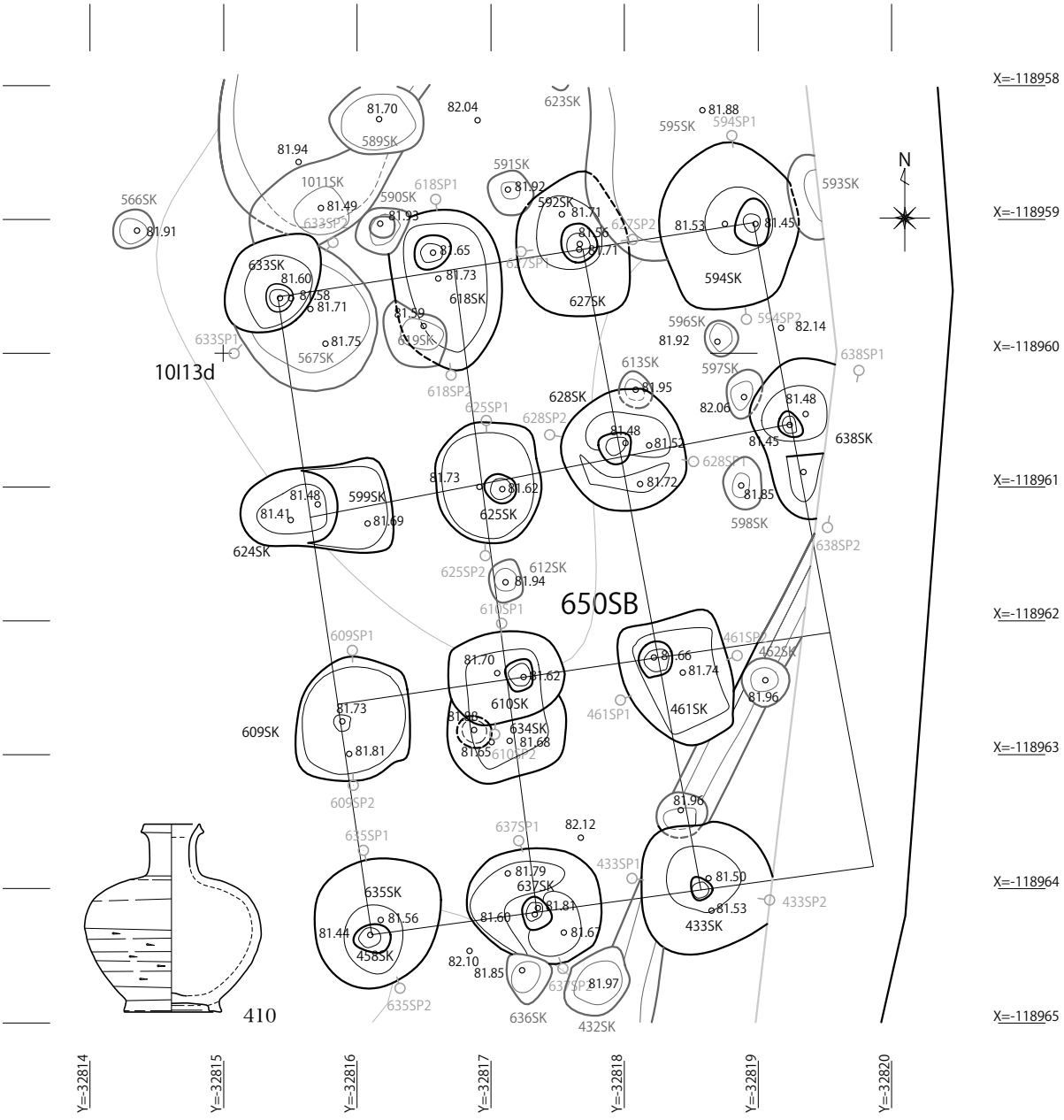
文書番号	発掘届出(20埋セ第20号　2008.5.26) 通知(20教生第631号　2008.6.6) 終了届・保管証・発見届(20埋セ第90号　2008.12.16) 鑑定結果通知(20教生第3250号　2009.3.30)

要約

当該遺跡は、豊川支流の連吾川右岸丘陵端に立地する。弥生時代末期から古墳時代初頭と、平安時代から鎌倉時代の遺構・遺物が出土する集落遺跡である。特に後者の時代が遺跡の主体であり、灰釉陶器・山茶碗だけでなく緑釉陶器や白磁が出土しており、若干ながら金属滓もみられることから、交易で器物を入手しつつ生産工房を内包していた可能性が想定される。時期は10世紀初頭の設楽郡分置から設楽荘の成立と重なり、その関連が注目される。また多数出土した当該期の土師器甕について、東海地域に分布する同一器種資料の胎土分析を実施し、その高い近似性を検出することができた。いくつかのタイプごとに特定の産地から供給されていた様相がうかがえる。

第195集　石岸遺跡

石岸遺跡は長篠・設楽原の戦いで決戦場となった連吾川左岸の東にある独立した小丘陵の東斜面に位置している。800㎡という小規模な面積の調査ながら、縄文時代中期から平安時代にかけての様々な遺構・遺物を確認した。なかでも飛鳥時代後期から奈良時代は、西側の小丘陵を削って大規模な整地を施し、B区において掘立柱建物を主体とする遺構群を確認した。特に8世紀後半に廃絶したとみられる総柱建物650SBは柱掘り方が1mを超える大規模なもので、一般集落とは異なる公的な機能を有する倉庫群の一部とみられる。　（樋上　昇）



石岸遺跡 B 区大型総柱建物 650SB および柱抜き取り穴出土遺物

報告書抄録

ふりがな	いしぎしいせき
書　　名	石岸遺跡
副 書 名	
巻　　次	
シリーズ名	愛知県埋蔵文化財センター調査報告書
シリーズ番号	第 195 集
編著者名	樋上　昇　鬼頭　剛　蔭山誠一　川添和暁　佐々木由香　バンダリ・スダルジャン　小林克也　井上　巌
編集機関	公益財団法人　愛知県教育・スポーツ振興財団　愛知県埋蔵文化財センター
所 在 地	〒498-0017　愛知県弥富市前ヶ須町野方 802-24　TEL 0567(67)4161
発行年月日	西暦 2015 年 3 月 31 日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
いしぎしいせき 石岸遺跡	あいちけんしんしろし 愛知県新城市 すながあざいしぎし 須長字石岸	23221	760285	34 度 55 分 39 秒	137 度 31 分 34 秒	2008.5.12 ～ 2008.9.20	800	第二東海自動車道横浜名古屋線建設

所収遺跡名	種 別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
石岸遺跡	集落跡	縄文時代中期～後期	竪穴建物、土坑	縄文土器、石器	
		弥生時代中期	竪穴建物、溝、土坑	弥生土器	
		飛鳥～平安時代	掘立柱建物、竪穴建物、溝、土坑、自然流路	須恵器、木製品、金属製品	柱掘り方の一辺が 1m を超える大型の総柱建物が 2 棟　官衙施設の可能性あり

文書番号	発掘届出（19 埋セ第 123 号　2008.4.4） 通知（20 教生第 206 号　2008.4.18） 終了届・保管証・発見届（20 埋セ第 123 号　2008.9.19） 鑑定結果通知（21 教生第 315 号　2009.5.14）

要　　約	豊川中流域の右岸に位置する 7 世紀後半～11 世紀の集落。A 区は自然流路・溝・竪穴建物・掘立柱建物からなり、B 区は分厚い整地層の上に建てられた掘立柱建物のみ。なかでも 8 世紀後半の総柱建物 2 棟は、柱掘り方の一辺が 1m を超える巨大なもので、一般集落よりも官衙的な機能が想定される。

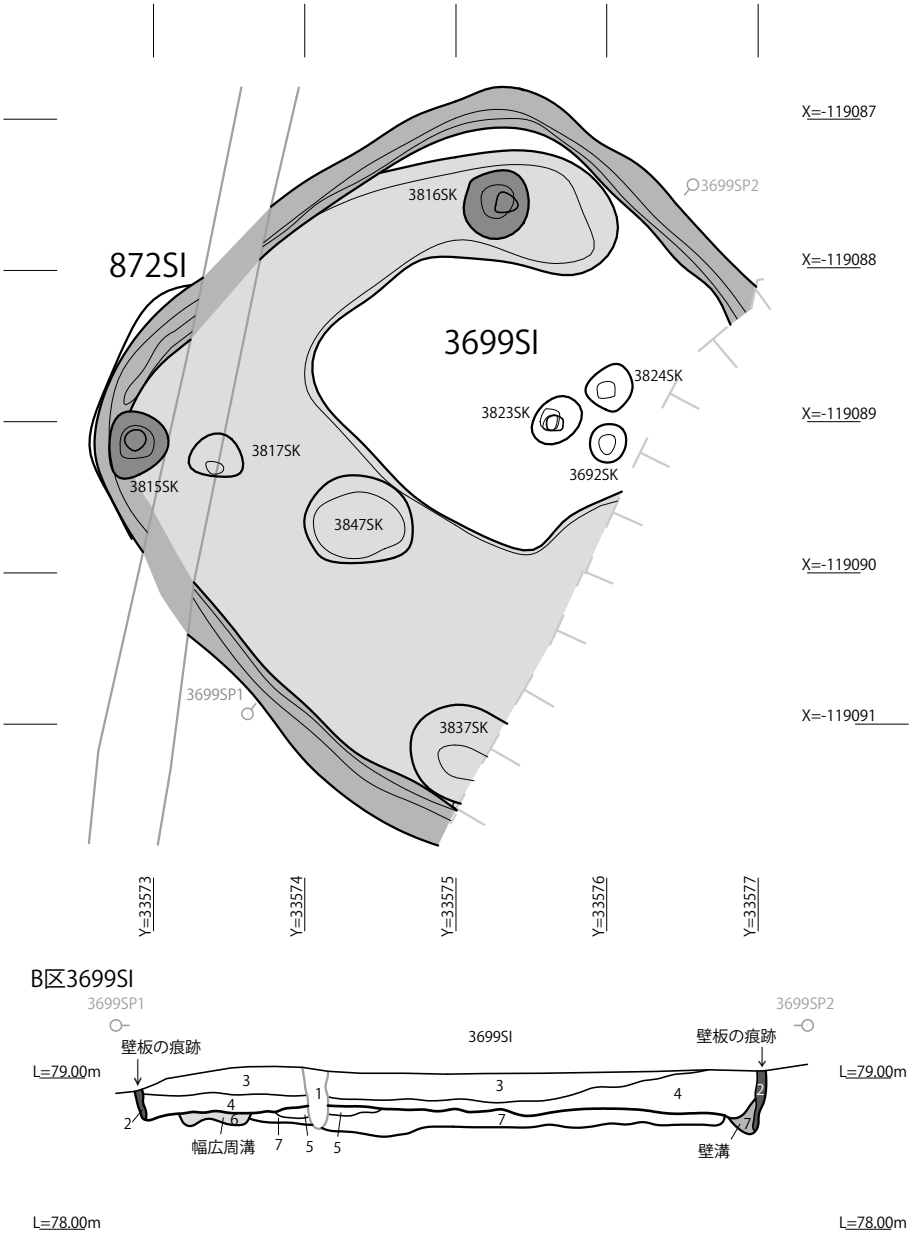
第196集　モリ下遺跡

モリ下遺跡は雁峰山から南に伸びる尾根筋のひとつで、五反田川に面した南西向きの緩やかな斜面に立地する縄文時代早期から戦国時代にかけての集落遺跡である。

縄文時代早期は押型文土器が多数出土しており、竪穴建物の可能性がある遺構も確認している。

古墳時代前期は多数の竪穴建物が展開する。規模はいずれも小さめだが、西三河に多い幅広周溝の床下施設をもつものが多数認められ、なかには壁溝に壁板痕跡を有する例も存在する。

鎌倉時代にも竪穴状遺構を主体とする遺構群が展開し、戦国時代にはこれらを溝で区画する集落に発展する。　（樋上　昇）



幅広周溝と壁板痕跡をもつ竪穴建物

報告書抄録

ふりがな	もりしたいせき
書　　名	モリ下遺跡
副 書 名	
巻　　次	
シリーズ名	愛知県埋蔵文化財センター調査報告書
シリーズ番号	第 196 集
編著者名	樋上　昇　鬼頭　剛　藤山誠一　川添和暁　佐々木由香　伊藤　茂　安　昭炫　佐藤正教　丹生越子　廣田正史 山形秀樹　小林紘一　バンダリ・スダルジャン　Zaur Lomtatidze　Ineza Jorjliani　小林克也　中村賢太郎　井上　巌
編集機関	公益財団法人　愛知県教育・スポーツ振興財団　愛知県埋蔵文化財センター
所 在 地	〒498-0017　愛知県弥富市前ヶ須町野方 802-24　TEL 0567(67)4161
発行年月日	西暦 2015 年 3 月 31 日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
もりしたいせき モリ下遺跡	あいちけんしんしろし 愛知県新城市 やつかほ 八束穂	23221	760286	34 度 55 分 33 秒	137 度 32 分 4 秒	2008.9.16 ～ 2009.3.18 2009.6.2 ～ 2009.12.4	6,600	第二東海自動車道横浜名古屋線建設

所収遺跡名	種 別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
モリ下遺跡	集落跡	縄文時代早期～後期	竪穴建物、土坑	縄文土器、石器	押型文土器
		古墳時代前期	竪穴建物、溝、土坑	土師器	幅広周溝をもつ竪穴建物
		飛鳥～平安時代		須恵器	
		鎌倉～戦国時代	掘立柱建物、竪穴状遺構、溝、土坑	山茶碗、陶磁器、土師器皿金属製品	溝で区画された居住域

文書番号	発掘届出（20 埋セ第 48 号　2008.7.30）・（21 埋セ第 18 号　2009.5.1） 通知（20 教生第 1201 号　2008.8.14）・（21 教生第 349 号　2009.5.18） 終了届・保管証・発見届（20 埋セ第 122 号　2009.3.19）・（21 埋セ第 90 号　2009.12.4） 鑑定結果通知（21 教生第 314 号　2009.5.14）・（21 教生第 2175 号　2010.1.20）

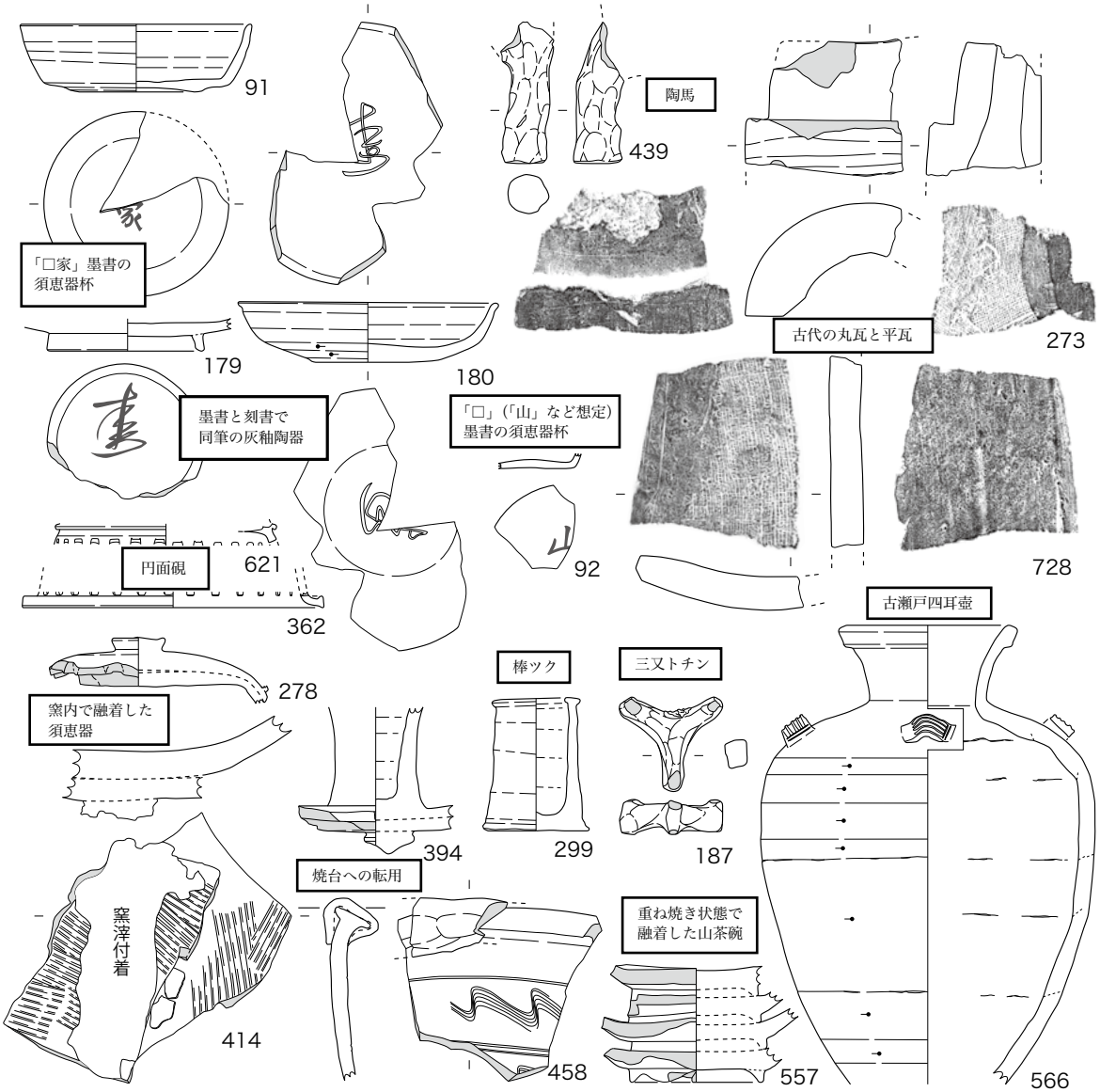
要　　約	豊川中流域の右岸に位置する古墳時代前期の集落。150 棟を超える竪穴建物を を検出。なかでも数棟は床下施設としての幅広周溝や、周壁を保護する壁板の痕跡 を確認。縄文時代早期の遺跡としても貴重な事例。中世は区画溝をめぐらす集落。

第197集　薬師ヶ根遺跡

薬師ヶ根遺跡は、豊明市沓掛町に所在する古代から中世の集落遺跡である。丘陵端部上の生活域と谷地形の廃棄層に区分され、後者では井戸や、大量の須恵器・灰釉陶器・山茶碗が出土している。近隣の窯に由来する製品の検品や仕分けをおこなった場所と考えられる。

整理作業では土器・陶器の重量構成を把握しながら、個別資料の特徴を抽出することに努めた。結果、須恵器・灰釉陶器の多くで使用痕跡が認められ、検品による廃棄だけではないことが想定された。また融着破片や窯道具も含まれていることから、窯との間で物の往来があった蓋然性が高い。

さらに、「□家」などの墨書のある奈良時代末の須恵器が出土しており、窯業生産だけでなく地域の拠点的な集落としての位置づけも考えられる。具体的には、付近に想定されている古代東海道および両村駅家との関連であるが、今後周辺遺跡の検討が必要であろう。また、戸板などから転用された井戸側板の樹種同定や、中世の竪穴状遺構から出土した炭化した種実（コムギなど）の同定と炭素年代測定を実施し、前者にはヒノキだけでなく比較的入手の難しいコウヤマキを一定量含む点も注目される。（永井邦仁）



薬師ヶ根遺跡の古代・中世を特徴づける陶器類

報告書抄録

ふりがな	やくしがねいせき
書　　名	薬師ヶ根遺跡
副 書 名	
巻　　次	
シリーズ名	愛知県埋蔵文化財センター調査報告書
シリーズ番号	第197集
編著者名	永井邦仁 鬼頭剛 (株)パレオ・ラボ年代測定分析チーム 小林克也
編集機関	公益財団法人　愛知県教育・スポーツ振興財団　愛知県埋蔵文化財センター
所在地	〒498-0017 愛知県弥富市前ヶ須町野方802-24　TEL0567(67)4161
発行年月日	西暦 2015年 3月 31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
やくしがね 薬師ヶ根 いせき 遺跡	あいちけん とよあけし 愛知県豊明市 くつかけちょう やくしがね 沓掛町薬師ヶ根	23229	120027	35度 04分 00秒	137度 01分 46秒	2006.7.24～ 2006.10.10、 2007.5.1～ 2007.6.29	1,400	県道春木 沓掛線 建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
薬師ヶ根遺跡	集落	後期旧石器時代 奈良時代後期～平安時代 鎌倉時代～江戸時代	遺構なし 掘立柱建物、溝、土器集積、井戸 溝、	ナイフ形石器、剥片 須恵器、棒ツク、土師器、墨書土器、刻書土器、古代瓦、融着片 灰釉陶器、三又トチン、墨書土器、刻書土器、 山茶碗、古瀬戸(四耳壺)、中世瓦、土師器羽釜、青磁、白磁、古銭、鉄滓、常滑産甕	奈良時代後半から平安時代の陶器生産に関わる集落 鎌倉時代から室町時代の金属加工工房を伴う集落

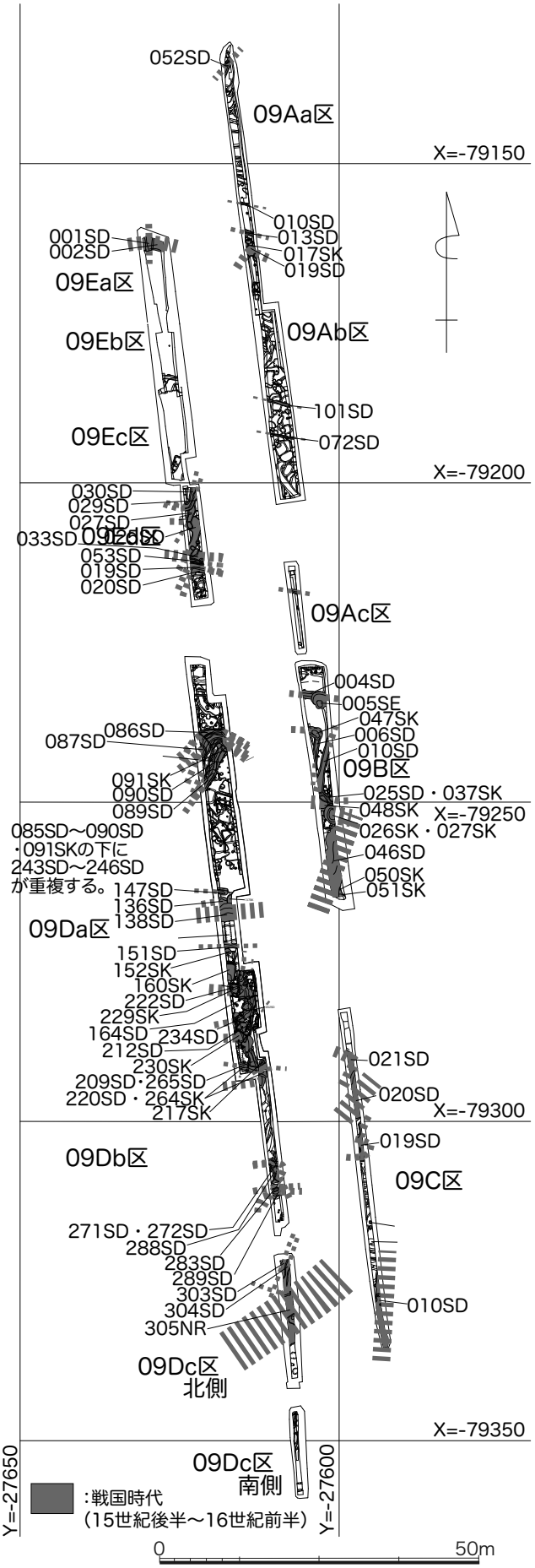
文書番号	発掘届出(18埋セ第21号 2006.5.25)　通知(18教生第785号 2006.7.14) 終了届・保管証・発見届(18埋セ第53号 2006.10.13) 鑑定結果通知(18教生第1843号 2006.11.24) 発掘届出(19埋セ第4号 2007.4.12)　通知(19教生第187号 2007.4.25) 終了届・保管証・発見届(19埋セ第39号 2007.7.4) 鑑定結果通知(19教生第1331号 2007.9.4)

要約

薬師ヶ根遺跡は、境川右岸の丘陵端部に位置する奈良時代から平安時代を中心とする時期に営まれた集落遺跡である。当該期には、集落の端から谷地形にかけての凹地に、廃棄された多数の須恵器・灰釉陶器が集積出土する。これには、付近丘陵地帯の窯で生産されたものの出荷にあたり、選別を行ったものが多く含まれている。その中心は8世紀後半～9世紀後半である。また、墨書土器・刻書土器がみられるのも特徴である。これには付近を古代東海道が通過し、両村駅家が設置されたことと関係するとみられる。

また、鎌倉時代から室町時代にかけても、付近の窯で生産された山茶碗が搬入された場所と考えられる。さらに竪穴状遺構などからは鉄滓・北宋銭・土師器羽釜などが出土し、鍛冶工房の存在もうかがえる。古瀬戸四耳壺や中世瓦が出土する溝もあり、沓掛城築城以前の地域の中心であった可能性も考えられる。

第198集　下新田遺跡



戦国時代における下新田遺跡の遺構（1:1,000）

下新田遺跡は愛知県岩倉市西部にある遺跡で、今回の発掘調査では、県道名古屋江南線改良工事に伴う道路脇の限定された調査範囲であったが、主に奈良時代から江戸時代にかけての遺構と出土遺物が確認できた。

本報告書では、遺構の重複関係の検討と出土遺物の分析から、奈良時代の竪穴建物からなる集落跡、平安時代末から戦国時代の溝・掘立柱建物・井戸・土坑からなる集落跡、江戸時代の掘立柱建物からなる集落跡の遺構変遷を明らかにした。特に戦国時代には、東南東から西北西にのびる溝が並行してあり、その溝の軸線に対応する方形区画が想定できた。方形区画には、大型の溝で囲まれるものがあり、また石製茶臼の出土する区画も存在することを示した。これらの遺構について、遺跡周辺の表層地形と明治17年の地籍図の分析から、戦国時代の岩倉城跡から旧河道跡を挟んで西に立地する集落跡である景観を想定できた。

（蔭山誠一）

報告書抄録

ふりがな	しもしんでんいせき
書　　名	下新田遺跡
副 書 名	
巻　　次	
シリーズ名	愛知県埋蔵文化財センター調査報告書
シリーズ番号	第198集
編著者名	蔭山誠一　鬼頭　剛
編集機関	公益財団法人　愛知県教育・スポーツ振興財団　愛知県埋蔵文化財センター
所 在 地	〒498-0017 愛知県弥富市前ヶ須町野方802-24　　TEL 0567(67)4161
発行年月日	西暦 2015年 3月 31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
しもしんでんいせき 下新田遺跡	あいちけん　いわくらし 愛知県岩倉市 すずいちょうあざしもしんでん 鈴井町字下新田	23228	110052	35度 17分 17秒	136度 51分 46秒	2009.10.11～ 2010.2.16	2,100	緊急地方道路整備事業(主)名古屋江南線建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
下新田遺跡	集落	奈良時代、 鎌倉時代、 室町時代、 戦国時代、 江戸時代	竪穴建物跡22棟、 掘立柱建物1棟、 柱列2基、溝66条、 土坑27基、井戸1基、 自然流路1条	須恵器、土師器、 製塩土器、灰釉陶器、 南部系陶器、古瀬戸陶器、 大窯陶器、中世土師器、 常滑産甕、近世陶磁器、 石製茶臼、石鏃	遺構・遺物の中心は、奈良時代と室町時代～戦国時代にあり、戦国時代の遺構は岩倉城跡に併行する時期のものである。

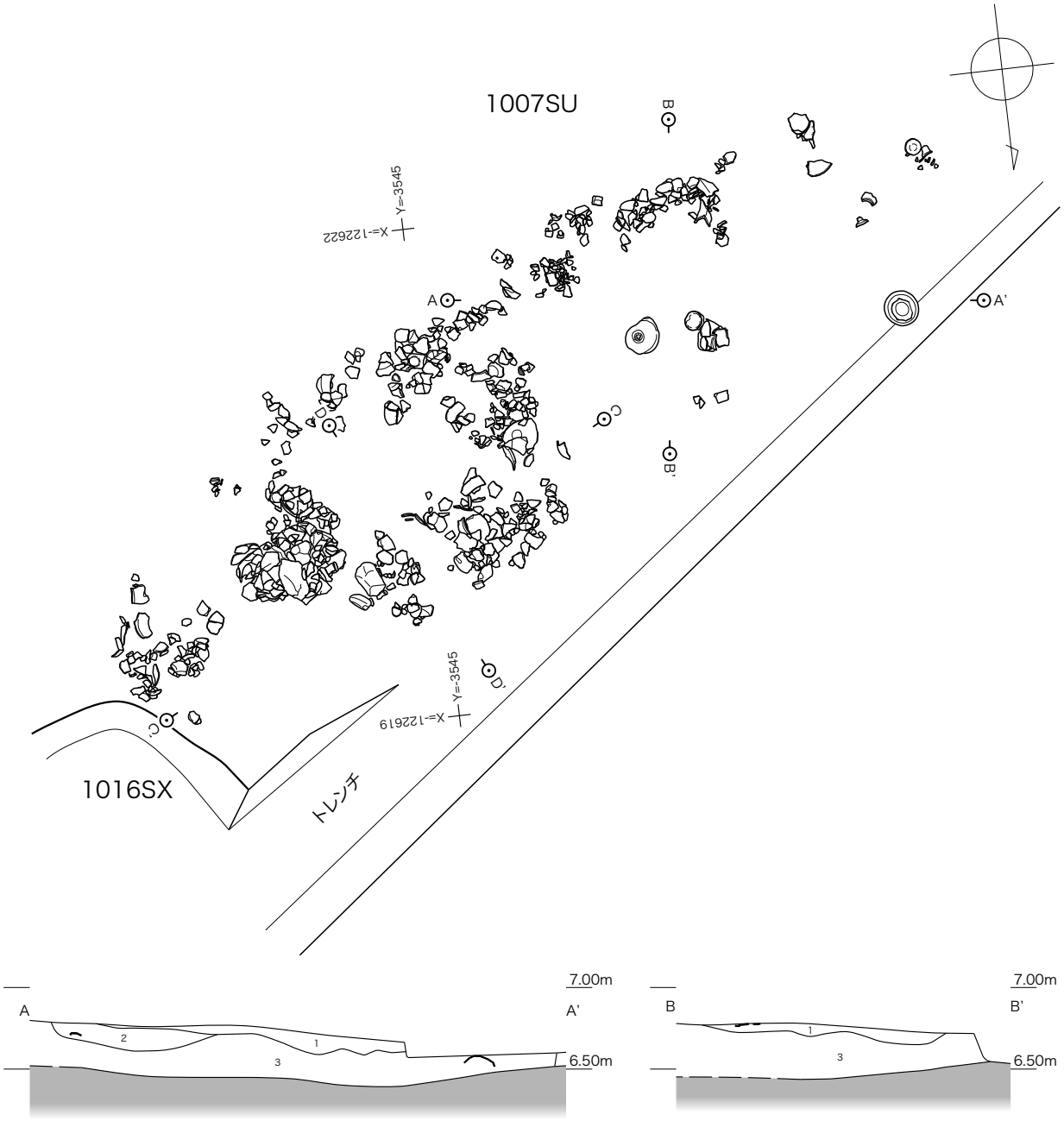
文書番号	発掘届出(21埋セ第56号・2009.8.20) 通知(21教生第1162号・2009.8.25) 終了届・発見届・保管証(21埋セ第116号・2010.2.25) 鑑定結果通知（21教生第2717号・2010.3.29)

要約	本遺跡は、白鳳時代から江戸時代にかけての複合遺跡で、奈良時代の竪穴建物跡を主体とす居住域が広がる時期と平安時代末～戦国時代の掘立柱建物・柱列・溝・土坑・井戸からなる居住域が広がる時期に遺跡の中心がみられる。特に戦国時代の遺構は、遺跡の南東にある岩倉城跡と併存するものであり、石製茶臼の出土にみられる喫茶などが営まれる施設の存在が想定される。今後の岩倉地域における城館跡と集落の関係を解明する上で、貴重な資料になるものと思われる。

第200集　八畝畑遺跡

八畝畑遺跡は岡崎市南西部に所在し、矢作川及びその支流によって形成された氾濫原の沖積地に立地する。調査では、第１面において古代の竪穴建物、掘立柱建物、中世の井戸等が確認され、第２面においては古墳時代初頭から前期と思われる竪穴建物、土坑、遺物集積、自然流路等が確認された。

（松田　訓）



八畝畑遺跡土器集積 1007SU 平面・断面図

報告書抄録

ふりがな	やせばたいせき
書　名	八畝畑遺跡
副 書 名	
巻　次	
シリーズ名	愛知県埋蔵文化財センター調査報告書
シリーズ番号	第200集
編著者名	松田 訓　宮腰健司　パレオ・ラボ株式会社
編集機関	公益財団法人　愛知県教育・スポーツ振興財団　愛知県埋蔵文化財センター
所在地	〒498-0017　愛知県弥富市前ヶ須町野方８０２-２４　℡0567(67)4161
発行年月日	西暦　２０１５年３月３１日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
やせばたいせき 八畝畑遺跡	あいちけんおかざき 愛知県岡崎 ししょうなまち ふき 市正名町吹 の　やせばた 野・八畝畑	23202	510326	34度 53分 28秒	137度 7分 51秒	2013.05.07 ～ 2013.10.29	3500	岡崎碧南線 建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
八畝畑遺跡	集落ほか	古墳 ～中世	竪穴建物 土坑、井戸	古式土師器 須恵器	

文書番号	発掘届出（25埋セ第1号　2013.4.1） 通知（25教生第149号　2013.4.16） 終了届・発見届・保管証（25埋セ第92号　2013.10.29） 鑑定結果通知（25教社第611号　2013.11.14）

要約	本遺跡は矢作川及びその支流によって形成された沖積地に立地し、洪水性堆積層に覆われた古墳時代の遺物集積や、弥生時代後期から古墳時代前期の土坑、竪穴建物跡、溝などを検出した。これらの上面からは、古代の竪穴建物跡、掘立柱建物跡、土坑などのほか、中世の井戸も検出され、居住域が想定される。本遺跡は、沖積地上に展開する遺跡群に含まれているものと思われ、周辺の集落遺跡を含めた実態を解明する上で、貴重な資料として位置づけることができよう。

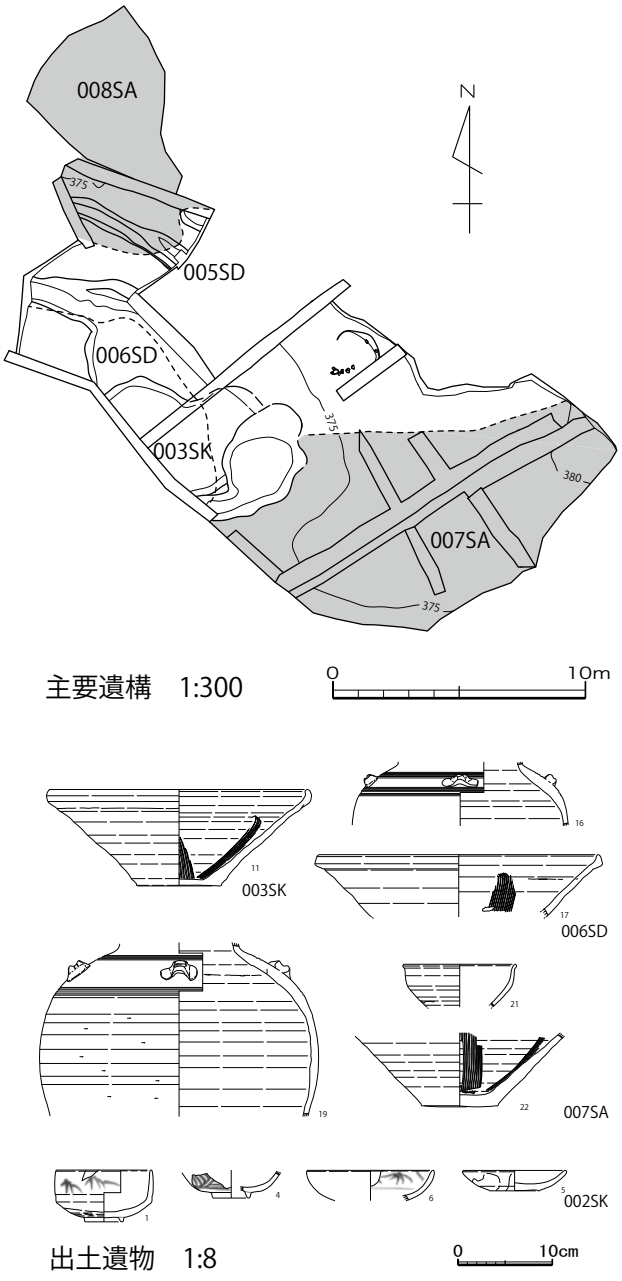
第201集　大平本城

発掘調査は、急傾斜地崩壊対策事業に伴うもので、愛知県教育委員会を通して委託を受けた愛知県埋蔵文化財センターが実施した。調査は、面積310㎡。調査期間は平成23(2012)年10月～11月である。

大平本城の眼下には県道19号線(土岐足助線)が南北に伸びる。路面(標高360m)と調査区との比高は14m(路面と主郭の比高は36m)をはかる。昭和39(1964)年刊行の『小原村誌』は、大内下総守久政の居城とし、文正元(1466)年に岩津城主松平信光の攻撃により落城したと記述する。

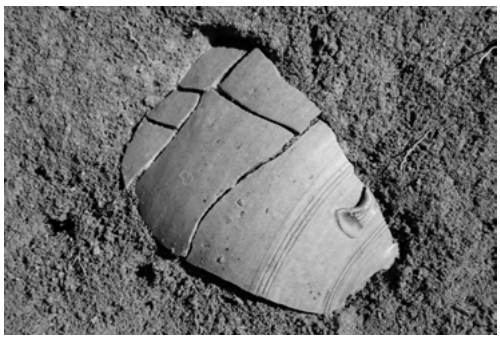
今回の調査区は大平本城の南側斜面となる小規模な三段の平坦とその間の斜面となる。

調査の結果、下段の平坦面で東西に土塁が検出された。全面と背面が急峻な斜面となり、大平本城の南側の平坦面の一部であったと考えられる。　(池本正明)









大平本城の遺構および出土遺物

報告書抄録

ふりがな	おおだいらほんじょう
書　名	大平本城
副 書 名	
シリーズ名	愛知県埋蔵文化財センター調査報告書
シリーズ番号	第201集
編著者名	池本正明
編集機関	公益財団法人　愛知県教育・スポーツ振興財団　愛知県埋蔵文化財センター
所 在 地	〒498-0017　愛知県弥富市前ケ須町野方802-24　TEL 0567（67）4161
発行年月日	西暦2015年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
おおだいらほんじょう 大平本城	とよたしおおだいらちょう 豊田市大平町 しもやしき 下屋敷	23211	663001	35度 15分 7秒	137度 14分 46秒	2012.10.4 ～ 2012.11.30	310	急傾斜地 崩壊対策事業

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
大平本城	城館	戦国時代	土塁	施釉陶器・土師器	

文書番号	発掘届出（23埋セ72号 2011.8.23） 通知（23教生1561号 2011.10.11） 修了届・保管証・発見届（23埋セ125号 2011.11.30） 鑑定通知（24豊教2824号 2012.4.6）

要 約	土塁007SA・08SAに東西を挟まれた平坦面を確認した。南北は急峻な斜面となり、曲輪と考えられる。 南側は造成土により拡幅されており、この部分からは15世紀後半頃に属する古瀬戸擂鉢片が出土している。

IV. 埋蔵文化財展・埋蔵文化財講演会の記録

平成26年度　埋蔵文化財展等の活動について

1　目的と概要

愛知県埋蔵文化財センターの発掘調査により出土した資料を広く公開するとともに、歴史講座や体験プログラムなど多彩な企画を通じて、県民の埋蔵文化財に対する理解を深め、文化財保護意識の向上を図ることを目的とした。

2014年度は、春に新出土品展、夏に施設公開と子供向け講座、秋に連続歴史講座・体験発掘・考古学セミナーを実施した。

2　埋蔵文化財新出土品展

1）会場：愛知県埋蔵文化財調査センター

2）会期

平成26年4月5日（土）から4月20日（日）

3）展示会名

新出土品展「やとみ新発見展！」

4）開催趣旨

弥富市にある「愛知県埋蔵文化財調査センター」にて、「やとみ新発見展（しんはっけんでん）！」と題して、昨年度の発掘調査成果について、展示解説を実施。入館無料。

5）内容

○埋文桜ニュース発行

○展示

2階 資料管理閲覧室

「考古楽さんぽ」展

―尾張国の城下町と街道―

2階 収蔵庫C

「新出土品展2014」

「土器クロニクル」展

1階 ロビー　2階 廊下 パネル展示

配布資料：埋文桜ニュース（遺跡の概要説明）

ペーパークラフト（パレス土器）

遺跡の紹介しおり

＊全期間中の来館者：1,316名

6）考古楽縁日

開催日初日2日間は、弥富市社会教育センターで「やとみ春まつり」が開催されるのに合わせ、埋蔵文化財および当センターの活動を周知する目的で「考古楽市2014」を実施。

○縁日品目

弓、輪投げ、水風船、鯨面体験、写真撮影

＊縁日参加者数：1,008名

7）その他

外部より開館していることがわかるよう、布製の垂れ幕や、ノボリを多数設置。また「やとみ春まつり」会場にて、チラシの配布を行う。また、調査センター入り口付近においても、チラシの配布を行った。

同期間中、愛知県埋蔵文化財調査センターが国指定重要文化財である「朝日遺跡」の遺物を臨時に展示。その件について、4月4日中日新聞（愛知県内版）、4月17日朝日新聞（県内版）に記事が掲載される。4月19日（土）・20日（日）は、センター近隣で祭礼が行われた。

2014春の埋文展　入館者数

	入館者数
4月5日（土）	472
4月6日（日）	536
4月7日（月）	44
4月8日（火）	16
4月9日（水）	15
4月10日（木）	20
4月11日（金）	24
4月12日（土）	（休館）
4月13日（日）	（休館）
4月14日（月）	14
4月15日（火）	12
4月16日（水）	11
4月17日（木）	23
4月18日（金）	24
4月19日（土）	54
4月20日（日）	51
合計	1,316



▲「埋文桜ニュース」



▲「埋文金魚ニュース」

3　施設公開および子供向講座

1) 会場：愛知県埋蔵文化財調査センター

2) 会期

平成26年7 月23 日（水）から8 月29 日（金）

日時：9 時から16 時

休館日：日曜日、7/26（土）、8/2（土）、23（土）

3）開催趣旨

夏休み期間中に、センターの事業紹介を目的に、体験イベント等を行う。

4）内容

全て参加費無料。

○金魚ニュース発行

○バックヤードツアー＆展示解説

内容：日常の業務の紹介と展示解説

会場：全館

日時：隔週水曜日（7/23,8/6,8/20）

午前11 時から　合計３回

＊総参加者数9 名

○毎日体験メニュー（体験事業）

日時：公開日9 時から16 時



▲鯨面体験コーナー



▲射的



▲子供向け講座１



▲バックヤードツアー







▲連続歴史講座レジュメ

夏のイベントの入館者数

	子供数	大人数	自主イベント	団体	展示のみ
7月23日(水)		8	バックヤード　4名		4
7月24日(木)	1	6			7
7月25日(金)		1			1
7月26日(土)	-	10		新清須会議準備会　10名	-
7月27日(日)	-	-	-	-	-
7月28日(月)		7			7
7月29日(火)		1			1
7月30日(水)	2	8			10
7月31日(木)		10			10
8月1日(金)		1			1
8月2日(土)	-	-	-	-	-
8月3日(日)	-	-	-	-	-
8月4日(月)		3			3
8月5日(火)		1			1
8月6日(水)	4	6	バックヤード　0名		10
8月7日(木)		37		海部地区教員研修　31名	6
8月8日(金)		25		岡崎高校　17名	8
8月9日(土)	2	2	こども講座1　4名		
8月10日(日)	-	-	-	-	-
8月11日(月)		2			2
8月12日(火)					
8月13日(水)					
8月14日(木)		6			6
8月15日(金)	2	5			7
8月16日(土)	5	1	こども講座2　4名		2
8月17日(日)	-	-	-	-	-
8月18日(月)		4			4
8月19日(火)	1	7			8
8月20日(水)		9	バックヤード　5名		4
8月21日(木)		19		サマーセミナー　18名	1
8月22日(金)		2			2
8月23日(土)	-	-	-	-	-
8月24日(日)	-	-	-	-	-
8月25日(月)		2			2
8月26日(火)		2			2
8月27日(水)		3			3
8月28日(木)		4			4
8月29日(金)		1			1
小計	17	193	17	76	117
合計		210名			

会場：2階吹き抜け
内容：＊土器の接合　＊黥面体験
＊ペーパークラフト作成
＊円窓付土器の使用法投稿掲示板設置
→投稿された絵の内、公開の許可が確認できたものををweb上に公開。
(特設ページアクセス数：523件)

○こども講座「考古ラボ」
対象：小学校高学年以上。事前申込。

・第1回 「ムカシの食物をさぐる」
日時：8月9日(土)午前
会場：収蔵庫Cほか
講師：川添和暁
内容：遺跡から出土する骨や貝などから、食事の内容を想像する。また出土遺物に付けられた模様を貝を用いて付けられていることを観察し、実際に年度にその模様をつける体験を実施。
＊参加者数4名

・第2回 「ムカシの環境をさぐる」
日時：8月16日(土)　午前
会場：分析室ほか
講師：鬼頭　剛
内容：遺跡の調査にともなう環境復元の方法を解説する。中でも珪藻について詳しく学び、現生の珪藻の観察を行う。
＊参加者数4名

○展示
会場：収蔵庫C
春の新出土品展を継続。公開期間中のみ、遺跡紹介の音声付き画像webコンテンツを作成し、QR コードでアクセスするパネルを設置。紹介遺跡数は6件。
(アクセス総数：2,233件)

5)総参加者数：210名

6)その他
イベントの開催通知は、春のイベント資料に掲載のほかは、web上で告知した。地域のコミュニティーFM局に弥富市商工観光課の紹介で出演し、イベント告知を行った。

3　連続歴史講座「食と器」

1)会場：愛知県埋蔵文化財調査センター
2階研修室

2)開催趣旨
発掘調査で得られた最新の情報を、テーマ毎に解説する一般向け講座。

3)内容
全て参加費無料。午前10 時から12 時。

・10 月11 日(土)　歴史講座「食と器1」
『お米を食べ始めた頃の厨房器具』
講師：永井宏幸　＊参加者数12名

・10 月25 日(土)　歴史講座「食と器2」
『尾張国府と奈良・平安時代の食器』
講師：永井邦仁　＊参加者数15名

・11 月　8 日(土)　歴史講座「食と器3」
『中世調理具事情―「擂鉢」と― 』
講師：武部真木　＊参加者数12名

・11 月22 日(土)　歴史講座「食と器4」
『江戸時代のセレブな食塩』
講師：松田　訓　＊参加者数12名

4)その他
講座資料として、12頁のカラーリーフレットを作成し配布した。各講座の出席者には、関連する遺物のペーパークラフトを配布。4講座全ての出席者には、エコバックを配布。
歴史講座の開催にあたり、近隣地区に弥富市商工観光課を通じ、回覧板を200部提出。9月下旬から10月上旬にかけて回覧実施。回覧による参加者は数名確認できた。

第３回 考古学セミナー「あいちの考古学2014」の記録

今年で３回目の考古学セミナー「あいちの考古学」は、愛知県内外で活動する県・市町村教育委員会、財団法人、大学、特定非営利活動法人（NPO）、民間調査組織、研究グループなどが一同に会して、考古学に関係する研究成果を一般県民に公開し、情報を共有するため開催している。１回目は愛知県陶磁資料館（現愛知県陶磁美術館）、２回目は弥富市社会教育センターで開催し、回を重ねるたびに注目されるようになってきた。今年の「あいちの考古学2014」は名古屋市博物館・名古屋市見晴台考古資料館との共催で２日間にわたり口頭発表、セッション、ポスターセッションをおこなった。

今回は、参加者の協力により、ポスターセッションの会場で考古資料を一部について直接触れてもらうことができた。今後も、興味深い調査研究の成果や最新の話題を広く募集し、県民に親しみやすく楽しい内容を提供していきたいと考えている。

1) 主催：愛知県埋蔵文化財センター・名古屋市博物館・名古屋市見晴台考古資料館
2) 日時：平成２６年11月29日（土）午後１時から午後４時、11月30日（日）午前10時から午後４時
3) 会場：名古屋市博物館　講堂（口頭発表・セッション・講演）・展示説明室（ポスターセッション）
4) 参加者数　11月29日（土）　157名　　11月30日（日）　190名　　合計347名



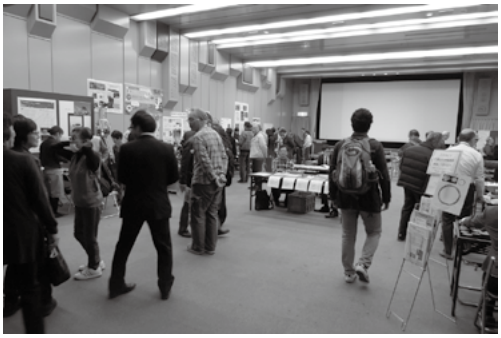
プレゼンテーション（田原市教委清水俊輝）


セッション１（29 日）


基調講演（京都府立大菱田哲郎）


セッション２（30 日）


朝日遺跡写真展（展示説明室）


ポスターセッション会場（展示説明室）

V. 埋蔵文化財センターの活動

資料の貸出・提供

貸出先	目的	遺跡名	貸出・提出資料	期間
安城市歴史博物館	常設展に利用のため。	第147 集　西牧野遺跡	PL29　上段左 PL30　中段右　2点	2014/4/11
新・清須会議実行委員会	守護所シンポジウム2（平成26 年8 月23・24 日開催予定） 開催広報用チラシに利用のため。	第183 集　清洲城下町遺跡XI	写真図版12・13 より （183-145.jpg,183-180.jpg,183-178.jpg, 183-156.jpg,183-154.jpg,183-147.jpg）　6点	2014/4/30
豊田市郷土資料館	根川1・2 号墳の調査成果をまとめるための 参考資料として利用するため。	根川遺跡	調査時記録写真 6×7 カラーポジ　1式 35mm スライド　1式 デジタルデータ　2点　4点	2014/5/2
公益財団法人 瀬戸市文化振興財団	平成26 年度出土品展「矢田川流域の集落遺跡」 に利用のため。	第125 集　吉野遺跡	調査時記録写真 （125　025.jpg,125-026.jpg,125-048.jpg）　3点	2014/5/13
		第90 集　志賀公園遺跡	調査時記録写真 （090120.jpg,090-023.jpg, 0909-029.jpg,090-177.jpg）　4点	
国土交通省中部地方整備局 設楽ダム工事事務所	「設楽ダムだより」に利用のため。	設楽ダム工事関連遺跡	範囲確認調査報告書データ　9点	2014/5/15
特定非営利活動法人 古代邇波の里・文化遺産 ネットワーク	企画展「まるまど貝塚の國」および公開講座に利用のため。	朝日遺跡	関連資料　6点	2014/5/26
一宮市博物館	常設展に関わる解説パネル及び展示図録に利用のため。	第66集　大毛沖遺跡	写真29　1点	2014/5/29
		第107集　猫島遺跡	第10 図　環濠と付帯施設 写真図版21 写真図版21　類似　3点	
		第71集　田所遺跡	墳墓堂イメージ図 図版9　2点	
大学共同利用機関法人 人間文化研究機構 国立歴史民俗博物	企画展「弥生ってなに？」に関わる解説パネル及び展示図録に 利用のため。	朝日遺跡	装身具写真　1点	2014/6/6
一宮市博物館	常設展に関わる解説パネル及び展示図録に利用のため。	第73集　西上免遺跡	96 区全景写真(073-141.jpg)　1点	2014/6/20
		第92集　八王子遺跡	Ba 区SX05 検出状況写真(092-005.jpg) Ba 区NR01-3 層写真(092-006.jpg) 銅鐸A 面写真(092-012.jpg) 銅鐸B 面写真(092-014.jpg) B 面左裾写真(092-017.jpg) 銅鐸ヒモ擦れ跡(092-301.jpg)　6点	
		第107集　猫島遺跡	遺跡全景（neko003.jpg） 内環濠SD01 土層断面(neko002.jpg)　2点	
設楽原をまもる会	黎明書店「戦国ウォーク　長篠・設楽原の戦い」 に利用のため。	石座神社遺跡	出土した鉛玉のデータおよび発掘調査写真　3点	2014/6/30
可児市教育委員会	可児郷土歴史館　企画展示 「美濃金山城から天下統一を探る」に利用のため。	第53集　清洲城下町遺跡	91E 区発掘調査写真（053　093.jpg）　1点	2014/6/30
岡崎市立北野小学校	社会科副読本「北野の里」に利用のため。	第136集　小針遺跡	図版1　（1）A区全景（北東より） （136-001.jpg）　1点	2014/7/22
愛知県教育委員会教育長	企画展「朝日銅鐸―埋められた謎の祭器」 に利用のため。	朝日遺跡	銅鐸埋納坑及び銅鐸レプリカ 復元銅鐸および展示台　2点	2014/8/27
		八王子遺跡	銅鐸レプリカ　1点	
国分寺市教育委員会	特別展「国分寺市の今昔」に利用のため。	猿投窯分布地図	（2010 年1000 年前のハローワーク　8ｐ掲載図）　1点	2014/9/2
セインズベリー― 日本藝術研究所	オンライン英語教材に利用のため。	朝日遺跡	木製品一覧写真　1点	2014/9/8
尼崎市教育委員会	特別展「弥生の食べもの」に利用のため。	朝日遺跡	石鏃の刺さったニホンジカの腰椎写真 石鏃の刺さったニホンジカの腰椎拡大写真 ニワトリ中足骨写真　3点	2014/9/8
株式会社　ユニオン	建通新聞への投稿および貴社ホームページに掲載のため。	寄島遺跡	2014-08-21　作業風景　1点	2014/9/25
株式会社　はる制作室	宝島社発行ムック「邪馬台国と卑弥呼」 に利用のため。	第30集　朝日遺跡	61D 区下面遺構群　全景（東から）写真（030 248.jpg）　1点	2014/9/25
株式会社　Ｇ．Ｂ．	デアゴスティーニ・ジャパン刊「日本の神社」第47号 に掲載のため。	第30集　朝日遺跡	61KL 区　（030-387.jpg ）　1点	2014/10/31
瀬戸市教育委員会	平成26 年度文化遺産情報発信ビデオ撮影のため。	第181集　桑下城跡	発掘調査画像 181-018.jpg,181-084.jpg,181-113.jpg 181-114.jpg,181-125.jpg　5点	2014/11/7
名古屋市博物館	特別展「感じる縄文時代」に利用のため。	第95集　牛牧遺跡	発掘調査画像 （095-008.jpg,095-028.jpg, 095-029.jpg,095-049.jpg）　4点	2014/11/25
		第110集　権現山遺跡	発掘調査画像 （110-005.jpg,110-006.jpg）　2点	
愛知県 埋蔵文化財調査センター	平成26 年　愛知県図書館埋蔵文化財企画展II 「図書館地下の先人達の息吹- 名古屋城三の丸遺跡-」 に利用のため。	第15集　名古屋城三の丸遺跡	巻頭カラー1　調査区上空より名古屋城　1点	2014/12/15
愛知県 埋蔵文化財調査センター	平成26 年　愛知県図書館埋蔵文化財企画展II 「図書館地下の先人達の息吹- 名古屋城三の丸遺跡-」 に利用のため。	第15集　名古屋城三の丸遺跡	巻頭カラー　灰釉陶器双耳瓶E-2001 （015-001.jpg） 6p　第5 図　(015-000.jpg) 6P　第6図　(015-001.jpg)　3点	2014/12/25
		第37 集 名古屋城三の丸遺跡III	巻頭カラー　磁製人形　E-1539 (037-001.jpg)　1点	
		第53 集 清洲城下町遺跡　IV	天目茶碗61D E-8　(053-337.jpg) 天目茶碗61D E-166　(053-339.jpg)　2点	
朝日新聞出版書籍編集部	書籍「日本発掘」に利用のため。	第147集 一色青海遺跡 II	大型掘立柱建物の検出状況　1点	2015/1/20
有限会社　青垣出版	書籍「結集　邪馬台国時代のクニグニ」に利用のため。	第92集　一色青海遺跡	土偶頭部の写真（092123.jpg）　1点	2015/1/22
		第34集　朝日遺跡	装身具の写真（034013.jpg）　1点	
蟹江町歴史民俗資料館	特別展「貝殻から見える昔のくらし」に利用のため。	第83 集 朝日遺跡VI	96 区SD106 貝層はぎとり SD106 セクション写真（038-185.jpg） SD106 セクション図 96 区第4 面遺構図　4 点	2015/1/26
		第34 集 朝日遺跡V	骨角製品写真（034-021.jpg） 弥生時代のアクセサリー(034-013.jpg)　2点	
		第95集 牛牧遺跡	1 SZ02縄文土器　深鉢（ 095-089.jpg） 11 SZ11 縄文土器　深鉢(095-095.jpg)　2点	
		第101 集 平手町遺跡	写真図版14 No.130（101-026.jpg） 写真図版15 No.90(101-027.jpg) 写真図版16 No.91(101-028 ～031.jpg) 写真図版27 No.405(101-048.jpg)　7点	

ホームページ

公開ファイル

報告書PDF	197件
説明会資料	54件
年報PDF	247件
研究紀要PDF	101件
その他チラシ類	12件
設楽通信などPDF	38件
遺跡位置登録	235件
遺跡アルバム	34,588点

今年度は、新規刊行報告書に加え、一宮市と稲沢市、岩倉市の３市に所在した遺跡の発掘調査報告書（計21冊分）を、OCR済みのPDFで公開した。「全国遺跡資料リポジトリ」への登録は、155冊となった。

Web更新データ

●ブログ更新記事一覧　　合計 35 件

公　開　日	内　　容
2015 年 1 月 27 日（火曜日）	美浜町　権六遺跡（ごんろくいせき）の調査速報
2015 年 1 月 19 日 (月曜日)	豊橋市・キジ山古墳群を歩く（5)
2015 年 1 月 5 日 (月曜日)	栗狭間遺跡　調査速報
2014 年 12 月 24 日 (水曜日)	豊橋市・キジ山古墳群を歩く（4)
2014 年 12 月 12 日 (金曜日)	最北の瓦塔をゆく
2014 年 12 月 5 日 (金曜日)	豊橋市・キジ山古墳群を歩く (3)
2014 年 11 月 28 日 (金曜日)	豊橋市・キジ山古墳群を歩く (2)
2014 年 11 月 26 日 (水曜日)	栗狭間遺跡（豊田市）の調査速報
2014 年 11 月 18 日 (火曜日)	豊橋市・キジ山古墳群を歩く (1)
2014 年 11 月 12 日 (水曜日)	蔵平遺跡（豊田市）の調査速報
2014 年 11 月 4 日 (火曜日)	考古学セミナー「あいちの考古学 2014」
2014 年 10 月 27 日 (月曜日)	栗狭間遺跡の調査速報
2014 年 10 月 15 日 (水曜日)	東小笹遺跡の発掘調査速報　No5
2014 年 9 月 30 日 (火曜日)	西地・東地遺跡の地元説明会のおしらせ
2014 年 9 月 24 日 (水曜日)	歴史講座「食と器」
2014 年 9 月 19 日 (金曜日)	蔵平遺跡　調査速報
2014 年 9 月 10 日 (水曜日)	東小笹遺跡の発掘調査速報　No4
2014 年 9 月 1 日 (月曜日)	体験バスツアーのご案内
2014 年 8 月 21 日 (木曜日)	東小笹遺跡の発掘調査速報　その 3
2014 年 8 月 20 日 (水曜日)	円窓付土器の使い方
2014 年 8 月 8 日 (金曜日)	8 月 9 日開催の地元説明会について
2014 年 7 月 31 日 (木曜日)	蔵平遺跡（豊田市）の調査速報
2014 年 7 月 29 日 (火曜日)	栗狭間遺（豊田市）の調査速報
2014 年 7 月 28 日 (月曜日)	万瀬遺跡（設楽町）地元説明会開催のご案内
2014 年 7 月 24 日 (木曜日)	寄島遺跡（安城市）の発掘調査速報
2014 年 7 月 22 日 (火曜日)	昨年度刊行の報告書 PDF を公開しました。
2014 年 7 月 16 日 (水曜日)	東小笹遺跡の発掘調査速報
2014 年 7 月 14 日 (月曜日)	夏休み特別開館のおしらせ
2014 年 7 月 4 日 (金曜日)	＊＊水入遺跡の調査速報＊＊
2014 年 6 月 27 日 (金曜日)	東小笹遺跡　発掘調査速報
2014 年 6 月 19 日 (木曜日)	今月のギャラリーってご存知でしたか？
2014 年 6 月 12 日 (木曜日)	水入遺跡の発掘調査現場を訪ねて
2014 年 6 月 6 日 (金曜日)	愛知埋文の Twitter
2014 年 4 月 21 日 (月曜日)	新出土品展　やとみ新発見展” 2014　終了
2014 年 4 月 11 日 (金曜日)	新出土品展　やとみ新発見展” 2014　開催中！

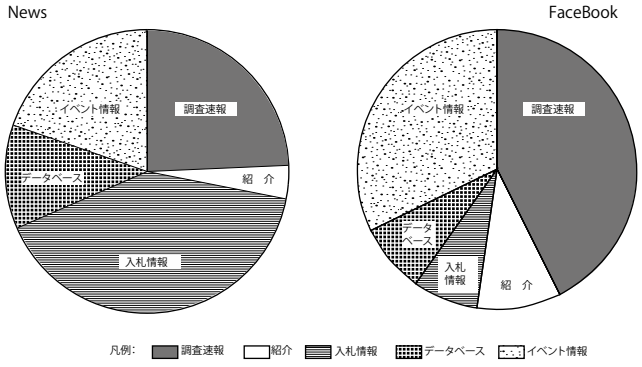
● FaceBook および News 記事一覧

合計 64 件

NewsとFaceBookに掲載する記事は、埋文ブログの更新案内および、入札情報、データベースの更新情報などである。そのため、ブログ記事よりも記事数は多い。今年度１月末までに68件の記事を公開した。ブログ記事は35件である。

右図は、記事のカテゴリー別のアクセス数をまとめたものである。News記事は、公式のHP内のコンテンツの一つである。FaceBookは、外部コンテンツとなっている。各サイトのカテゴリー毎のアクセスに偏りが見られた。両サイトともに、調査速報とイベント情報でカウント数が多いが、入札情報、データベース関連については、Newsを閲覧する人の半数以上が訪れている。これはそれぞれのサイトのユーザー層の違いを表していると考える。

日付	記事数	カテゴリー内訳				
		調査速報	入札情報	紹介	イベント	DB 関連
2015.01	3 件	2		1		
2014.12	5 件		2	3		
2014.11	9 件	3	2	2	1	1
2014.10	6 件	4				2
2014.09	8 件	2			3	3
2014.08	10 件	2	3		3	2
2014.07	13 件	5	4		2	2
2014.06	5 件	2	2		1	
2014.05	1 件		1			
2014.04	6 件		4		2	
合計	68 件	20	18	6	14	10
アクセス数	News	1,643	2,727	256	1,330	800
	FB	3,689	655	842	2,782	688



● Twitter への投稿記事

記事総数　271 件　フォロワー 317 人

月	記事数	リツイート	お気に入り
2015.01	19 件	195	87
2014.12	19 件	233	133
2014.11	19 件	194	104
2014.10	22 件	188	91
2014.09	20 件	279	122
2014.08	21 件	183	71
2014.07	21 件	243	100
2014.06	21 件	197	104
2014.05	20 件	245	183
2014.04	15 件	121	43



Twitterは、４月より５名の担当者で毎日記事を投稿した。今年度は197件である（１月末日現在）。記事の内容については、個々の担当者の裁量によるが、必ず情報企画委員会で検討を行った後に公開した。１月末時点で、フォロワーが303名。リツイートおよびお気に入り数は上記のとおりである。

もっともリツイートが多かった記事は、石座神社遺跡から出土した鉄砲玉に関するもので、リツイートが132件、お気に入りが77件であった。

地元説明会・遺跡報告会

遺跡名	所在地	開催日	参加人数
万瀬遺跡	設楽町川向	平成26年8月9日（土）	28 名　地元説明会
西地・東地遺跡	設楽町大名倉	平成26年10月4日（土）	32 名　地元説明会
栗狭間遺跡	豊田市下山田代町	平成26年10月25日（土）	（於 下山交流館）上半期成果報告会
蔵平遺跡	豊田市下山田代町	平成26年10月25日（土）	（於 下山交流館）上半期成果報告会
栗狭間遺跡	豊田市下山田代町	平成27年2月14日（土）	（於 下山交流館）下半期成果報告会
川向東貝津遺跡	設楽町川向	平成27年3月8日（日）	（於 設楽町役場議場）成果報告会
万瀬遺跡	設楽町川向	平成27年3月8日（日）	（於 設楽町役場議場）成果報告会
西地・東地遺跡	設楽町大名倉	平成27年3月8日（日）	（於 設楽町役場議場）成果報告会

報告書作成のための指導

遺跡名	指導日	指導者	所　属
車塚遺跡	平成26年11月1日（土）	森　泰通	豊田市教育委員会
		岩原　剛	豊橋市埋蔵文化財センター
八巻古窯群	平成26年12月24日（水）	藤澤良祐	愛知学院大学教授
		中野晴久	愛知学院大学講師
		青木　修	瀬戸市文化振興財団
	平成26年12月25日（木）	赤羽一郎	愛知淑徳大学講師
八畝畑遺跡	平成26年12月25日（木）	城ヶ谷和広	愛知県立旭丘高校教頭
薬師ヶ根遺跡	平成27年1月16日（金）	城ヶ谷和広	愛知県立旭丘高校教頭

発掘調査現場における遺構・遺物などの指導

遺跡名	指導日	指導者	所　属
寄島遺跡	平成26年7月31日（木）	伊藤秋男	南山大学名誉教授
万瀬遺跡	平成26年9月26日（金）	平野吾郎	磐田市文化財審議委員

その他普及事業

家族の絆づくり事業『家族で歴史を体験発掘！』

日時：平成26年10月18日（土）午前9:30～午後4:30
対象：小中学生とその家族
参加者：6家族（14名）
内容：
◆午前：奥三河郷土館見学
◆午後：西地・東地遺跡（設楽町）にて発掘体験
<<貸し切りバスで移動>>
9:15豊川駅集合→奥三河郷土館（展示観覧）…（昼食）…12:50（バスにて移動）→13:00西地・東地遺跡（体験発掘等）→15:00（バス移動）　→16:30豊川駅到着・解散

ファミスポフェスタ　2014

県民交流事業
「かぞくであそぼうファミスポフェスタ」

日時：平成27年1月10日(土)午前10:00～午後4:00
場所：愛知県体育館
内容：「遺跡の調査」のパネル展示を正面ロビーで行った。

平成26年度　愛知県埋蔵文化財センター　組織一覧

運営協議会委員

足立　守	名古屋大学 PhD 登龍門推進室特任教授
稲葉伸道	名古屋大学大学院文学研究科教授
加藤正俊	愛知県都市教育長協議会会長 豊橋市教育委員会教育長
加藤安信	大同大学大同高等学校校長
柴垣勇夫	元愛知淑徳大学教授
溝口正巳	愛知県教育委員会生涯学習監
難波洋三	独立行政法人国立文化財機構 奈良文化財研究所 埋蔵文化財センター長
藤澤良祐	愛知学院大学教授

専門委員

考古学	伊藤秋男	南山大学名誉教授
考古学	柴垣勇夫	元愛知淑徳大学教授
文献史学	福岡猛志	日本福祉大学名誉教授
地理学	海津正倫	奈良大学教授
建築史学	麓　和善	名古屋工業大学大学院教授
考古学 **動物学** **植物学**	渡辺　誠	名古屋大学名誉教授
形質人類学	多賀谷　昭	長野県看護大学教授
保存科学	高妻洋成	独立行政法人国立文化財機構 奈良文化財研究所　埋蔵文化財研究所 保存修復学研究室長
岩石学	諏訪兼位	名古屋大学名誉教授
木材組織学	木方洋二	名古屋大学名誉教授

センター長

間宮一高

副センター長

赤塚次郎

管理課

管理課長	浅井重一
主　査	森　清
	榊原聡史
主　事	藁科有紀子

調査課

調査課長	石黒立人	
統括専門員	宮腰健司	
主任専門員	酒井俊彦	池本正明
調査研究専門員	松田　訓	鈴木正貴
	樋上　昇	堀木真美子
	永井宏幸	鬼頭　剛
	武部真木	
調査研究主任	蔭山誠一	川添和暁
	永井邦仁	早野浩二
調査研究主事	町田義哉	鈴木恵介
嘱　託　員	小澤一弘	

愛知県埋蔵文化財センター調査報告書

水入遺跡

–伊勢湾岸道豊田東IC料金所増設に伴う事前調査–

2015

公益財団法人 愛知県教育・スポーツ振興財団
愛 知 県 埋 蔵 文 化 財 セ ン タ ー

水入遺跡発掘調査報告

調査の経緯と経過　水入遺跡は豊田市渡刈町に所在する。本発掘調査は、伊勢湾岸道豊田東 IC 料金所増設に伴う事前調査として、中日本高速道路株式会社より愛知県教育委員会を通じて受けた委託事業である。調査面積は 200 ㎡、調査期間は平成 26 年 4 月 1 日～5 月 30 日である。調査は当センター調査課武部真木（調査研究専門員）と町田義哉（調査研究主事）が担当した。遺跡の位置は、北緯 35 度 1 分 53 秒、東経 137 度 9 分 44 秒、県遺跡番号は 630475 である。調査工程は、現地表面から調査開始面までに到る盛土除去、盛土北西壁上端部を通る光ケーブル埋設物養生・壁面崩落防止対策までを事業者が行ない、その後、表土・遺構掘削及び測量 (註 1) を (株) 文化財サービスが実施した。調査は重機作業ヤードを確保するため、東半分と西半分に 2 分割して調査を行った。

地理的・歴史的環境　水入遺跡の所在する豊田市は愛知県北部中央（西三河地方）に位置し、面積は約 918 ㎢、県全体のおよそ 2 割を占める県下最大面積の都市である（図 1）。

遺跡は市の南西部、渡刈町大屋敷から下糟目に位置し、矢作川右岸に広がる碧海台地縁辺部の沖積低地に立地する。左岸から巴川が合流し、矢作川の川幅が急激に広がる場所の側であり、北東側から南西側には矢作川を源とする明治用水が流れる。

矢作川は長野県に源を発し、岐阜県、愛知県を流れ、三河湾に注ぐ、全長 117km の一級河川である。上流域には風化して真砂化しやすい花崗岩が多く、多量の土砂を産み出す要因となっている。この土砂が中・下流域まで運ばれ、堆積し、江戸時代初期には矢作川は天井川化していく。それに伴い、川が蛇



写真1　水入遺跡遠景（北東から）



図1　水入遺跡位置図

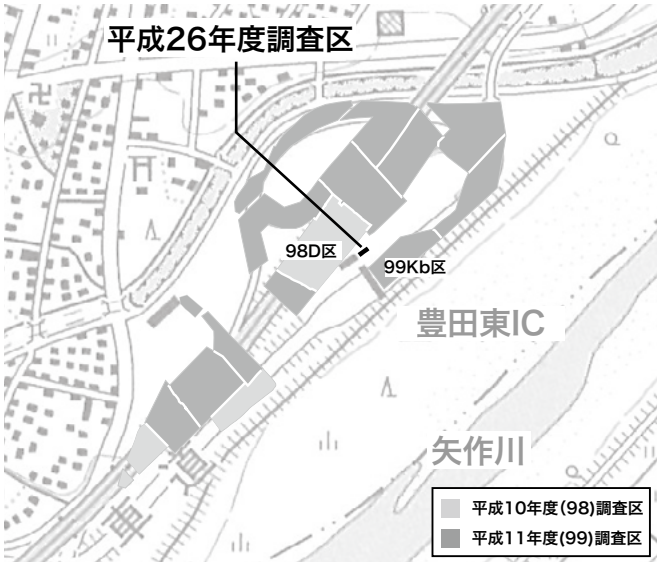


図2　水入遺跡調査区配置図（1:10,000）

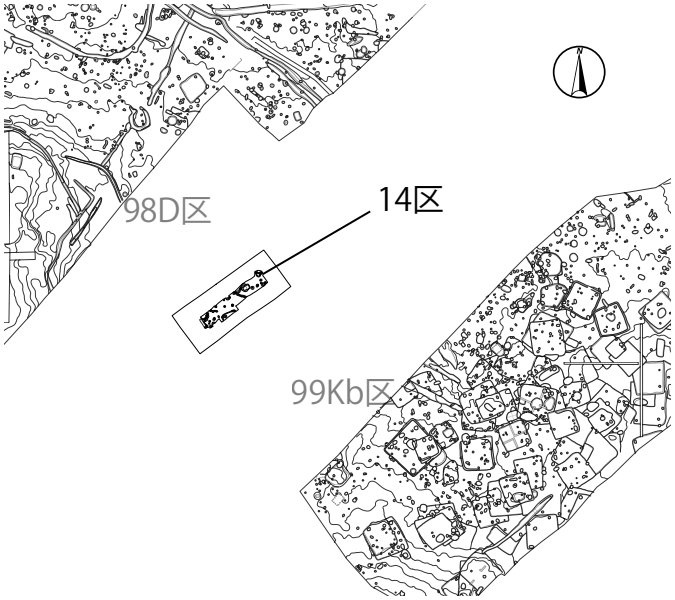


図3　14区と旧調査区の位置関係図（1:1000）

行する中・下流域周辺では近世から近・現代に到るまで、幾度となく水害が繰り返され続けてきた[註2]。江戸時代には渡刈村（現渡刈町）南西に位置する東西鴛鴨村（現鴛鴨町）のように集落ごと高台に移転した例も存在する[註3]。矢作川の遊水池的な場所だったことは、「水入」の通称名が残っていることから推測される[註4]。

周辺には、碧海台地上を中心に後期旧石器時代の大明神A遺跡、縄文時代の北田遺跡、西糟目遺跡（共に消失）、縄文時代～中世の神明遺跡、縄文時代～近世の今町遺跡、古墳時代～近世の天神前遺跡、古墳時代～近世の郷上遺跡などが展開している。

過去の調査　豊田東ICの建設に伴い、平成10年度に範囲確認調査が行われ、平成10～11年度の2ヶ年にわたって、本調査が行なわれた（図2）。

過去の調査では、後期旧石器時代の石器を始めとし、縄文時代草創期～早期の焼土坑群、中期後葉～後期後葉の竪穴建物など、晩期の土器棺墓、弥生時代末期の竪穴建物など、古墳時代中期の大溝、竪穴建物、掘立柱建物など、奈良・平安時代の竪穴建物、掘立柱建物など、鎌倉時代の竪穴建物、掘立柱建物、土坑墓など、戦国時代から江戸時代前半にかけての区画溝、竪穴建物、掘立柱建物など、江戸時代後半の水田、土坑など、様々な遺構や遺物が確認されている。

本年度の調査区（14区）は98D区と99Kb区に挟まれた未調査区域に該当する（図3）。98D区の主な遺構としては奈良・平安時代時代の竪穴建物、掘立柱建物、鎌倉時代の竪穴建物、掘立柱建物、土坑墓、戦国時代の掘立柱建物などが、99Kb区からは後期旧石器時代の石器や縄文時代の竪穴建物、奈良・平安時代の竪穴建物、鎌倉時代の掘立柱建物・土坑墓などが確認されている。

基本土層　現況では旧地表面（平成10～11年度調査時）上に豊田東IC建設による石垣の石材大の花崗岩が混在する厚さ約4mの盛土が存在している。

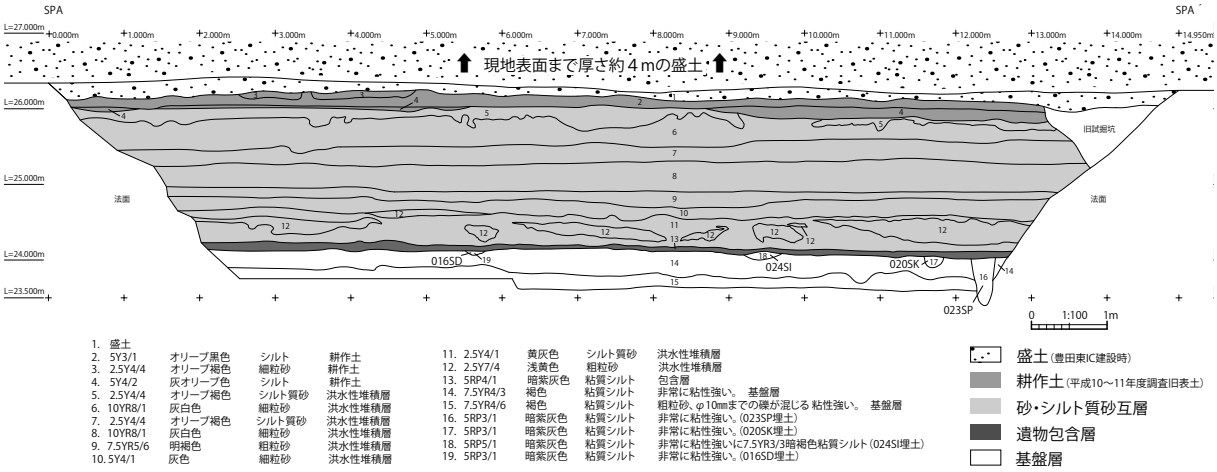


図4　調査区南壁土層断面図（1:100）

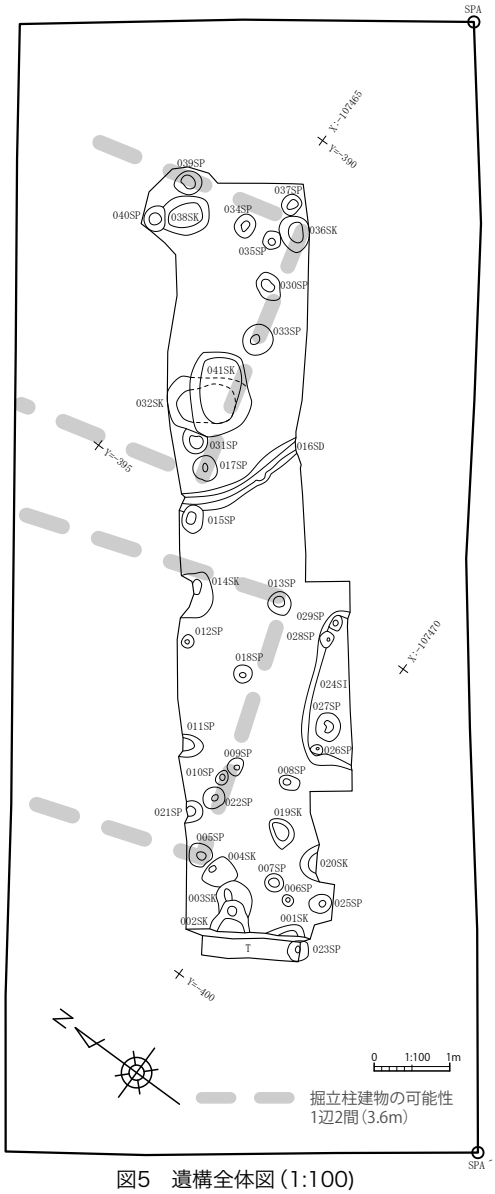


図5　遺構全体図（1:100）

表1　遺構一覧

遺構名	長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)	埋土
001SK	0.52	(0.15)	0.07	5RP3/1暗紫灰色粘土質シルト　非常に粘性強い
002SK	(0.17)	0.53	0.3	5RP3/1暗紫灰色粘土質シルト　非常に粘性強い
003SK	(0.15)	0.47	0.12	5RP4/1暗紫灰色粘土質シルト　非常に粘性強い
004SK	0.44	(0.38)	0.11	5RP3/1暗紫灰色粘土質シルト　非常に粘性強い
005SP	0.32	0.32	0.10	5RP3/1暗紫灰色粘土質シルト　非常に粘性強い
006SP	0.16	0.16	0.21	5RP3/1暗紫灰色粘土質シルト　非常に粘性強い
007SP	0.26	0.24	0.06	5RP3/1暗紫灰色粘土質シルト　非常に粘性強い
008SP	0.28	0.2	0.16	5RP3/1暗紫灰色粘土質シルト　非常に粘性強い
009SP	0.24	0.2	0.34	5RP3/1暗紫灰色粘土質シルト　非常に粘性強い
010SP	0.2	0.16	0.04	5RP3/1暗紫灰色粘土質シルト　非常に粘性強い
011SP	(0.27)	0.3	0.06	5RP3/1暗紫灰色粘土質シルト　非常に粘性強い
012SP	0.18	0.17	0.16	5RP3/1暗紫灰色粘土質シルト　非常に粘性強い
013SP	0.3	0.3	0.32	5RP3/1暗紫灰色粘土質シルト　非常に粘性強い
014SK	0.58	(0.27)	0.16	5RP3/1暗紫灰色粘土質シルト　非常に粘性強い
015SP	0.38	0.28	0.13	5RP4/1暗紫灰色粘土質シルト　非常に粘性強い
016SD	-	0.28	0.06	5RP3/1暗紫灰色粘土質シルト　非常に粘性強い
017SP	0.33	0.32	0.08	5RP3/1暗紫灰色粘土質シルト　非常に粘性強い
018SP	0.25	0.23	0.20	5RP3/1暗紫灰色粘土質シルト　非常に粘性強い
019SK	0.4	0.3	0.08	5RP3/1暗紫灰色粘土質シルト　非常に粘性強い
020SK	0.48	(0.22)	0.10	5RP3/1暗紫灰色粘土質シルト　非常に粘性強い
021SP	(0.21)	0.28	0.13	5RP3/1暗紫灰色粘土質シルト　非常に粘性強い
022SP	0.29	0.29	0.44	5RP3/1暗紫灰色粘土質シルト　非常に粘性強い
023SP	0.29	0.27	0.55	5RP3/1暗紫灰色粘土質シルト　非常に粘性強い
024SI	2.3	(0.7)	0.18	図6参照
025SP	0.3	0.25	0.28	5RP3/1暗紫灰色粘土質シルト　非常に粘性強い
026SP	0.16	0.13	0.12	7.5YR3/3暗褐色粘土質シルト　非常に粘性強い
027SP	0.38	0.33	0.21	10YR4/4褐色粘土質シルト　非常に粘性強い 粗粒砂が混じる
028SP	0.22	0.19	0.28	5RP3/1暗紫灰色粘土質シルト　非常に粘性強い
029SP	0.23	0.2	0.20	7.5YR3/3暗褐色粘土質シルト　非常に粘性強い
030SP	0.4	0.3	0.21	5RP3/1暗紫灰色シルト～細粒砂　非常に粘性強い
031SP	0.35	0.28	0.19	5RP3/1暗紫灰色シルト～細粒砂　非常に粘性強い
032SK	1.11	0.77	0.30	図7参照
033SP	0.41	0.4	0.23	10YR3/3暗褐色細粒砂　粘性強い
034SP	0.32	0.28	0.08	10YR3/3暗褐色細粒砂　粘性強い
035SP	0.24	0.23	0.05	10YR3/3暗褐色細粒砂　粘性強い
036SK	0.49	0.41	0.07	10YR3/3暗褐色細粒砂　粘性強い
037SP	0.27	0.24	0.06	10YR3/3暗褐色細粒砂　粘性強い
038SK	(0.66)	0.51	0.13	5RP3/1暗紫灰色シルト～細粒砂　非常に粘性強い
039SP	0.37	0.31	0.19	5RP3/1暗紫灰色シルト～細粒砂　非常に粘性強い
040SP	0.34	0.28	0.29	5RP3/1暗紫灰色シルト～細粒砂　非常に粘性強い
041SK	1.11	0.8	0.12	図7参照



写真3　024SI完掘状況（北から）



写真4　024SI出土遺物（1:2）

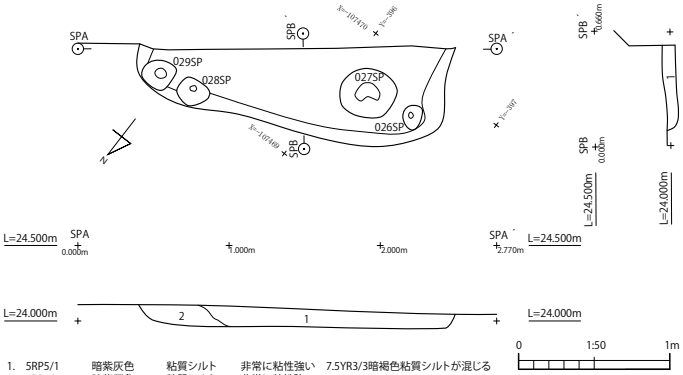


図6　024SI平面・断面図（1:50）



写真2　調査区南西壁断面（北西から）

耕作土層（旧表土）下には約 1.8m の砂とシルト質砂の互層状堆積が見られる。この堆積層は今までの調査から、近世～近・現代に到る約 400 年間の洪水と耕作の繰り返しにより形成された層であることがわかっている。その下の 3 ～ 14cm の厚さで堆積している暗紫灰色を呈する粘土質シルトが山茶碗片を含む近世初頭以前の遺物包含層である。更にその下の褐色を呈する粘土質シルト層（基盤層）の上面が本調査区の遺構検出面となっている（写真 2、図４）。

トレンチを設定し、遺構検出面から約 0.5m 掘り下げて下層を確認を行なったが、礫混じり、褐色粘質シルトの自然堆積層を確認したのみである。

遺構・遺物　径 20 ～ 40cm を測るピット 28 基、径 40 ～ 110cm の土坑 11 基、溝 1 条、竪穴建物 1 基が検出されている（図 5・表 1）。しかしながら、遺構内から遺物はほとんど出土しておらず、時期が不明確なのものが大半を占めている。

024SI は北辺長 2.3m、深さ 18cm、北辺の方位 N-66° -E を測る、隅丸方形または隅丸長方形を呈すると考えられる竪穴建物である（図 6、写真 3）。当初は調査区南壁沿いに北西角部分がわずかに検出されたのみであったが、補足調査として南側を拡張した結果、北辺を確認することができた。遺構内からは 4 基のピット、026SP、027SP、028SP、029SP を検出している。壁溝やカマド・炉跡などは検出されていない。出土した遺物は 1 点のみである。E-001 は表裏面とも剥落が著しい土師器甕の胴部片である（写真 4）。時期を特定できる遺物はないが、過去に調査された 98D 区からは奈良・平安時代の一辺が 2 ～ 3 m の小型の竪穴建物が複数検出されており、024SI も当該期の所産と推定される。その規模から住居としてではなく、作業場などの施設として使われていた可能性を考えておきたい。

032SK と 041SK は重複関係にある土坑である（図 7、写真 12）。032SK は長軸 111cm、短軸 77cm、深さ 30cm 主軸方位 N-39° -W を測る隅丸長方形に近い形を呈する土坑である。041SK が上に折り重なるような形で 032SK 東側の掘り方を切っている。041SK は長軸 111cm、短軸 80cm、深さ 12cm、主軸方位 N-54° -E を測る 032SK と似た平面形を呈する土坑である。深さは浅く、032SK の上部だけを切る。いずれの土坑も遺物の出土がないため、時期の確定には至らないが、98D 区と 99Kb

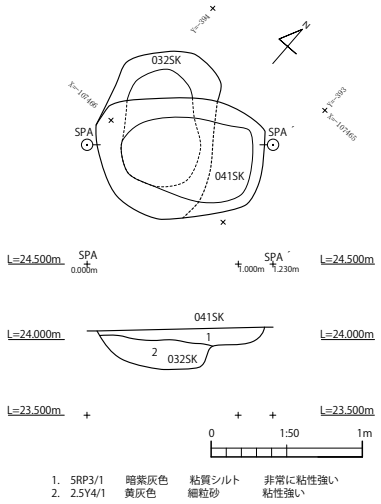


図7　032・041SK 平面・断面図（1:50）

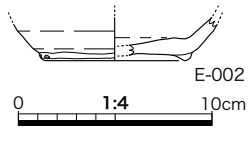


図8　030SP 出土遺物実測図（1:4）

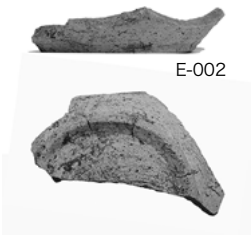


写真6　030SP 出土遺物（1:4）

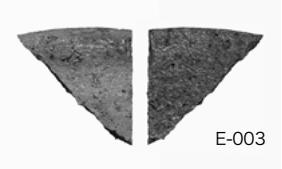


写真7　040SP 出土遺物（1:2）

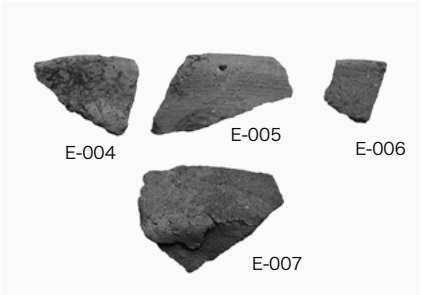


写真8　遺構外出土遺物（1:2）

区の両調査区から、同様な規模の鎌倉時代の土坑墓が検出されていることから、当該期の遺構と推定される。

030SP、040SP は単層のピットである。いずれの遺構からも山茶碗が出土している。E-002 は 030SP から出土した山茶碗底部（図 8･写真 6）である。底部に回転糸切り痕、高台部に籾殻痕がある。底部内面に稜をもつ特徴から、尾張型第 6 型式 [註 5]。E-003 は 040SP から出土した山茶碗の口縁部小片である（写真 7）。口唇部から口縁部内面に薄く自然釉が掛かる。口縁部外面の抉れ気味の強いロクロ痕と口唇部内側の鋭角的な立ち上がり方から、第 7 型式。

掘立柱建物は、過去の調査の方位軸、規模を参考にして、2 間 (3.6m) を限度として復元を試みたが、ピットの大きさや深さに一貫性が見られないことと、検証可能なのが最大一列のピットのみであることから、あえて可能性を図示するだけに留めた（図 5、表 1）。

遺物包含層出土遺物のうち、器種及び部位の判別が可能なものだけ、写真掲載した (写真 8)。E-004 ～ E-006 は山茶碗の口縁部片、E-007 は山茶碗の底部片である。底部に名残のような帯状の低い高台が残ることから、第 7 型式と推定される。

未掲載であるが、ほかにチャートの剥片、器種･時期不明の土器細片、洪水性堆積層からも山茶碗小片、耕作土からは常滑産赤物の甕胴部片が出土している。出土遺物の総量はコンテナ 1 箱、総点数 16 点を数える。

自然科学分析　加速器質量分析法（AMS 法）による放射性炭素年代測定を行っている。洪水性堆積の 11 層中から採取した 2 点の炭化物サンプル中 1 点は 17 世紀中頃～ 19 世紀初頭および 20 世紀前半以降、もう 1 点は 17 世紀中頃～後半および 18 世紀後半、遺物包含層から採取した 3 点中 2 点は 12 世紀後半～ 13 世紀前半と 13 世紀代、もう 1 点は縄文時代後期初頭に相当する暦年代を示した [註 6]。

まとめ　下端幅 2 m 前後と狭小な調査区であったが、竪穴建物、土坑墓、掘立柱建物になる可能性があるピットなど 41 基にのぼる遺構が確認された。遺物の出土量が少なく、明確な時期の特定には至らなかったが、概ね奈良・平安時代～鎌倉時代にかけてが主であろう。

今まで調査区の間の未調査区域となっていた場所でも、過去の調査とほとんど変わらない密度で、遺構が存在することが明らかになった意義は大きい。今後、この近隣の箇所で今回と類する改変工事が行われる場合には発掘調査が必要となる。

今回は、調査開始面に到るまでに大型礫が混在する崩落の危険性がある厚さ 4m の盛土が存在していたため、法面の崩落防止対策を行なう必要があった。更に、盛土開口部沿いに光ケーブルが埋設されていることが判明したため、万全な保護対策が行なわれ、調査開始までに予想外の時間が費やされた。また、調査中の安全を確保するために、労働安全衛生法に基づき、盛土法尻及び光ケーブル周辺部の保護･崩落防止施設（トン袋）端から幅 2m の小段を調査区の周囲に確保し [註 7]、尚かつ、調査開始面下にも崩落しやすい砂質土が 2m 近く堆積していたため、重機掘削時に 45°勾配の法面を設定することとなり、調査工程の組み直しが必要となった。今後の課題として、同様な調査を行う場合、事前準備に時間をかけ、調査施行工法を綿密に精査していくことが必要であろう。

（町田義哉）

【註】

1　座標数値は世界測地系に基づき、国土交通省が定めた平面直角座標第Ⅶ系に準拠する。標高基準は T.P. を使用した。挿図表記も同様である。

2　国土交通省中部地方整備局・国土地理院　2008 『三河・尾張　川の流れと歴史のあゆみ』 中部地方の古地理に関する調査報告書　pp80-106

3　加藤博紀　2000 『年貢割附状』からみた江戸時代の災害　―明和 4 年亥年の水害と碧海郡西鶏鴨村― 『研究紀要』第 1 号　愛知県埋蔵文化財センター

4　永井邦仁ほか　2005 『水入遺跡』 愛知県埋蔵文化財センター調査報告書　第 108 集

5　愛知県史編纂委員会 2007『愛知県史 別編 窯業 2 中世・近世 瀬戸系』 pp16　愛知県

6　伊藤茂ほか　2014 「水入遺跡放射性炭素年代測定」 パレオ・ラボ AMS 年代測定グループ

7　伊藤和也ほか　2011 小段幅の違いが斜面の安定性や崩壊形状に与える影響に関する剛塑性有限要素解析「労働安全衛生研究」Vol.4 No.2 pp71-77 (PDF)（https://www.jstage.jst.go.jp/article/josh/4/2/4_2_71/_pdf）

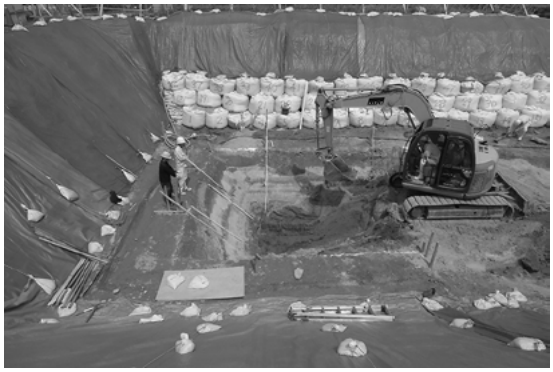


写真9　表土重機掘削作業

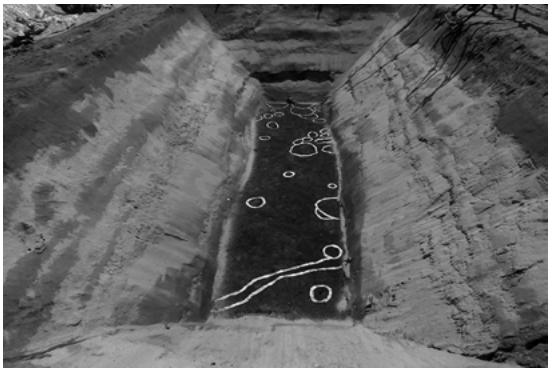


写真10　遺構検出状況（北東から）



写真11　遺構掘削作業風景

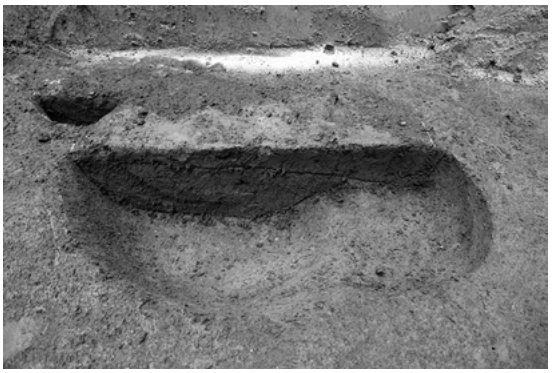


写真12　032SK・041SK断面（南東から）



写真13　調査完了（南から）



写真14　水入遺跡調査区全景合成（上：南西）

抄　録

ふりがな	みずいりいせき
書　　名	水入遺跡
副 書 名	–伊勢湾岸道豊田東IC料金所増設に伴う事前調査–
巻　　次	
シリーズ名	愛知県埋蔵文化財センター調査報告書
シリーズ番号	
編著者名	町田義哉
編集機関	公益財団法人　愛知県教育・スポーツ振興財団　愛知県埋蔵文化財センター
所在地	〒498-0017 愛知県弥富市前ヶ須町野方802-24　TEL 0567(67)4161
発行年月日	西暦 2015年 3月 31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積	調査原因
みずいりいせき 水入遺跡	あいちけん　とよたし 愛知県豊田市 とがりちょう しもかすめ 渡刈町下糟目	23211	630475	35度 1分 53秒	137度 9分 44秒	2014.04.01～ 2014.05.30	200㎡	豊田東IC 料金所増 設に伴う 事前調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
水入遺跡	集落跡	奈良・平安 時代 ～ 鎌倉時代	竪穴建物、 ピット、土坑	土師器甕、 山茶碗	

文書番号	発掘届出(25埋セ第147号・2014.3.13)　通知(26教生第16号・2014.4.4) 終了届・保管証・発見届(26埋セ第35号・2014.5.30) 鑑定通知(豊教文第894号・2014.6.17)
要約	本遺跡は、奈良・平安時代～鎌倉時代の集落遺跡である。発掘調査では狭小な面積にも関わらず、多数の遺構が確認された。遺物の出土量は少なかったが、未調査区域でも高い密度で、遺構が存在することが明らかになった意義は大きい。

年報　平成26年度

平成27年3月
編集・発行　(公財)愛知県教育・スポーツ振興財団
愛知県埋蔵文化財センター
印　刷　新日本法規出版株式会社